

HIROSHIMA UNIVERSITY BHS NEWS

Hiroshima University Graduate School of Biomedical & Health Sciences

目次

Greetings	ご挨拶	2
Activities	活動	4
My Motto	座右の銘	6
Research Frontline	研究最前線	7
Prize Winner	各賞受賞者リスト	8
Air Mail	広大から海外へ留学している若手の日記	10
Meeting Report	院生の国際学会参加報告	11
Going Abroad	若手研究者等海外派遣プログラム実施報告	18
News Digest	最近の新聞記事から	35
Meeting Record	学会等開催記録	40
人事異動		49
Congratulations	大学院修了者一覧	52
平成24年度受託研究受入・民間等との共同研究実績状況		59
平成24年度奨学寄附金受入状況		59
寄贈図書一覧		60
編集後記		61



目次		
Greetings	ご挨拶 「臨床血液学の新たな可能性を求めて」…………… 一戸 辰夫 …	2
Greetings	ご挨拶 「就任のご挨拶」…………… 大平 光子 …	3
Activities	活動 …………… 小林 正夫 …	4
	「臨床情報医工学に卓越した地域の先進医療をチームで担う人材育成」	
Activities	活動 …………… 越智 光夫 …	5
	「再生医療の実現化プロジェクト 再生医療の実現化ハイウェイ」	
My Motto	座右の銘 「Serendipity (幸運な発見)」…………… 高田 隆 …	6
Research Frontline	研究最前線 …………… 樋木 修 …	7
	「イノシトールリン脂質代謝酵素欠損細胞群の作成」	
Prize Winner	各賞受賞者リスト……………	8
Air Mail	広大から海外へ留学している若手の日記…………… 林 哲太郎 …	10
	「CanadaのBritish Columbia大学留学便り」	
Meeting Report	院生の国際学会参加報告 ……………	11
Going Abroad	若手研究者等海外派遣プログラム実施報告 ……………	18
News Digest	最近の新聞記事から ……………	35
Meeting Record	学会等開催記録 ……………	40
人事異動	……………	49
Congratulations	大学院修了者一覧 ……………	52
	平成24年度受託研究受入・民間等との共同研究実績状況 ……………	59
	平成24年度奨学寄附金受入状況 ……………	59
	寄贈図書一覧……………	60
	編集後記…………… 宮下 美香 …	61
	表紙写真説明……………	61



臨床血液学の新たな可能性を求めて

一戸 辰夫 原爆放射線医科学研究所 放射線災害医療研究センター
血液・腫瘍内科研究分野 教授

皆様、はじめまして。このたびご縁をいただき、本年の1月より原爆放射線医科学研究所の血液・腫瘍内科研究分野を担当させていただくこととなりました。生まれは宮城県仙台市、出身大学は京都大学で1989（平成元）年卒業です。生来の放浪癖がたたり(?)、東は静岡から西は佐賀まで5つの教育・医療機関を渡り歩いて参りましたが、知命を目前にして、ようやく地に足を着けて仕事ができることを本当に嬉しく感じています。

専門の研究領域は造血細胞移植で、これまで400件以上の移植に関与するとともに、高齢者にも適応可能な移植プログラム（いわゆる「ミニ移植」）の開発や、母子間マイクロキメリズムという現象を免疫寛容の指標として利用する新しいHLA不適合ドナー選択法の実現に取り組んできました。そもそも私が血液学を専攻した理由は、急性白血病の寛解導入療法に代表されるような独特な診療のダイナミズムに魅了されたからですが、続々と分子標的薬が開発され、血液疾患の治療理念に大きな変革がもたらされている現状を当時と比較いたしますとまさに隔世の感があります。今後は、これらの新規薬剤と造血細胞移植のコラージュによって難治性血液疾患の治療成績を向上させていくことが大きなテーマです。

私たちの研究分野では、血液・腫瘍内科学に関連する研究と診療に加え、放射線災害医療に精通する人的資源を育成する役割を有していますが、着任後、これらのミッションを発展的に遂行していくために3つの目標を掲げました。まず、1つ目は若手研究者が創造的な活動に没頭できる時間としての“protected time”の確保です。特に、教員と大学院生のほとんどが臨床業務に従事しながら研究を行っていることから、診療の質の向上と研究時間の確保という一見背反する課題を克服するために、この春から主治医制を発展的に解消してチーム制による病棟診療システムを導入いたしました。2つ目は、研究部門と臨床部門のコミュニケーションの活性化です。それぞれの領域があまりに高度化したために、ともすると研究者と臨床医の間には物理的あるいは感覚的な隙間が形成されがちですが、お互いが相互理解のための対話を重ねながら創造性を高めていけるシステムを作っていきたいと考えています。そして、3つ目は、広島という場所で医学研究に携わることの意味を自らに問い続けることです。一昨年の福島を例にとるまでもなく、現在でも世界各地で放射線災害が発生している現実を踏まえ、原医研の臨床部門として生命科学や医療技術の社会的意義を実践を通じて思考し続けていくことが重要と考えています。

以上のような目標を掲げながら元気で明るい研究室の運営を目指して、現在は日々奔走中です。霞キャンパスに集うすべての学生と職員の皆さんにおかれましては、目の前をルイス・キャロルの「白ウサギ」のように走り抜けて行く私に出会いませうとお気軽に声を掛け下さい。



就任のご挨拶

大平 光子 医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門 保健学分野
助産・母性看護開発学 教授

このたび、横尾京子教授の後任として、広島大学大学院医歯薬保健学研究院統合健康科学部門保健学分野助産・母性看護開発学の教授を拝命し、平成25年4月1日付で着任いたしました。これまで多数の優秀な人材を輩出してこられた医歯薬保健学研究科で、看護学教育および研究に携わらせて戴くことは誠に光栄であるとともに、責任の重さを感じております。紙面をお借りして皆様にご挨拶申し上げます。

私は、大阪大学医療技術短期大学部看護学科および大阪大学医学部附属助産婦学校を卒業後、大阪大学医学部附属病院に勤務し、数多くの妊産婦さん・新生児とご家族との出会いの中で、看護師・助産師として育てていただきました。その後、愛媛県立医療技術短期大学の助手として勤務していた折、千葉大学看護学部で国内研修を受ける機会に恵まれました。その縁で、千葉大学大学院看護学研究科において、前原澄子先生（現 京都橘大学）ならびに森恵美先生より薫陶を受け、母性看護学分野における研究の基礎を学ばせていただきました。

大学院では博士前期・後期課程を通じて、先輩諸氏の研究成果を受け継がせていただき、母親役割獲得過程に対する看護介入とその評価の研究に取り組みました。学位取得後は、妊娠期からの子ども虐待予防や子育て支援プログラムに関する研究、看護実践能力の発達過程および助産教育方法に関する研究を行ってまいりました。また、これまでに在職した三重県立看護大学、大阪府立看護大学（現 大阪府立大学地域保健学域看護学類）、山形県立保健医療大学で出会った先輩諸氏や同僚、また共同研究チームの方々からは、看護学教育および助産教育の在り方、看護実践能力育成のための教育方法や研究について数多くのことを学ばせて頂きました。

母性看護学および助産学分野は、人間の生涯にわたる性と生殖の健康の維持・増進・疾病予防を基盤として次世代の育成を目指すことを役割としております。また、女性・子ども・家族の健康はとりわけ社会環境の影響を受けやすく、母性看護学・助産学の果たす役割はますます拡大するとともに、より個別的な看護実践能力が求められております。

このような状況を受け、教育研究においては、すべての人の性と生殖に関する健康および女性と家族の生涯にわたる健康を支援できる人材の育成を目指したいと考えます。助産・母性看護開発学研究室では、すべての人が生と性をいつくしみ、新しい命を安心して安全に生み育てることを支え得る看護の開発を目指して、周産期の看護、性と生殖の健康支援、リプロダクティブヘルス／ライツにおける意思決定を支える看護、女性と家族のヘルスプロモーションに関する研究テーマに取り組んでいきたいと考えております。

浅学にして非才の身でございますので、皆様方の温かいご支援とご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



臨床情報医工学に卓越した地域の先進医療をチームで担う人材育成

小林 正夫 医歯薬保健学研究科長
臨床情報医工学共同教育推進事業運営センター長

平成24年度の文部科学省「大学間連携共同教育推進事業」に広島大学（医歯薬保健学研究科）を代表校として、広島市立大学、広島工業大学、広島国際大学の4大学が連携した「臨床情報医工学に卓越した地域の先進医療をチームで担う人材育成」が採択されました。本事業は平成20-21年度の「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」の後継プログラムであり、1大学では対応困難な様々な地域・分野での課題に対して、各大学がそれぞれの強みを活かしながら連携・共同して解決にあたるプログラムです。平成24年度からの5年間の継続事業であり、毎年数千万円の補助が予定されています。

本事業の主たる視点は使命の明確化（強みの主張）、教育改革（大学の垣根を越えた社会の課題解決に導く教育課程構築）、社会との協働（学生を送り出す地域や分野に関わるステークホルダーと課題を共有、協働した体制の構築）であり、人材輩出の観点から、「地域連携」と「分野連携」に分けられています。この「臨床情報医工学に卓越した地域の先進医療をチームで担う人材育成」プログラムは広島市近郊にキャンパスを構える広島大学・広島国際大学（医療系）、広島市立大学（情報系）、広島工業大学（工学系）の4大学の地域連携型として採択されました。

本プログラムは異分野融合教育により高度チーム医療人の育成を目的としています。臨床医学・医療分野の発展には医療系、情報系、工学系の異分野連携が必須であり、4大学がそれぞれの特徴を活かした教育・研究を展開します。臨床情報医工学に卓越した先進医療をチームで担うことができる高度専門医療人を輩出し、広島地域における医療の発展と社会貢献を目指しています。地域に根ざしたステークホルダー（自治体・企業・NPO法人・医療施設）にもご協力いただき、地域の声を大学の人材育成に活かす体制を構築しています。広島地域では、医療・工学・情報の異分野融合教育を受け、臨床現場で活躍できる人材が、まだまだ不足しているのが現状です。地域で真に求められる人材を着実に育成することが大学に課せられた使命であり、4大学が中心となって、ステークホルダーとの協働のもとに事業を推進し、地域貢献に資する先進医療をチームで担うことができる人材を育成します。これらの人材が地域における医療の発展と社会貢献に寄与できるよう、本事業を展開していきたいと考えています。

平成25年度の各大学の学部入学生を対象として4大学間では双方向授業のシステムが完成し、平成25年4月より本プログラムの受講を開始しています。

新しい広島大学大学院医歯薬保健学研究科、医学部、歯学部、薬学部の一つの目玉として、構成員の協力を得ながら今後事業を発展していく予定です。ご協力をよろしくお願い申し上げます。





再生医療の実現化プロジェクト 再生医療の実現化ハイウェイ

越智 光夫 医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門 医学分野 整形外科 教授

このたび、文部科学省の国家課題対応型研究開発推進事業の一つである「再生医療の実現化プロジェクト 再生医療の実現化ハイウェイ」に私達が提案した「磁性化骨髄間葉系細胞の磁気ターゲティングによる骨・軟骨再生」が採択されましたので、報告します。

再生医療分野における日本の研究レベルは世界トップクラスですが、いわゆるドラッグラグやデバイスラグの問題と同様に、研究成果を実用化・産業化するための基盤整備については十分とは言えないのが現状です。これまでに日本で実用化された再生医療製品は自家培養表皮「ジェイス®」と私が開発に関与し、技術移管した自家培養軟骨「ジャック®」の2製品しかなく、韓国に大きく遅れをとっています。そこで本プロジェクトでは、このような研究成果と実用化の間に存在する「死の谷」と呼ばれる大きなギャップを克服するために、文部科学省、厚生労働省、経済産業省が協力して、基礎研究成果を臨床試験へ迅速かつシームレスに移行させることを目的としています。平成24年度は支援総額3億円で、「短期で臨床研究への到達を目指す課題A」と「中長期で臨床研究への到達を目指す課題B」が1件ずつ選ばれ、私達の研究は課題Aで採択されました。なお、課題Bに採択されたのは京都大学iPS細胞研究所の「iPS細胞技術を基盤とする血小板製剤の開発と臨床試験」であり、iPS細胞初の臨床試験としてマスコミで大きく取り上げられている理化学研究所・高橋政代先生の「iPS細胞由来網膜色素上皮細胞移植による加齢黄斑変性治療の開発」は本プロジェクトの課題Aとして前年度に採択されています。

私達は、関節の軟骨を損傷した患者さんに対して、小さな軟骨片から採った軟骨細胞をコラーゲンゲルの中で培養して軟骨組織を作り、損傷部へ移植する軟骨再生治療をすでに130症例以上に行い、良好な治療成績をあげており、J-TECのJACCとして、2013年4月1日から保険収載されることが決まりました。自分の開発した技術が保険収載されることは外科医にとって大変名誉なことではありますが、次世代を見続けなければなりません。高齢者では、軟骨細胞が増殖しづらいことや、治療のために手術で関節を開く必要があることなど、改良する余地も残されています。そこで、軟骨などの元となり、増殖能力の高い骨髄間葉系幹細胞をMRI造影剤で磁性化し、体内へ注射しながら、体外から磁場で細胞を損傷部へ誘導する「磁気ターゲティングシステム」を開発しました（下図）。これまでに様々な組織の損傷モデルで基礎研究を重ねており、本プロジェクトでは、関節の軟骨が欠損した患者さんと通常の治療で治らない骨折の患者さんを対象とした臨床試験の開始を目指しています。これまでの研究成果を一刻も早く患者さんの元へ届けられるように全力を尽くして頑張りたいと思っています。ご支援のほどよろしく願いいたします。



骨髄間葉系幹細胞の磁気ターゲティング

Serendipity (幸運な発見)

高田 隆

医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 歯学分野 口腔顎顔面病理病態学 教授
国際口腔病理学会会長 アジア口腔顎顔面学会会長



私は「セレンディピティ (serendipity)」という言葉が好きです。この言葉と出会ったきっかけは、2001年に上映されたクリスマスのニューヨークを舞台にした映画で、そのタイトルがセレンディピティというものでした。ニューヨークのブルーミングデールズという古いデパートの手袋売り場から出会いが始まり、偶然に偶然が重なって男女が結ばれるロマンティックラブストーリーです。

セレンディピティという言葉は、もともとは、ホレス・ウォルポールというイギリスの小説家とその小説の中で使った造語で、「セレンディップ (スリランカ) の3人の王子」という童話にちなんだ言葉とされています。その童話は、3人の王子が旅の途中にいくつかの意外な出来事に像遇し、もともと探していなかった何かを発見する物語です。たとえば、王子の一人は自分の歩いている道を、自分より少し前に片目のロバが歩いていたことを発見します。なぜそのことがわかったかという、道の片側だけの草が食べられていたからということに気がついたからだと書かれています。

セレンディピティという言葉にぴったりの日本語訳はありませんが、しばしば「幸運な発見」とか「偶然の幸福」と訳されます。科学の世界では、フレミングが細菌培養実験のときにアオカビのコンタミを起こしたことで抗生物質を発見したことやキュリー夫妻が抽出物残渣の中にラジウムを発見したこと等が例としてあげられています。一方で、パスツールは“Chance favors the prepared mind”と述べています。すなわち、偶然は確率的のみに現れるのではなく必然を含み、幸運な発見は備えある心に訪れます。2010年にノーベル化学賞を受賞された鈴木 章先生は、セレンディピティを「偶然を幸運に変える力」と意識されています。広島大学医歯薬保健学研究科の皆さんには、是非、広島大学で学んだことを基盤としてもものを見る心を準備し、「幸運な発見」をつかみ取っていただきたいと願っています。

追記：余談ですが、映画を見た年のクリスマスに、家内と二人でニューヨークに行って、映画の舞台となったそのデパート (ブルーミングデールズ) と二人が再会するセレンディピティ3というカフェ (<http://www.serendipity3.com/>) を訪れて、我々も少し幸せな気分になりました。機会があったら立ち寄ってみてください。



イノシトールリン脂質代謝酵素欠損細胞群の作成

榎木 修 医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 薬学分野 生理化学 教授

生体膜の構築材料であるリン脂質には複数の分子種があります。その中で、ホスファチジルイノシトールには分子内の極性頭部に位置する特定の3カ所の水酸基の内の、何れかひとつ、ふたつ、あるいは全てがリン酸化された7種の誘導体が生理的に存在します。生体膜に微量に含まれるこれら誘導体の極性頭部は、含量の多い他のリン脂質の極性頭部よりもサイズが極めて大きいことから、生体膜の表面からあたかも杭のように突出していると考えられます。このとき、それぞれの杭の形は誘導体上のリン酸基の数と場所の違いによって微妙に異なっていると言うことができます。

生体膜の最も基本的な機能は細胞の内外を峻別し、細胞内を区画化する隔壁としての機能です。この隔壁の全体としての形態は固定されたものではなく、細胞の生命活動に伴ってダイナミックに変化する必要があります。細胞が移動（遊走）するとき、細胞外物質を貪食するときなどには細胞膜の形態は明らかに大きく変化します。また、細胞内の物質輸送（小胞輸送）等の変化に伴い細胞内部の膜の形態も常に変動しています。このような形態変化は合目的性に叶うように厳密に制御される必要があります。細胞内にはホスファチジルイノシトールのリン酸化誘導体の微妙な構造の違い（杭の形の違い）を認識し、強固に結合する性質をもつ数多くのタンパク質が存在しています。多くの場合、そのそれぞれのタンパク質は特定の別のタンパク質と相互作用する性質を兼ね備えています。要するにこれは、生体膜表面から突き出した特定の杭の周辺には特定のタンパク質群が集合するという事です。生体膜の形態変化はこのようなタンパク質群の集合・離散によって制御されています。

生体膜の形態変化に限らず、さまざまな生命現象が特定の杭へのタンパク質の集合・離散を伴っておきています。いずれの場合でも、合目的的な変化をおこすためには特定の杭を理想的なタイミングで特定の場所に配置し、また除去することが肝要です。生体内にはひとつの誘導体を別の誘導体へと変化させる（杭の形を変えて特定のタンパク質群の集合・離散を促す）ための酵素が多数存在しています。数年前から、私たちのグループではRaw264.7マクロファージ、RBL-2H3マストセルなどの細胞を親細胞として特定のイノシトールリン脂質代謝酵素を欠損した一群の細胞（細胞バンク）を作成する作業を行っています。この結果、数十種にも及ぶイノシトールリン脂質代謝酵素はそれぞれ異なる場所とタイミングで働くことで、異なる細胞機能を制御していることがわかってきました。今後の作業の中から、イノシトールリン脂質の変化を要として制御される細胞機能の全貌を明らかにし、イノシトールリン脂質代謝酵素を標的とした分子標的薬開発の基礎を築きたいと考えています。

各種表彰等の受賞について 平成24年10月1日～平成25年3月31日

賞の名称	受賞者			受賞理由	授与者	授与年月日
	専攻等	講座等	氏名			
第18回日本耳科学会奨励賞（基礎部門）	医歯薬学総合研究科 展開医科学専攻	病態制御医科学講座 耳鼻咽喉科学・頭頸部外科学 (博士課程4年)	宮里 麻鈴	論文名「ヒト中耳真珠腫上皮におけるRANKL発現と増殖能についての検討」中耳真珠腫上皮における骨破壊能と増殖能、上皮下組織についての関連を組織学的に示された研究であったため。	一般社団法人 日本耳科学会理事長	平成24年10月5日
日本歯科麻酔学会松田学術奨励賞	医歯薬学総合研究科 展開医科学専攻	病態制御医科学講座 歯科麻酔学 (博士課程3年)	大植 香菜	第37回日本歯科麻酔学会認定医試験において優秀な成績を収めたため。	一般社団法人 日本歯科麻酔学会理事長	平成24年10月5日
フォーラム2012衛生薬学・環境トキシコロジー実行委員長賞	薬学部	薬学科6年	津山 由美	「パーフルオロオクタンスルホン酸 (PFOS) 長期曝露によるin vitro及びin vivo GluR2発現減少」に関する研究が優れていると認められたため。	フォーラム2012 実行委員長	平成24年10月25日
JB論文賞	医歯薬学総合研究科 薬学専攻	修了生	岡崎 夏実	学術誌「The Journal of Biochemistry」に掲載された論文「C5a controls TLR-induced IL-10 and IL-12 production independent of phosphoinositide 3-kinase」が学術の進歩に著しい貢献をしたものと認められたため。	公益社団法人 日本生化学会会長	平成24年10月29日
平成24年度科研費審査委員表彰	医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門	外科学 (教授)	末田 泰二郎	学術システム研究センターが翌年度の審査委員の選考に適切に反映するために行っている科研費審査終了後の審査の検証において、模範となる審査意見を付した審査委員として選考された。なお、平成24年度は約5,000名の第1段審査（書面審査）委員の中から115名が選考された。	独立行政法人 日本学術振興会理事長	平成24年10月31日
Excellent Posterboard Presentation Award	病院	口腔健康発育 歯科 (歯科診療医)	廣瀬 尚人	The 45th Scientific Congress of Korean Association of Orthodontistsにおいて研究内容の発表を行い、当該研究分野において高く評価されたため。なお、約30名の本賞受賞者のうち当人を含め、2名のみが特に優秀であると評価された。	The Korean Association of Orthodontists President	平成24年11月3日
Excellent Posterboard Presentation Award	病院	口腔健康発育 歯科 (歯科診療医)	松田 弥生	The 45th Scientific Congress of Korean Association of Orthodontistsにおいて研究内容の発表を行い、当該研究分野において高く評価されたため。	The Korean Association of Orthodontists President	平成24年11月3日
Excellent Posterboard Presentation Award	病院	口腔健康発育 歯科 (歯科診療医)	堀畑 篤史	The 45th Scientific Congress of Korean Association of Orthodontistsにおいて研究内容の発表を行い、当該研究分野において高く評価されたため。	The Korean Association of Orthodontists President	平成24年11月3日
第45回大韓矯正歯科学会、第4回日韓ジョイントシンポジウム 優秀ポスター賞	医歯薬学総合研究科 展開医科学専攻 医歯薬学総合研究科 医歯薬学総合研究科 医歯薬学総合研究科 医歯薬学総合研究科 医歯薬学総合研究科	顎口腔頸部医科学講座 歯科矯正学 (博士課程4年) 博士課程4年 博士課程4年 博士課程3年 博士課程3年 博士課程2年	寺尾 明子 石川 絵海 村崎 恭子 角 明美 蘇 少卿 四方 花佳	それぞれの研究成果をポスター発表した結果、その内容が斬新で、新規性、独創性が高いとの理由で、優秀ポスター賞 (Excellent Poster Presentation Award) を受賞した。	The Korean Association of Orthodontists President	平成24年11月3日
平成24年度日本薬学会中国四国支部奨励賞	医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門	病態解析治療学 (助教)	横大路 智治	受賞課題「消化管異物排出トランスポーターの機能と薬剤誘発消化管毒性に関する研究」が、学術の進歩に著しい貢献をしたものと評価されたため。	日本薬学会 中国四国支部支部長	平成24年11月10日
第60回日本ウイルス学会学術集会ポスター賞	医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門	ウイルス学 (助教)	福士 雅也	研究内容が優れている事、また既に国際学術誌に掲載されている事、さらにポスター発表において、その研究成果が判りやすく提示されている事から複数の選考委員に優秀と認められたため。	第60回日本ウイルス学会学術集会会長	平成24年11月13日
平成24年度日本消化器癌発生学会研究奨励賞	医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門	分子病理学 (准教授)	大上 直秀	「胃癌細胞の非対称性分裂時における胃型・腸型形質の変化」についての研究が特にすぐれており、消化器癌の発生・進展に関する基礎研究推進への貢献が顕著であると認められたため。	日本消化器癌発生学会理事長	平成24年11月14日
日本新生児看護学会学術優秀賞	医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門	健康情報学 (助教)	船場 友木	表彰年度の前年度に発行された学会誌に掲載された論文の中から、日本新生児看護学会の理事・評議員により選定され、理事会で決定されるもので、日本新生児看護学会誌17(2)に掲載された論文題目「子どものNICU入院による母親の次子願望への影響」が、学術優秀賞に選出されたため。	日本新生児看護学会理事長	平成24年11月25日
日本化学療法学会西日本支部支部長賞 - 基礎部門 -	医歯薬学総合研究科 展開医科学専攻	病態制御医科学講座 外科学 (博士課程4年)	繁本 憲文	第60回日本化学療法学会西日本支部総会にて発表した演題「IPMに中間耐性を示すKlebsiella属が所有する新規メタロβ-ラクタマーゼBlaIMP-34」は優れた研究業績と認められたため。	日本化学療法学会西日本支部支部長	平成24年12月28日

HIROSHIMA UNIVERSITY BHS NEWS

Hiroshima University Graduate School of Biomedical & Health Sciences

The American Prosthodontic Society (APS) Golden Medallion Award	医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門	先端歯科補綴学 (教授)	赤川 安正	歯科補綴学をベースにした補綴治療が全身の健康に与える影響についての疫学的研究成果とインプラントに関する骨界面の研究成果が評価され、アメリカ合衆国における最も伝統ある歯科補綴分野の学術団体であるThe American Prosthodontic Societyから、2013年のGolden Medallion Awardを受賞した。	The American Prosthodontic Society	平成25年 2月21日
Young Investigator's Award, The 85th Annual Meeting of the Japanese Gastric Cancer Association	医歯薬学総合研究科 創生医科学専攻	放射線ゲノム 医科学講座分子病理学 (博士課程3年)	Htoo Zarni Oo	The 85th Annual Meeting of the Japanese Gastric Cancer Associationで発表した「Analysis of gene expression profile in scirrhous type gastric cancer by CAST method」に関する研究が特にすぐれていると認められたため。	第85回日本胃癌学会 総会会長	平成25年 3月1日
International Association for Dental Research (IADR) Distinguished Scientist Award in Prosthodontics and Implants	医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門	先端歯科補綴学 (教授)	赤川 安正	インプラントの新材料、ティッシュエンジニアリングによる骨再生、さらに義歯装着が全身の健康に与えるインパクトの研究業績 (160編を超える英語論文) が認められ、12,000名を有する歯学最大の国際研究団体IADRの2013補綴学・インプラント学分野の最優秀研究者賞を受賞した。	International Association for Dental Research (国際歯科研究学会)	平成25年 3月20日



CanadaのBritish Columbia大学留学便り

林 哲太郎 医歯薬学総合研究科 創生医科学専攻 先進医療開発科学講座
腎泌尿器科学 助教 (当時)

私は現在、カナダのバンクーバーにあるブリティッシュコロンビア大学に留学しています。バンクーバーは、カナダの西側に位置する人口約60万人の都市で、2010年に冬季オリンピックが開催されたように、豊かな自然が残る街です。また移民の国カナダに特徴的な多民族都市であるため、外国人にも寛容で、私たち家族も地域の人たちに温かく迎えられ、彼らに支えられながら生活しています。

私の所属している研究室は、ブリティッシュコロンビア大学内の研究機関であるバンクーバー前立腺センターで、周囲にバンクーバー総合病院、ブリティッシュコロンビア州癌研究所などの大学、研究機関、病院が並ぶメディカルエリアにあります。研究室は、泌尿器科臨床講座の教授でもあるMartin Gleave教授が主催されており、臨床医の研究機関であることから泌尿器科癌の新規治療モデルの開発を目的としています。以前に日本からの留学生が見つけた去勢抵抗性前立腺癌で高発現するClusterinに対する薬剤は現在Phase IIIに入っており、臨床検体から発癌や癌の進展に関与する分子を見つけ、それを標的とした前臨床試験を行うことが主な研究内容です。研究室のメンバーも非常に多国籍軍で、フランス、ドイツ、中国、インド、レバノン、イラン、モロッコ、イギリス、アメリカ、カナダ、韓国などからの出身者で構成されている上に、医療関係以外の様々な専門性を持つ人たちが一緒に仕事をしており、このことが研究の推進力になっていると思われま

す。私の指導医も泌尿器科臨床医であり、私は膀胱癌の治療標的に関するテーマを与えられました。現在、同じ研究チームのドイツ人とロシア人の泌尿器科医と共に細胞株とマウスでの実験を行っています。さらに臨床検体の解析では、イラン人の泌尿器科医と韓国人の大学院生と共同で研究をしています。様々な国籍や背景を持つ人達と助け合い、競い合いながら仕事する経験は、学ぶことも多く、新鮮であり、充実した日々となっています。時には言葉と文化の違いによる誤解や勘違いなどの問題が生じることもありますが、常に積極的な姿勢で取り組んでいきたいと思っています。

最後になりましたが、このような貴重な留学の機会を与えていただいた松原昭郎教授ならびに広島大学の諸先生方に、心より御礼申し上げます。





第63回米国肝臓学会議 (AASLD 2012) (ボストン)に参加して

本田 洋士 医歯薬学総合研究科 博士課程3年 創生医科学専攻
 消化器・代謝内科学研究室

肝細胞癌の根治的治療としては手術、局所療法が選択されてきました。近年照射技術の進歩に伴い低侵襲な定位放射線治療の有用性が報告されています。今回多血性小肝癌に対する肝動脈化学塞栓術と定位放射線照射の併用療法の治療成績と安全性について検討しました。

対象は、①20歳以上、②全身状態が比較的保たれていること、③Child-Pugh score 7点以下と比較的肝予備能が保たれていること、④肝外病変を伴わない3 cm以下、3個以内の多血性病変、⑤手術、局所治療困難例としました。評価項目は治療後の全生存率、局所再発率の評価、治療の安全性です。治療効果判定は肝癌治療効果判定基準（2009年改訂版RECICL）、有害事象については有害事象共通用語規準v4.0日本語訳JCOG版に基づいて行いました。

放射線照射施行後、RECICLの効果判定では局所再発は1例のみで、累積局所再発率は1 - 3年：3.6%でした。肝癌死、肝癌死以外が各1例、全生存率は1 - 3年：92.1%でした。

定位放射線照射後、重症あるいは医学的に重大な有害事象の合併症は認めませんでした。また放射線照射に伴う重大な偶発症である放射線性肝障害の合併も認めませんでした。

以上より、多血性小肝癌に対する肝動脈化学塞栓術併用定位放射線治療は低侵襲かつ局所制御率良好であり、肝細胞癌患者の局所根治に大きく寄与すると考えます。

2012年11月9日から13日にかけて開催されましたAASLD 2012での演題発表においても、その局所制御率、治療後の安全性について特に関心が寄せられ、広く当院での肝癌治療について発信できました。



Society for Neuroscience(ニューオリンズ)に参加して

岡田 怜 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 創生医科学専攻 精神神経医科学研究室

Society for Neuroscienceは、2012年10月13日から17日にかけてアメリカ合衆国ルイジアナ州ニューオリンズ市のEarnest N. Morial Convention Centerで開催されました。

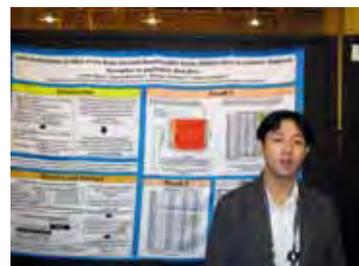
参加国は欧米のみでなく全世界にわたり、基礎・臨床問わず精神神経領域の演題が15000題を超えていました。

所属研究室で行っている精神疾患のバイオマーカー開発についても多くの演題があげられており、DNA・RNA・タンパク質など様々な物質をターゲットとした研究成果が報告されていました。

全世界規模の国際学会で、同じ分野の研究成果の多くを確認することで、広い視野をもって現在行っている研究の妥当性などを、客観的に考察することができました。

また、自らポスター発表を行いました。午前中の掲示時間の間中、多くの国の同じ分野の研究を行っている方々と積極的なディスカッションを行うことができ、現時点での検討課題や新たな研究への応用など、今後の発展させていく方向性を確認することができました。

今回の学会を通じて、多くの方々と知り合いになり、幅広く精神神経領域の研究にふれることができ、今後の研究を行っていく上で刺激をうけることができました。





European Congress of Radiology 2013(欧州放射線学会) (ウィーン) に参加して

松重 俊憲 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 創生医科学専攻 脳神経外科学研究室(当時) 病院 脳・神経・精神診療科 医科診療医

このたび、European Congress of Radiology (ECR) 2013 (2013年 欧州放射線学会) : 会期 2013年3月7日～11日に参加いたしました。この学会は毎年、オーストリアのウィーンで開催されている、ヨーロッパで最も規模の大きな放射線学会です。今回、専門とする神経放射線学に関する臨床研究内容で、“Effect of Antiplatelet Therapy on Radiographic outcome of high signal spots on diffusion weighted imaging in elective endovascular coiling of unruptured cerebral aneurysm” という、脳血管内治療における多剤抗血小板剤使用の有用性について発表いたしました。最近の話題でもあったことから、良いのか悪いのか予想外に口演に選ばれ、発表の数ヶ月前から通勤の車内では英語を聞き、風呂の中では暗記した発表内容を英語で言えるよう繰り返す毎日でした。人生初の経験で相当緊張いたしました。十分に内容を伝え、討論できたと思います。Sessionが終わってからも部屋に残って、あるいはFloorでコーヒーを飲みながらdiscussionが盛んに行われました。この点がやや国内の学会と異なるところでしょうか？私が拙劣な英語で返答すると、納得いくまで帰ってくれません。やはり自分の考えを英語でしっかり伝えるような勉強が必要と痛感いたしました。また、Prof. PierotやProf. Molyneuxといった世界的に有名な脳血管内治療の医師からも声をかけていただき、お話できたのも大変貴重な経験となりました。ECRでは座長をはじめ聴衆から各演者の科学的論点と発表の質を4段階評価されます。結果、発表の内容はほぼExcellentと嬉しい結果であったのですが、英語の発表に関してはGood～Fairと手厳しい評価でした。これもまた今後の課題にしたいと思います。

大変貴重な機会をいただきました栗栖教授、また海外発表支援を頂いた広島大学大学院医歯薬保健学研究所にはこの場をお借りして深く御礼申し上げます。



第98回アメリカ歯周病学会共催日本歯周病学会2012大会 (ロサンゼルス) に参加して

柏井 桂 医歯薬学総合研究科 博士課程3年 創生医科学専攻 歯周病態学研究室

私は、2012年9月29日から10月2日にかけてアメリカのロサンゼルスで開催された American Academy of Periodontology in collaboration with the Japanese Society of Periodontology 2012に参加させていただき、ポスターセッションにおいて、“The effect of BDNF on human gingival epithelial cells.” という演題で発表させていただきました。

日本歯周病学会との共催であったこともあり、周りは日本からの発表者も多かったのですが、非常に貴重な発表の経験をさせていただく事が出来ました。学会の規模、参加人数、会場の大きさはどれも圧倒されるスケールで、多くの刺激を受け、今後の自身の研究のモチベーションを更に高めることができました。

ロサンゼルスの天候は終日、雲一つない心地よい天候でした。学会以外の場でも、海外の街並みに触れ、拙い英語ですがコミュニケーションを交わすことで、国内だけでなく海外での学会発表ができるように、又いつかは海外留学ができれば、と更なる目標も持つことが出来ました。

最後になりますが、このような機会を与えて下さり、指導して頂いた先生方、またご支援いただいた医歯薬保健学研究所に感謝申し上げます。



ESID2012（フィレンツェ）に参加して

平田 修 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 展開医科学専攻 小児科学研究室

私は、平成24年10月3日からイタリア、フィレンツェで開催されたEuropean Society for Immunodeficiencies 2012 (ESID)に参加し、当科で同定したSTAT1遺伝子異常による慢性皮膚粘膜カンジダ症 (CMCD: chronic mucocutaneous candidiasis disease) 11家系の遺伝子解析、機能解析の結果に加え、Flow Cytometryを用いた末梢血におけるSTAT1リン酸化の解析が迅速なCMCD-STAT1異常症の診断に有用であることを報告してきました。会場では、他施設におけるCMCD症例の報告、機能獲得型STAT1異常症におけるCMC発症機序の解析などCMCD-STAT1異常症の話題を中心に、多くの先天性免疫不全症の新たな知見を得ることができました。今後は、これらの情報を当研究室の発展に活かしていきたいと考えています。最終日には、幻想的な朝もやのかかったドゥオーモをホテルから眺めることができ感動したのも束の間、その朝もやで飛行機が離陸できず予定通り帰国できないなど、海外での学会参加が初めての自分にとって不安な一人旅でもありましたが、多くの先生方にお世話になりとても貴重な経験ができました。このような機会を与えてくださった小林教授、大学院生海外発表支援プログラムに関わっておられる先生方に深謝致します。



American Heart Association Scientific Session 2012（ロサンゼルス）に参加して

丸橋 達也 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 展開医科学専攻 循環器内科学研究室(当時) 病院 循環器診療科 医科診療医

今回、2012年11月3日から11月7日まで米国ロサンゼルスで開催されたAmerican Heart Association Scientific Session 2012に参加致しました。循環器内科医として、是非参加したいと常々思っておりましたが、このたび初めて参加する機会を得ることができました。国内の学会とは異なり会場は非常に広く、規模も大きなものでした。多くの地域から、多数の医療従事者が参加しており、非常に刺激的で感銘を受けました。

学会会場では、朝から晩まで講演や研究発表が行われており、自分の知識を整理するとともに、最新の情報を得るよい機会となりました。著名な先生のお顔を直接拝見しながら講演をきけたことは、非常にうれしい経験でした。

私はポスター形式の発表を5つさせていただきました。血管内皮機能や血管エコーに関する発表を行いました。発表に対していくつかの質問を受けましたが、理解していただける返答ができたと思っております。今回の発表は、ほとんどが臨床研究であり、今後は基礎実験などでさらにテーマを深く追求していけたらと感じました。来年もこの学会に参加できるよう研鑽を積んでまいりたいと思います。

最後になりましたが、海外での発表という貴重な機会を与えていただきましたことを心より御礼申し上げます。



第4回世界インプラント矯正歯科学会(シドニー)へ参加して

沖 奈苗 医歯薬学総合研究科 博士課程3年 展開医科学専攻 歯科矯正学研究室

2012年10月10日から13日にかけて、オーストラリアのシドニーで行われた第4回世界インプラント矯正歯科学会におけるポスター発表のため、シドニーへ渡航しました。また、本学会の大会長でもあるSydney大学のAli Darendeliler教授の研究室を訪問し、情報交換を行いました。

ポスター発表の演題名は、「Periotest value reflect primary stability of micro-implant」で、これまでに当科で行ってきた臨床調査結果について発表および質疑応答を行いました。さらに、学会終了後は、シドニー大学病院矯正歯科において、矯正用インプラントアンカーの植立や臨床使用方法に関する講義、実習を同行した大谷助教が行い、これに参加しました。これまで、当科と海外メーカーとの共同研究結果を基に、我々は植立器具の一つであるドライバーやアンカースクリューの開発に参画してきましたが、シドニー大学病院矯正歯科では我々の開発したドライバーが導入されたばかりであり、その使用方法やコンセプトに関して、非常に活発な質問を受けました。

また、我々が現在開発を進めている超短小型アンカースクリューは、シドニー大学でも同様の検討が行われており、その安定性に関連する要件について、活発な討議がなされました。国外で矯正歯科治療を実際に見学し、大変有意義な経験ができました。



IADR/AADR/CADR General Session & Exhibition 2013(シアトル)に参加して

敷 敏 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 展開医科学専攻 小児歯科学研究室

As a graduate student, It was my great honor to have attended the IADR/AADR/CADR General Session & Exhibition from Mar. 20th to 23th 2013. I presented my poster entitled 'Odontogenic infection of *P.gingivalis* induces preterm delivery through galectin-3'. During the meeting, I could get in touch with various fields of research topics and attend numerous exciting talks. In the poster discussion time. I learned to advocate for my work and explain my idea to the audience. Furthermore, I could make myself recognized by other scientists and establish friendship with them as a member of Hiroshima University.

I appreciate the instructions from my supervisors in the Department of Oral and Maxillofacial Pathobiology and the sponsorship from Hiroshima University to provide me with the precious opportunity to attend IADR meeting.



10th Asian Congress on Oral and Maxillofacial Surgery (バリ) に参加して

Andra Rizqiawan 医歯薬学総合研究科 博士課程3年 展開医科学専攻
口腔外科学研究室

My name is Andra Rizqiawan from Indonesia. Currently I am conducting my research on oral cancer as a doctoral student at the Department of Oral and Maxillofacial Surgery. The theme of my present research is the role of Galectin-1 in cell migration and invasion. Interestingly, I found some very intriguing results. I owe it to my academic supervisor for teaching me the basics of molecular biology level experiments and guiding me swiftly through my academic career. Since last year I had the chance to participate in many academic conferences in different cities of Japan like Yokohama and Sapporo. Besides polishing my academic and presentation skills, I used the opportunity to indulge myself in the rich culture, the scenic beauty and the scrumptious cuisine of Japan.

One such memorable conference was the 10th Asian Congress on Oral and Maxillofacial Surgery in Bali-Indonesia on November 2012. I presented my poster on "Role of galectin-1 in cell migration and invasiveness in human squamous cell carcinoma correlated with Epithelial Mesenchymal Transition". I came across many researchers from all around the globe including Japan who specialize on clinical work. On the last day of the congress I was mesmerized to receive an award for my poster presentation. It was a very proud moment for me to receive such recognition and represent Hiroshima University in the most prestigious meeting in South Asia. I am very grateful to my Professor Nobuyuki Kamata and Associate Professor Dr. Kei Tobiume for guiding me towards such prosperity. I would also like to extend my gratitude to Dr. Koichiro Higashikawa and Dr. Gaku Okui for helping me with critical comments to improve my research skills. Overall, I am indebted to be a student of Oral and Maxillofacial Surgery, Hiroshima University. Thank you very much.



Society for Neuroscience annual meeting 2012(ニューオリンズ)に参加して

杉本 達彦 医歯薬学総合研究科 博士課程後期3年 薬学専攻
薬効解析科学研究室 (当時)

2012年10月13日から17日にかけてNew Orleansで開催されたSociety for Neuroscience annual meeting 2012に5日間にわたって参加してきました。この学会は世界最大規模の中枢神経系学会となり、基礎から臨床まで多くの演題発表があり、参加者総数は三万人にも及びます。驚くほど会場も広く冷房も十分すぎるほど効いておりました。私は、Involvement of astrocytes in the generation of spinal circadian rhythmという演題でポスター発表を行いました。初めての国際学会の発表ということもあり、英語を聞き取ったり、しっかりと応答したりすることは難しかったですが、世界中の研究者の方々が沢山演題を聞きに来てくれ、建設的な意見を多数いただくことができました。そのため、非常に有意義な討論をすることが出来、今後の研究につながる良い機会になったと感じております。また、アメリカの第一号薬局の建物を元としている薬局博物館の見学にも行きました。様々な薬の歴史や歴史的な医療器具等を見学できたため、薬剤師として非常によい勉強になりました。

最後になりましたが、国際学会に参加する機会を下さった先生方、また、ご支援を頂いた医歯薬保健学研究科等総務支援グループに厚くお礼を申し上げます。

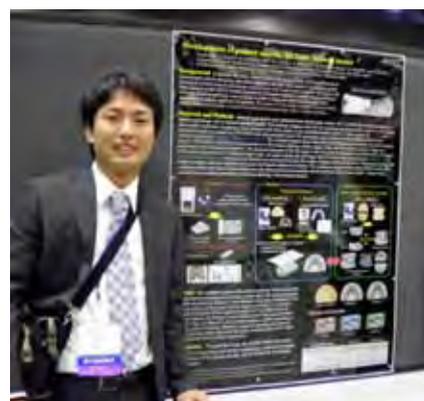


91st General Session & Exhibition of the IADR(シアトル)に参加して

木原 琢也 医歯薬学総合研究科 博士課程後期3年 口腔健康科学専攻
口腔生物工学研究室

2013年3月20日から23日にかけてアメリカのシアトルで開催された91st General Session & Exhibition of the IADRにポスター発表のため参加しました。演題名は「Development of patient specific 3D finite element model」でカテゴリーはOcclusion & Masticationとして発表・質疑応答を行いました。私たちが行っている医用画像工学と有限要素解析を用いた補綴分野の研究は、IADRのすべてのセッ

ションと相対的に比較するとマイナーな内容ではありましたが、研究の将来構想に関しては同意や関心をもって頂け、国際的な視点からの我々の研究の位置付けを行うことができました。また、外国の人々とのポスターディスカッションにおいては簡単な英語とジェスチャーで自分の伝えたいことを伝えることができました。しかし、さらに深い内容を議論するためには英語能力の上達が必須であることを改めて課題として認識しました。質疑の内容としては、使用した機器の性質について、方法の手順、将来臨床応用したときのコストや作業時間についてであり、それに対する適切な回答や意見交換ができたと思っています。会場ではかなりのディスカッションが様々な場所で行われており、私もこの中に加わり国際性の高い情報発信、意見交換をしていきたいと感じました。



IADR (シアトル)に参加して

兼田 英里 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 創生医科学専攻 歯周病態学研究室

2013年3月20日から23日にかけてアメリカのシアトルで開催されたIADR (International Association for Dental Research: 国際歯科学研究学会)に参加し、「Regulation of Osteogenesis in Mesenchymal Stem Cells by Periodontal Tissue」という演題で、ポスター発表をさせて頂きました。歯周組織再生療法のひとつとして間葉系幹細胞 (MSC) 移植が考えられており、研究が行われています。移植

されたMSCは、移植局所において様々な刺激を受けて増殖・分化すると考えられています。そこで、歯肉線維芽細胞 (HGF) と歯周靭帯細胞 (HPL cells) に着目し、それらの細胞から分泌される液性因子によるMSCの骨分化への影響について発表させて頂きました。質疑応答時間中に、多くの先生から質問・アドバイスを頂いたことは、とても励みになりました。頂いたアドバイスについても検討し、引き続き研究を続けていきたいと思いました。

今回、初めて国際学会に参加させて頂きました。学会参加者とのディスカッションや日々の生活で実際に英語を使うという経験は、実践的な語学能力を身に付ける必要性があることを強く意識する良い機会となりました。渡航中は、大変有意義な時間を過ごし、今まで以上に研究、英語学習の向上を目指したいと思いました。



IADR (シアトル) に参加して

今井 遥香 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 創生医科学専攻 歯周病態学研究室

平成25年3月20日から3月23日にかけてアメリカのシアトルで行われたIADR (International Association for Dental Research 国際歯科学研究学会) に、ポスター発表で参加させて頂きました。歯周病の治療における標的分子を探索するため、抗真菌薬であるamphotericin Bを用いて宿主に対する抗炎症反応を検討しました。amphotericin BがAggregatibacter actinomycetemcomitans (A.a) 及びtumor necrosis factor (TNF) -の誘導する炎症性サイトカインの発現をERKまたはp38 MAPKを介して抑制するという結果が得られたため、今回のIADRで発表させて頂きました。なぜamphotericin Bに着目したのか、なぜA.aを使用したのかなど、実験に用いたそれぞれの理由についての質問が多く、自分の実験の意味や意義を改めて考えることができ、また、amphotericin Bがどこに作用している可能性が高いかなどの質問もあり、今後のプランについても再考することができました。

今まで英語に対する苦手意識が強かったので、英語で発表を行うことができた事は大きな収穫の一つとなりました。当たり前の事ですが、国際学会において、どんな国の人も発表を英語で行っています。今後研究を続けていく上で、自分の研究を外に向けて発信していくには英語が不可欠であることを強く感じ、これを機に英語の勉強を続けていきたいと思いました。



American Heart Association Scientific Sessions 2012(ロサンゼルス)に参加して

三上 慎祐 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 展開医科学専攻 循環器内科学研究室

平成24年11月3日から7日にかけてAmerican Heart Association Scientific Sessions 2012 (ロサンゼルス) に参加致しました。連日内科医として心臓病患者さんに接している中で、特に生活習慣病の最終形態として全身に起こる動脈硬化の心臓、脳血管への障害は著しく生活の質を低下させ時には命を奪うこともあり、この進行を少しでも食い止めることが我々の使命です。老年期の行動抑制としては歩行障害が挙げられ、動脈硬化としての末梢動脈疾患 (下肢の動脈硬化) は近年非常に注目を集めています。今回我々はこれらの患者さんに対し新たな治療機:低周波超音波装置を用いて血管新生を起し、症状や潰瘍の軽快を示しました。以前より我々は動物実験で低周波超音波装置による血管の新生を示しており、患者さんにも同効果があると考えられます。今回の臨床治験データでは症状、潰瘍の改善や下肢血流の増加、血管内皮前駆細胞の動員や遊走を確認致しました。当分野では細胞療法や遺伝子治療が様々な方法で行われており、海外の優れた治療を目の当たりにし、より有用性の高い今後の研究動機が得られました。今後多数の患者さんに使用して頂く為、長期使用の安全性や有用性の確認を行って参ります。最後に、原爆放射線医科学研究所ゲノム障害病理 東 幸仁教授及び広島大学大学院循環器内科学 木原康樹教授のご尽力に深謝致します。



Taiwan Association of Orthodontistsに(タイペイ)参加して

驚見 圭輔 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 展開医科学専攻 歯科矯正学研究室(当時) 病院 口腔健康発育歯科 歯科診療医

私は2012年12月14日から16日にかけて台北で行われた、Taiwan Association of Orthodontistsに参加し、An establishment of jaw cleft treatment with bone regeneration by use of bone marrow - derived mesenchymal stem cells - というテーマで発表を行いました。本研究は、多因子性に発症する先天性疾患である口唇裂口蓋裂患者に対して施術される、骨欠損部への骨移植術に伴う外科的負担を低減するために、骨髄から採取した間葉系幹細胞(MSCs)を使用した骨再生治療法の確立を目的としたものです。現在、MSCsを用いた再生医療として、血管新生療法が高度先進医療として認可されております。しかしながら、骨欠損の形状が複雑で、機能時に外力がかかる顎裂部の骨欠損部に対して応用するには、多くの解決すべき問題が残されています。そのひとつとして、骨再生後に再生部への歯の萌出や歯の人為的な移動が必要となることが多いということが挙げられます。本研究では、骨再生を誘導するとともに、再生骨が正常な代謝機能を有しているかどうかの検討を行いました。会場では、多くの活発な議論ができ、広島大学の研究が世界に繋がっていることを再認識することが出来ました。このような機会を与えていただきました丹根教授、および若手研究者海外発表支援に関わっておられる先生方に深謝いたします。



郭 芸 医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 医学分野 免疫学 助教

コース名：若手研究者派遣コース
 研究を行った国：1) イギリス 2) スイス
 期間：平成24年6月9日～平成24年10月2日
 研究機関名：1) University of Birmingham 2) University of Basel
 受入研究者等：教授 1) Graham Anderson 2) Georg Holländer

1 初期の目的の遂行状況

From 9 June to 2 October of this year, I went to two labs for study and research. One is Professor Graham Anderson's lab in UK; another one is Professor Georg Holländer's lab in Basel. Both of them are the main organizers of the Global Thymus Network, and work on the thymus and T cell biology. T cell is important for the body to defend against pathogens. T progenitors migrated from bone marrow enter the thymus, where they communicate with thymic epithelial cell (TEC), go through positive and negative selections, thereby developing into mature T cell for the periphery. My study is mainly focused on the TEC and its experimental techniques.

2 得られた成果

Firstly, I studied the techniques about organ culture system, like FTOC and RTOC (Figure 1), which can be used for the study of the development of T cell and TEC in vitro. Secondly, I studied the method to prepare TEC with the new enzyme and checked some new proteins expression in TEC. Finally, I analyzed the Aire deficient mice and found that an abnormal medullary TEC percentage appeared in these KO mice. Further study should be continued.

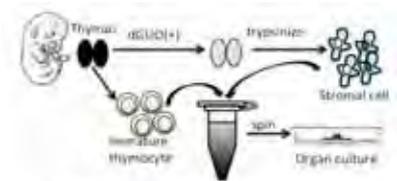


Figure 1. Aggregate thymic organ culture (ATOC)

It is really a good experience to study some new things abroad, and thanks for the support of Institutional Program for Young Researcher Oversea Visits.



原木 俊明 病院 皮膚・運動器診療科 助教

コース名：若手研究者派遣コース

研究を行った国：スイス

期間：平成24年10月1日～平成24年12月22日

研究機関名：Universität Basel・Departments of Anesthesia and Biomedizin

受入研究者等：教授 Susan Treves

1 初期の目的の遂行状況

悪性高熱症は、1型リアノジン受容体 (RYR1) の機能異常により吸入麻酔薬や脱分極性筋弛緩薬への曝露を契機に発症する致死性疾患です。当教室は日本での悪性高熱症診断において、中心的役割を担っています。

ヨーロッパにおける悪性高熱症の診断では、まずRYR1の遺伝子診断を行い、既知の遺伝子異常が見つからなかった場合のみ筋生検を行い筋肉の機能検査を行います。悪性高熱

症の遺伝子診断を行う上で当教室に不足している知識や技術を習得することを目的に、ヨーロッパの悪性高熱症診断において中心的役割を担っているバーゼル大学 (スイス) のDepartments of Anesthesia and Biomedizinを訪れました。

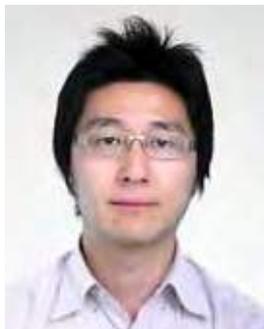
RYR1は約15000個の塩基からなる巨大な遺伝子であるため、ヨーロッパの遺伝子診断では遺伝子変異の頻度が高い特定領域のみが調べられています。日本人では遺伝子の変異部位が欧米人の変異部位とは異なる変異が多く報告されているのに加え、日本人特有の変異遺伝子についての機能解析はほとんど行われていないのが現状です。RYR1の遺伝子変異を見つけても、機能解析が行われていなければ悪性高熱症と診断することはできません。日本における悪性高熱症の遺伝子診断には、日本人特有の変異遺伝子の機能解析を行うことが最優先に解決すべき今後の課題です。

2 得られた成果

遺伝子診断については、ヨーロッパ悪性高熱症グループの診断基準に則り、行われていました。ヨーロッパにおける悪性高熱症の診断のための筋拘縮テスト (in vitro contracture test: IVCT) を見学することができました。RYR1の遺伝子解析は、当教室の機材、及び当大学の自然科学研究支援開発センターを利用することで、技術的には可能と考えられました。

悪性高熱症は、RYR1の機能異常により発症しますが、RYR1に関連した蛋白質の機能も発症に関与する可能性が示唆されています。欧米ではRYR1だけでなく、関連蛋白質の研究が現在進行形で進んでいます。滞在期間中、RYR1関連蛋白質の1つであるJunctional sarcoplasmic reticulum protein 1 (JSR1) の研究に携わることができました。

日本における悪性高熱症の遺伝子診断や最先端の研究を進めるために、引き続き交流を行うことをバーゼル大学の麻酔学研究責任者と確認し、今回の滞在を終了しました。



土肥 栄祐 病院 脳・神経・精神診療科 医科診療医

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース

訪問した国：アメリカ合衆国

期間：平成24年10月13日～平成24年10月16日

学会名：Society for Neuroscience 2012

会場：New Orleans, Louisiana

1 初期の目的の遂行状況

2012年10月15日に、アメリカ合衆国のNew Orleansにて開催されたNeuroscience meeting 2012にて『Time dependent alternations of lysosomal-associated membrane protein type 2A in rodent brain following cerebral ischemia』という演題名でポスター発表を行いました。訪れた研究者との間で交わされた質疑応答の中には新たな研究テーマの礎になり得るものが認められました。

2 得られた成果

前年のワシントンD.Cにて発表した際は、『オートファジー』という分野自体がそもそもキーワードとして採用されていなかったのですが、今回はそれが1つの分野として扱われていました。増加傾向にあるとはいえ、依然としてこの分野の演題数は未だ少なく、特にシャペロン介在性オートファジー (CMA) に関しては我々以外に発表者はおらず、昨年同様多くの研究者の関心を集めました。前年のポスター発表では、細胞レベルでのデータ提示に留まりましたが、今回は異なる脳虚血モデルに於いて神経細胞死に先行して、CMA関連蛋白質であるLAMP-2Aの発現が大きく低下するという動物実験レベルでの結果を発表し、よりCMAが脳虚血内で重要な意味をもつ1因子である可能性を示すことが出来ました。また学会としては、新たなパラダイムシフトとなるような発表には出会う事が出来なかったのですが、最先端の知見を得る事が出来た点は有意義でした。今後はより詳細な検討を行い、脳虚血以外のストレスも含めて神経細胞死にCMAが関与する可能性に関して研究することが必要です。



横林 賢一 病院 医系総合診療科 助教

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース
 訪問した国：アメリカ合衆国
 期間：平成25年2月17日～平成25年2月23日
 研究機関名等：UCLA School of Public Health
 受入研究者等：教授 Marjorie Kagawa-Singer

1 初期の目的の遂行状況

アクションリサーチ（現実の社会問題の実際的解決を目的として、問題の生じている現場において、当事者と研究者が協働して行う取り組み・活動）やCBPR（Community-Based Participatory Research: コミュニティを基盤とした参加型研究）は、現場（様々な社会問題・コミュニティの変革）と研究が融合した新しい研究手法であり、今後の医療関連研究に必須の手法

であると考えられます。これらの研究に積極的に取り組んでいるUCLAのSchool of Public Health (SPH)を訪見し、研究手法・実践の実際を学ぶことを目的とし、以下を実施しました。

- ①期間中にKen Welles, Martin Shapiro, Kagawa-Singer 3名の教授と個別に面会
- ②期間中に5つの授業（Epidemiology, Community Health Science, Biostatistics, Structural Equation Modeling, advanced cost effectiveness analysis）をAudit（聴講）
- ③期間中にNPO施設（Little Tokyo Service Center）を訪見

2 得られた成果

①3名の教授との面会

- ・CBPR実施において大切な事は「パートナーシップを築く」こと。研究者・医師としてトップダウン的に関わるのではなく、同じテーブルに着くことが大切です。家庭医はパートナーシップを築きやすいのでCBPRに向いていると思われま
- ・CBPRは質的研究と思われがちですが、量的研究も行なっています。UCLAではまだ数少ないCBPRでのRCTを行なっており、この10年ほどで他施設でも増えてくると予想されます。
- ・Communityはもともとパワーを持っていると知ることが大切です。それをどうempowermentするかが大切です。
- ・その他、様々な文献や会うべき人、訪問すべき施設を教えてくださいました。

②授業のAudit

CBPRを実践する際に必要な疫学統計の知識・技術、コミュニティ評価の際にしばしば使われるQOL尺度、CBPRの計画等について講義を通じて理解しました。

③NPO施設（Little Tokyo Service Center）訪見

日系人、low income世帯等に対する活動の実際を視察しました。Communityをcareするためには、たくさんの職種が力を合わせることで、行政とのタイアップ・資金獲得の重要性を学びました。



加藤 文紀 医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 歯学分野 細菌学 助教

コース名：若手研究者派遣コース
 研究を行った国：アメリカ合衆国
 期間：平成24年12月28日～平成25年2月28日
 研究機関名：ニュージャージー医科歯科大学
 受入研究者等：Distinguished Professor Masayori Inouye

1 初期の目的の遂行状況

近年、単細胞生物である細菌が多細胞生物のようにプログラム細胞死を誘発するToxin-antitoxin (TA) systemを染色体上に複数個、保有することが明らかになっています。細菌のTA systemとは細胞致死活性を有するToxinとその毒性を抑制するantitoxinの二成分からなっており、ストレス応答性の細胞死誘導として知ら

れています。また、Toxinの機能としては、配列特異的RNA分解酵素、翻訳阻害、DNA複製阻害、細胞分裂阻害など様々なToxin活性が報告されています。私は訪問先のInouye研究室にて黄色ブドウ球菌のToxin-antitoxin (TA) systemの新規遺伝子探索および機能に関する研究を行いました。

2 得られた成果

これまでに私は訪問先のInouye研究室との共同研究により黄色ブドウ球菌のToxin遺伝子であるMazFに関する研究を行ってきた経緯があり、黄色ブドウ球菌の染色体上に存在する機能未知遺伝子群から大腸菌を用いたToxin活性の評価を行うことにより新規TA system遺伝子群の探索を行いました。その結果、大腸菌を用いたToxin遺伝子の評価実験手法を習得し、黄色ブドウ球菌が保有する新規TA systemの候補として5遺伝子の絞り込みに成功しました。これら得られた遺伝子群は、既知の大腸菌TA systemとは同源性を示さず、機能的にも新規性が期待される遺伝子群であり非常に興味深い結果でありました。今後、これら新規遺伝子群を詳細に解析することにより黄色ブドウ球菌のTA systemの解明を進めていく予定です。また、Inouye研究室との共同研究をより活発にし、研究の更なる発展に努力したいと考えています。最後に今回留学の機会を与えてくださいました菅井教授、および本プログラムに関係される諸先生方、事務の方々から心より感謝申し上げます。



福井 康人 医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 歯学分野 分子口腔医学・顎顔面外科学 助教

コース名：若手研究者派遣コース

訪問した国：ドイツ

期間：平成24年8月1日～平成24年10月27日

研究機関名：フリードリヒ・アレクサンダー大学エアランゲン-ニュルンベルク

受入研究者等：教授 Friedrich.W.Neukam

1 初期の目的の遂行状況

今回の渡航目的は、①ドイツ連邦フリードリヒ・アレクサンダー大学頭頸部外科における診療技術の習得および人的交流の構築、②欧州における口腔外科領域の研究状況および実験技術の習得、③ドイツ連邦におけるBRONJ (Bisphosphonate-related osteonecrosis of the jaw) に対する外科的治療に関する研究をすることです。フリードリヒ・アレクサンダー大学は、ドイツバイエルン州北部の都市エアランゲンに本部を置く、11学部を有する総合大学で、学生数約25,000人、海外からの留学生を約2,500人受け入れ、バイエルン州第2の規模を誇ります。今回、その附属病院の口腔・顎・顔面外科で、約100万人の地域医療を担っている中核病院でした。外来患者数は、30～40人/日で、手術室における全身麻酔による手術件数は、留学3カ月間に224件（1日約4.1件）で、頭頸部悪性腫瘍やインプラント手術等の歯科手術はもとより、頭頸部外傷や炎症に対する緊急手術も積極的に行われていました。また、BRONJに対する治療および研究が行われており、日本に比べて積極的に外科的治療が施行されている印象を持ちました。

顔面外科に臨床研修目的に3カ月間留学し、主に手術研修、病棟研修をおこないました。同科は半径約100km圏内に唯一の口腔・顎・顔面外科で、約100万人の地域医療を担っている中核病院でした。外来患者数は、30～40人/日で、手術室における全身麻酔による手術件数は、留学3カ月間に224件（1日約4.1件）で、頭頸部悪性腫瘍やインプラント手術等の歯科手術はもとより、頭頸部外傷や炎症に対する緊急手術も積極的に行われていました。また、BRONJに対する治療および研究が行われており、日本に比べて積極的に外科的治療が施行されている印象を持ちました。

2 得られた成果

3カ月間で224件の全身麻酔下（全麻下）での手術が行われており、その術式も多岐にわたっていました。

手術内容としては、全麻下での生検が16.5%と最も多く、特に悪性腫瘍の生検では、耳鼻咽喉科Dr.が咽頭、喉頭部の精査を同時に行っており、各科の連携が非常にスムーズである印象を受けました。次いで頭部外傷に対する手術が15.6%で、そのうち眼窩底骨折が半分以上を占めていました。また、ほとんどの外傷症例が救急車での急患受診で、受診翌日には整復術が施行されていました。

さらに悪性腫瘍の手術は10.2%（23件）で、そのうち15件が遊離皮弁の再建を伴う手術で、当科では施行されていない肩甲骨皮弁による再建術の研修は非常に有意義でした。また、腫瘍切除後の歯牙欠損部へのインプラントによる補綴治療も積極的に行われており、今後、当科での加療に当たり、良い参考となりました。

BRONJに関しては、当科と比較し、積極的な外科療法が施行されていました。また、外科療法時に摘出された骨の免疫化学染色（h-BD-1、-2、-3）による、BRONJの診断ならびに予後予測の研究がなされており、結論には至っていないものの興味深い研究でした。

生検	37例 (16.5%)	唇裂、顎裂	12例 (5.4%)
外傷	35例 (15.6%)	補綴処置	10例 (4.4%)
プレート除去	27例 (12.0%)	審美	7例 (3.1%)
悪性腫瘍	23例 (10.2%)	消炎処置	6例 (2.7%)
抜歯	16例 (7.1%)	BRONJ	6例 (2.7%)
良性腫瘍、嚢胞	14例 (6.3%)	顎変形症	4例 (1.8%)
re-ope	14例 (6.3%)	その他	13例 (5.8%)



水野 智仁 医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 歯学分野 歯周病態学 助教

コース名：若手研究者派遣コース

研究を行った国：アメリカ合衆国

期間：平成24年7月31日～平成24年10月11日

研究機関名：University of Missouri Kansas city

受入研究者等：准教授 Yasuyoshi Ueki

1 初期の目的の遂行状況

チェルビズムは小児期に発症し、上下顎骨を中心に激しい炎症性骨破壊を伴う顔面の腫脹や歯牙の脱落を伴う常染色体優性遺伝疾患です。チェルビズムは、その原因として同定されているSH3BP2のアミノ酸変異を起こすことで発症します。SH3BP2はpleckstrin homology (PH) domainとSrc homology 2 (SH2) domainを持つタンパク質で、チロシンキナーゼに結合するアダプタータンパク質として発見されましたが、近年、SH3BP2は骨代謝を制御するタンパク質として注目されています。変異SH3BP2の個体レベルでの影響を解明する目的で患者に最も多く発見されたアミノ酸変異（Pro418Arg）をマウスに導入したknock-inマウスを作成した結果、変異マウスは骨減少と生存率の低下を示すことが分かりました。このチェルビズムknock-inマウスとtoll like receptor 2あるいはtoll like receptor 4knock-outマウスを交配することによって得られる、toll like receptor 2あるいはtoll like receptor 4をknock-outしたチェルビズムknock-inマウスを用いた解析およびSH3BP2以外のチェルビズム原因遺伝子の探索を行うことを研究目的としました。

持つタンパク質で、チロシンキナーゼに結合するアダプタータンパク質として発見されましたが、近年、SH3BP2は骨代謝を制御するタンパク質として注目されています。変異SH3BP2の個体レベルでの影響を解明する目的で患者に最も多く発見されたアミノ酸変異（Pro418Arg）をマウスに導入したknock-inマウスを作成した結果、変異マウスは骨減少と生存率の低下を示すことが分かりました。このチェルビズムknock-inマウスとtoll like receptor 2あるいはtoll like receptor 4knock-outマウスを交配することによって得られる、toll like receptor 2あるいはtoll like receptor 4をknock-outしたチェルビズムknock-inマウスを用いた解析およびSH3BP2以外のチェルビズム原因遺伝子の探索を行うことを研究目的としました。

2 得られた成果

チェルビズムknock-inマウスでtoll like receptor 2あるいはtoll like receptor 4をknock-outした結果、肝臓における炎症が有意に軽減されたことから、チェルビズム発症のシグナルは、toll like receptor 2および4を経由することが明らかとなりました。また、RIPキナーゼの阻害薬であるネクロスタチンを投与したチェルビズムknock-inマウスの肝臓における炎症が有意に軽減されたことから、チェルビズム発症のシグナルにネクロシス関与している可能性が示唆されました。

SH3BP2のエクソン領域にアミノ酸変異のないチェルビズム患者8名（シリアの兄弟2名、ブラジルの2家系の兄弟4名、インドの2家系2名）が存在し、両親が血族婚であることから常染色体劣勢遺伝が強く疑われた。現在、SNPタイピングを行い、ホモ接合領域を調べることによって、原因遺伝子の存在する染色体領域を調査中です。



大谷 淳二 医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 歯学分野 歯科矯正学 助教(当時)

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース
 訪問した国：オーストラリア
 期間：平成24年10月9日～平成24年10月19日
 研究機関名等：University of Sydney, Dental Hospital
 受入研究者等：教授 M. Ali Darendeliler

1 初期の目的の遂行状況

2012年10月10日から13日にかけて、オーストラリアのシドニーにて行われた第4回世界インプラント矯正歯科学会における招待講演のため、シドニーへ渡航しました。また、本学会の大会長でもあるSydney大学のAli Darendeliler教授の研究室を訪問し、情報交換することを目的としました。

招待講演の演題名は、「A limitation of molar distal movement: CBCT study」で、約40分間の講演の後、

質疑応答を行ないました。また、シドニー大学矯正歯科でも3日間にわたって講義、ハンズオン実習、診療見学を行い、活発な意見交換を行なう事ができました。

2 得られた成果

我々の研究グループでは、2006年より韓国企業と共同研究契約を締結し、これまでに基礎研究および臨床調査を行なってきました。

また、その成果を以下の国内外の学会で発表してきました。

2006年：中四国矯正歯科学会（口演）、日本矯正歯科学会（ポスター）

2007年：TAD臨床研究会（口演）

2008年：アジアマイクロインプラント研究会（ポスター） 韓国矯正歯科学会（ポスター）

2009年：アジアインプラント矯正歯科学会（招待講演） 日本矯正歯科学会（ポスター）

2010年：広島国際カンファレンス（招待講演） 日本インプラント矯正研究会（招待講演） 長崎大学矯正歯科セミナー（招待講演）

世界インプラント矯正歯科学会（招待講演）

2011年：世界インプラント矯正歯科学会（ポスター）

2012年：日本インプラント矯正研究会（招待講演） 日本矯正歯科学会（ポスター）

世界インプラント矯正歯科学会（招待講演）

さらに、学会終了後は、シドニー大学病院矯正歯科において、矯正用インプラントアンカーの植立や臨床使用方法に関する講義、実習を行ないました。

これまでの共同研究結果を基に、我々は、植立器具の一つであるドライバーを開発しましたが、シドニー大学矯正歯科ではこのドライバーが導入されたばかりであり、使用方法やコンセプトに関して、非常に活発な質問を受けました。また、我々が現在開発している超短小型アンカースクリューは、シドニー大学でも検討が行なわれており、その安定性に関連する要件について、活発な議論がなされました。大変有意義な時間を過ごし、貴重な経験を行うことができました。



砂川 紘子 病院 口腔健康発育歯科 歯科診療医(当時)

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース
 訪問した国：オーストラリア
 期間：平成24年10月9日～平成24年10月19日
 学会名：4th World Implant Orthodontic Conference
 会場：Hilton Hotel, Sydney
 研究機関名等：University of Sydney, Dental Hospital
 受入研究者等：教授 M. Ali Darendeliler

1 初期の目的の遂行状況

この度2012年10月10日から13日にかけて、オーストラリアのシドニーにて行われた4th World Implant Orthodontic Conferenceに参加し、「A newly developed short micro-implant, available or not」という演題で一般口演を行いました。また、本学会の大会長でもあるSydney大学のAli Darendeliler教授の研究室を訪問し、情報交換を行いました。

我々の研究グループが、共同研究先であるJeil Medical Co. (韓国) および(株) プロシード(日本) と、これまでに行なってきた研

究の成果、ならびに新規開発したアンカースクリューやその周辺植立器具について、一般口演において発表するとともに、Sydney大学の研究室にてプレゼンテーションを行い、さまざまな意見交換を行いました。

Ali Darendeliler教授らの研究グループも、我々の開発したアンカースクリューを使用し、これを用いた治療のメカニクスについて継続して研究を実施し、多くの論文を発表しています。すでに広く普及しているアンカースクリューについて、今後どのように有効に活用していくのか、アンカースクリュー植立の成功率をいかに向上させていくのか、多くの議論を行いました。

2 得られた成果

世界インプラント矯正歯科学会は今度第4回目を迎えますが、これまでも第2回(台湾)および第3回(イタリア)大会で発表を行なってきました。また、アジアインプラント矯正歯科学会や日本矯正歯科学会でも同様に発表を行っており、昨年の第3回世界インプラント矯正歯科学会では、最優秀ポスター賞を受賞しました。

今回もまた自分の研究テーマに沿った学会に参加し、口演を行なうのみならず、アンカースクリューの権威である世界中の著名な先生の講演を聴き、多くの臨床および研究発表を見ることができました。さらに、シドニー大学病院矯正歯科を訪問して指導教官の大谷助教が講演を行なうのに同行し、矯正歯科治療におけるアンカースクリューの使用現状を学ぶ機会にも恵まれました。

これまで我々は、動物実験結果をベースとした、より安全で安心なアンカースクリューの開発およびその植立手技について報告してきました。その結果として得られた、「高い成功率」が国内外で評価されているものと考えています。シドニー大学病院矯正歯科では、我々の開発したアンカースクリューを使用しており、これを用いた治療のメカニクスについて多くの論文を発表しています。

このような背景のもと、相互の研究グループ間で交流を深め、植立方法や治療テクニックを具体的に共有することができたことは、さらなる基礎研究の発展や大規模臨床研究等が共同で行なえるようになると思われ、我々にとって有用なデータが得られるようになるであろうと思います。実際、今回我々がより安全な植立を可能とするアンカースクリューの開発において、歯根接触リスクの回避を目的とした超短小型アンカースクリューについての発表を行ったところ、シドニー大学でも同様の研究、検討を行っており、活発な意見交換を行いました。大変有意義な時間を過ごし、貴重な経験を行うことができました。

これまで、長年の懸案事項であった、矯正歯科用固定源としてのアンカースクリューの使用が、今夏ようやく厚生労働省の業事法上の認可を受け、今後国内でも急激な使用の拡大が予想されるとともに、エビデンスに基づいた植立手技など情報のニーズがさらに高まると考えられます。この分野において、常に最先端の情報を広島大学病院から国内外へ発信し続けることは、より質の高い治療を提供する上で非常に有用であり、その環境作りの一環として本派遣が重要な役割を担えるよう努力して参ります。


佐能 正剛 医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 薬学分野 生体機能分子動態学 助教

コース名：若手研究者派遣コース

訪問した国：イタリア

期間：平成24年9月3日～平成24年11月17日

研究機関名等：マリオ・ネグリ薬理学研究所

受入研究者等：室長 Enrico Garattini

1 初期の目的の遂行状況

薬物代謝酵素のうち、アルデヒドオキシダーゼは、実験動物とヒトにおいて、その分子種や発現量に種差があることが報告されています。その種差の要因として、発現する分子種が異なることが挙げられます。ヒトにおいてAOX1のみが発現しているのに対し、実験動物（マウス、ラット、サル）ではAox1、Aox3、Aox4やAox3l1などの複数の分子種が発現しています。このことから、ヒトと実験動物におけるアルデヒドオキシダーゼに対する基質特異性は異なることが考えられます。以上から、アルデヒドオキシダーゼの*in vitro*代謝予測評価系の構築を目的に、ヒトで発現されるAOX1の基質特異性や代謝活性を精査しました。

2 得られた成果

(1) ヒトおよびマウスアルデヒドオキシダーゼ (hAOX1, mAOX3, mAOX4) の発現細胞を用いた研究

ヒトアルデヒドオキシダーゼ (hAOX1) およびマウスアルデヒドオキシダーゼ (mAOX3, mAOX4) 遺伝子を細胞に導入した細胞を用いて、hAOX1を発現させ単離しました。発現はウェスタンブロッティングにて確認しました。

(2) hAOX1、mAOX3、mAOX4のアルデヒドオキシダーゼ活性に関する研究

単離したhAOX1、mAOX3、mAOX4とアルデヒドオキシダーゼの基質を反応させ、それぞれの代謝活性を評価しました。

(3) 展望

今後、共同研究という形で上記(1)、(2)の発展研究を行っていく予定です。派遣中は、アルデヒドオキシダーゼの研究を通して、細胞培養、タンパク精製などの様々な研究手法の基礎をご教授いただき、有意義な研究を行うことができました。


横大路 智治 医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 薬学分野 病態解析治療学 助教

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース

訪問した国：アメリカ合衆国

期間：平成25年2月22日～平成25年2月28日

学会名：American Academy of Allergy, Asthma and Immunology (AAAAI) Annual Meeting 2013 (San Antonio)

会場：Henry B. Gonzalez Convention Center

1 初期の目的の遂行状況

2013年2月22日から26日までアメリカ合衆国テキサス州サンアントニオで開催されたAmerican Academy of Allergy, Asthma and Immunology (AAAAI) 2013年会に参加しました。学会プログラムは、アレルギー疾患の診断法や免疫療法の有用性に関する臨床研究の報告が中心でした。また、アレルギー疾患の病態や免疫学に関する基礎研究の報告も多数あり、多くの研究者や医師を中心とする医療関係者らによって最新の研究成果の発表とそれに関する議論、情報交換などが行われました。海外における最新の研究成果を聴講することで、現在取り組んでいる研究分野の方向性を把握することができました。今回、私は“Characterization of the causative allergens for wheat-dependent exercise-induced anaphylaxis sensitized with hydrolyzed wheat proteins in facial soap”という演題でポスター発表を行いました。本研究は、加水分解小麦を含有した石鹸を使用することで経皮的に感作された小麦依存性運動誘発アナフィラキシー患者の原因抗原とそのIgE結合エピトープの配列を解析し、本疾患の診断精度の向上と新規免疫療法の確立の可能性を示したものです。多くの参加者と議論を交わすことで、自分が取り組んでいる研究テーマに関する最新の知見や貴重な意見をいただくことができ、その進展具合の世界における位置づけを認識することができました。また、これらの議論を通じて、実践的な語学力の重要性を再認識することができました。

2 得られた成果

研究業務を遂行するに当たり、研究で得られた成果を公表することは重要な責務です。研究成果の報告には様々な方法がありますが、専門的な学会での発表は研究成果をいち早く報告することができ、かつ自分の研究テーマの現在の位置づけを客観的に認識するために有効な方法です。通常、本邦で開催される学会での発表は語学的な問題は少なく、正確な情報を早く国内に公表できる点で優れていますが、研究成果に対するディスカッションや研究テーマの位置づけが国内のみに限局される可能性が高くなります。派遣中は、海外の学会参加を通して、アレルギー疾患の診断や治療法に関する最新の知見を世界の研究者や医療関係者から得ることができ、自身の取り組んでいる研究の国際的な位置づけを明確にすることができました。また、現在取り組んでいる研究分野が将来的にどのような方向に向かっているのか、これらから自分が何に取り組むべきなのかを大まかではありますがつかむことができました。ポスター発表では、様々なバックグラウンドを持つ研究者や医療関係者の方々と議論を交わすことができ、食物アレルギーという疾患を免疫学・分子生物学を中心とした基礎研究の観点とより実践的な臨床研究の観点から捉えることができたことは、大きな成果でした。一方、学会参加者とのディスカッションや一般の市民の方々と英語で会話する機会が持てたことは、より実践的な語学能力を身に付ける必要があることを強く意識する良い機会となりました。このように、派遣中は、大変有意義な時間を過ごし、将来の研究遂行に貴重な経験を行うことができました。



黒瀬 智之 医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 保健学分野 生体構造学 助教

コース名：若手研究者派遣コース
 研究を行った国：オーストラリア
 期間：平成24年10月2日～平成25年2月26日
 研究機関名：シドニー大学
 受入研究者等：准教授 Chris Jackson

1 初期の目的の遂行状況

凝血や炎症にかかわる Activated Protein C (APC) には、治癒促進効果が示されています。Connexinはギャップ結合を形成するタンパク質で、組織損傷後の治癒過程で局在や発現量が変化します。APCによる治癒促進の機序を調べるために、APCがconnexinに影響を及ぼすか、またどのような影響を及ぼすかを検討しました。

ヒト臍帯静脈由来細胞 (human umbilical vein endothelial cells: HUVECs)、ヒト角質細胞 (keratinocytes)、皮膚真皮線維芽細胞 (dermal fibroblasts) を採取、培養しAPCを添加します。免疫細胞化学的染色、Western blot, real-time PCRにより、APC処理によるconnexinの動態について調べました。

2 得られた成果

connexinのmRNA発現量は細胞種やconnexinのタイプによって異なり、APC処理経過時間によっても発現量は異なりました。内皮細胞や角質細胞で、connexinのmRNA発現量の変化が観察されました。各connexinのタンパク質量やリン酸化されたタンパク質量をWestern blotで解析しましたが、検出が不十分で解析できなかったです。

APCによる創傷治癒過程のメカニズムにconnexinが関与するかどうかをさらに検討していく予定です。



前田 慶明 医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門 保健学分野 スポーツリハビリテーション学 助教

コース名：若手研究者派遣コース
 研究を行った国：オーストリア (ザルツブルグ)、オランダ (フローニンゲン)
 期間：平成24年10月30日～平成25年2月28日
 研究機関名：1. Salzburger UniversitATsklinikum (Salzburg, Austria) 2. University of Groningen (Groningen, Netherlands)
 受入研究者等：1. 教授 Anton Wicker 2. 教授 Klaas Postema

1 初期の目的の遂行状況

1) Salzburger UniversitATsklinikum (Salzburg, Austria)

大学院のリハビリテーション部門での実習を含めた見学を目的に平成24年11月1日から12月23日までオーストリアのザルツブルグ大学病院に海外長期派遣プログラムを利用し、Dr. Anton Wicker, MDのもとで研修を受けました。

リハビリテーション部での急性期や外来、一般病棟での治療場面や、スポーツ外傷・障害の予防、健康増進のためのアプローチの見学、機能評価やトレーニングに使用する機器の説明などを受け、その部門で最新のリハビリテーションについて学ぶことができ、教育や研究につながる経験となりました。

2) University of Groningen (Groningen, Netherlands)

オランダのUniversity of GroningenのProf. Postemaの研究室で、平成25年1月7日から2月27日まで研修を受けました。そこでは健康者を対象に足底圧分布測定機器を用いた歩行動作の解析とそのデータベースの作成を実施しました。この研究テーマは本研究室の新たな研究プロジェクトであり、その一員として測定に携わる機会を得ました。歩行時の足底圧分布変化を測定し、性別により違いがあるかを明らかにすることとしました。また、対象者が普段使用しているシューズと市販のランニングシューズによって違いが生じるかを測定しました。

2 得られた成果

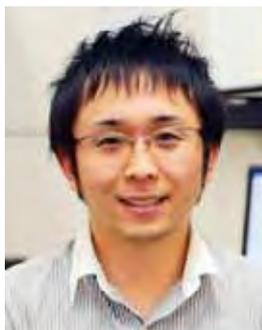
1) Salzburger UniversitATsklinikum (Salzburg, Austria)

ザルツブルグ大学病院ではオーストリアで行われている理学療法作業療法、またスポーツサイエンティストによる健康増進やスポーツ障害後のトレーニングを学ぶことができました。現在我々の研究室で行っているスポーツ外傷・障害の予防、また高齢者に対する健康維持・増進へのトレーニング方法、ならびに身体機能評価・測定方法を学ぶことができました。また、日本とオーストリアでのリハビリテーションにおけるアプローチや保険内容の違いなど、医療制度の違いなども学び、議論することができました。

2) University of Groningen (Groningen, Netherlands)

本研究では動作時の足底圧を客観的に測定できる『Pedar-X system』を用いて、シューズの違い (ランニングシューズと本人が普段より使用しているシューズ) により歩行時の足底圧分布の変化があるかを検証しました。その結果、歩行中の最大足底圧に違いを認めました。先行研究では足底圧分布を各エリアに細分化し、比較した結果、Mid foot部分に違いがあることが示されています。このことを再確認するため、フローニンゲン大学の共同研究者とともに分析を継続していきます。

今回の滞在期間中、世界的にも有名な大学で新プロジェクトの一員として参加し、また、多くの研究者とディスカッションする機会を得ました。また、多くの仲間にも会うことが出来ました。このような素晴らしい機会を与えてくださった本プログラム関係者の皆様に深謝申し上げます。


阿南 雅也 医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 保健学分野 生体運動・動作解析学 助教

コース名：若手研究者派遣コース

研究を行った国：アメリカ合衆国

期間：平成24年9月28日～平成24年12月27日

研究機関名：University of Nebraska at Omaha

受入研究者等：教授 Nicholas Stergiou

1 初期の目的の遂行状況

申請者のこれまでの研究では、高齢者や変形性膝関節症（膝OA）患者の歩行（1歩行周期）や椅子からの立ち上がり動作の運動学および運動力学解析の研究を行ってきました。しかし、歩行動作は連続する周期性をもった動作であり、心拍などと同様に常には一定ではなく周期のリズムがあり、ゆらぎが存在します。また脊髄には歩行と関連の深い中枢性パターン発生器（Central pattern generator; CPG）とよばれる神経振動子が存在し、歩行パターンの発生やリズム生成の役割を担っています。このため同じリズムの歩行でも、

Variability（変動性）が生じます。運動出力系に関わる部位の障害をもつ中枢神経疾患患者、整形外科疾患患者、認知症患者、高齢者などを対象にした研究では、歩行時のVariabilityが増大すると報告されています。

申請者の派遣先であったDr. Nicholas Stergiouが所属するUniversity of Nebraska at OmahaのNebraska Biomechanics Core Facilityは、身体運動のVariabilityの研究を中心に行っており、バイオメカニクス分野の研究では常に世界の最先端を走るトップレベルの研究室です。そこで今回の派遣では、身体運動のVariabilityに関する知識・実験技術等に関する研究能力を高めること、膝OA患者の歩行時のVariabilityの特徴を捉えるための前段階として、模擬的な膝関節伸展制限下での歩行時における時間的および運動学的Variabilityの特徴を明らかにすることを目的として、Nebraska Biomechanics Core Facilityにて研究を行いました。

2 得られた成果

Nebraska Biomechanics Core Facilityにおいて、Variabilityに関する研究手法の基礎を学びました。そして、University of Nebraska Medical Centerの倫理委員会にて、自身の研究実施の承認を得ました。当該研究では健康若年者を対象として装具を装着していない通常条件と膝関節伸展制限装具を装着した制限条件において、被験者が快適と感じる速度における5分間のトレッドミル上の歩行動作を三次元動作解析装置にて計測し、時間的および運動学的データを算出しました。また、速度による影響を調べるために、被験者が快適と感じる速度の-20%、-10%、+10%、+20%それぞれの歩行動作も計測しました。現在は、データ解析中であり、今後、共同研究という形でプロジェクトを行っていく予定です。

実験をととして、Variabilityの研究手法の基礎を学ぶことができ、今後、膝OA患者を始めとする運動器疾患の理学療法の実践や基礎的理論を構築するための今後の方向性を決定する上で、きわめて貴重な情報を得ることができました。

最後に、今回のプログラムをととして海外にて研究活動に従事できただけでなく、世界のトップレベルの研究者とディスカッションができ、さらに研究者間のネットワークを構築することができました。このような機会を与えてくださった本プログラムの関係者の皆様、サポートしていただいた方々に深謝する次第です。


大鶴 直史 医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 保健学分野 生体環境適応科学 助教

コース名：若手研究者派遣コース

研究を行った国：アメリカ合衆国

期間：平成24年12月17日～平成25年2月28日

研究機関名：Brown University

受入研究者等：准教授 Yuka Sasaki

1 初期の目的の遂行状況

私はこれまで、体性感覚や聴覚における変化検出機構に関する研究を行ってきました。ヒトが何かを識別する能力は経験依存性に向上することが知られており、知覚学習（Perceptual learning）と呼ばれています。この知覚学習には、脳の可塑的変化が関与していることが数多く報告されています。現在リハビリテーション領域において、脳の可塑性に着目したニューロリハビリテーションが注目を集めています。私自身、特に触覚の知覚学習が、脳卒中後の麻痺の回復や、ある種の難治性疼痛に対して有用な治療法になるのではと考えています。

そこで今回、知覚学習における世界的権威であるブラウン大学の渡邊武郎教授および佐々木由香准教授の研究室において、知覚学習の基礎を学び、行動実験データの取得を行いました。

そこで今回、知覚学習における世界的権威であるブラウン大学の渡邊武郎教授および佐々木由香准教授の研究室において、知覚学習の基礎を学び、行動実験データの取得を行いました。

2 得られた成果

Department of Cognitive, Linguistic & Psychological Sciencesにおいて、知覚学習に関する研究手法の基礎を学びました。若年健康者を対象に、知覚学習の研究が最も進んでいる視覚刺激を用いて、行動実験のデータ取得を行いました。Texture discrimination taskと呼ばれる課題を用い、難易度が徐々に上がるブロックデザインと、様々な難易度の課題がランダムに提示されるランダムデザインでの比較を行いました。データは現在も解析中ですが、デザインにより、難易度と正答率の関係を示すサイコメトリックカーブが異なる傾向が示されました。詳細な解析は今後も継続し、帰国後の研究に関しても共同研究を進める予定です。

上記実験以外にも、当該分野において世界をリードしている研究者とディスカッションをし、今後の研究に助言を頂いたことも大きな収穫となりました。



三木 恵美 医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 保健学分野 身体・生活機能制御科学 助教

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース

訪問した国：英国

期間：平成24年11月21日～平成24年11月27日

研究機関名等：1. The Royal Marsden School of Cancer Nursing and Rehabilitation 3. Camden Community Palliative Care Team 4. St. John's Hospice

受入研究者等：1. Head OT, DMS Jill Cooper 2. Lecturer Helene Hibbert 3. Macmillan OT Sharon Cavanagh 4. Senior OT Gina Pavlo

1 初期の目的の遂行状況

我が国では2010年度より「がん患者リハビリテーション料」が新設され、がん患者に対するリハビリテーションへの期待が急速に高まっています。しかし、急速に拡大するがん患者に対するリハビリテーションの「質」を危惧する声も出てきており、がんを対象とするリハビリテーション・スタッフへの専門教育が喫緊の課題とされています。そこで、20年以上前からがん専門作業療法士を育成している英国の専門教育の概要や教育プログラムの内容を知るとともに、専門教育プログラムを修了した作業療法士（OT）の臨床での活動状況を知ることが目的として、英国の関連施設の視察を行いました。The Royal Marsden School of Cancer Nursing and Rehabilitationでは、開設されている教育プログラムやシステムについて、講師との情報収集や意見交換を行いました。また、The Royal Marsden Hospital, Camden Community Palliative Care Team, St. John's Hospiceでは、The Royal Marsden School of cancerを修了したがん専門作業療法士と、がん患者に対するアセスメントや介入方法、今後の課題等について意見交換を行いました。

2 得られた成果

英国には過去20年間の専門教育実践によって蓄積された経験と実績があり、意見交換によって得られた情報は、今後、日本でのがん専門作業療法士養成教育制度の導入に向けて教育プログラムやカリキュラムを検討する上で、非常に意義あるものでした。また、臨床で活躍するがん専門作業療法士と意見交換したことで、がん患者が抱える問題を捉えるアセスメント・ツールや、問題に対処するための具体的な手技や方法、この領域が抱える様々な課題など、非常に幅広い知見を得ることができました。更に、英国で教育や臨床実践を行っているがん専門作業療法士と意見交換できたことは、今後の共同研究やネットワーク構築の足掛かりとなり、今後の国際的活動の発展につながるものと考えています。この度の経験は、今後私が教育活動や研究活動を進めるうえで非常に有意義なものとなりました。

最後に、このような機会を与えてくださった諸先生方、本学医歯薬保健学研究科若手研究者等海外派遣プログラムの関係者の皆様に感謝いたします。



新宮 美穂 医歯薬保健学研究院 統合健康科学部門 保健学分野 基礎看護開発学 助教

コース名：海外フィールドワーク研究コース

訪問した国：アメリカ合衆国

期間：平成24年12月25日～平成25年1月6日

研究機関名等：1. United Network for Organ Sharing 2. VCU Medical Center 3. New York Organ Donor Network

受入研究者等：1. Assistant Director Joel Newman 2. Transplant coordinator Stephanie Stamper 3. Clinical Manager Charles J. Gonder

1 初期の目的の遂行状況

昨年度、移植医療先進国である米国の移植状況を知り、日本における課題等を見出すことを目的とし、本プログラムの協力を得て米国の移植施設を訪問しました。今回は、移植医療と看護活動の継目である臓器分配・幹旋機関の実情を明らかにすることを目的とし、米国の公的臓器分配機関であるUnited Network for Organ Sharing (UNOS)と、地域臓器幹旋機関であるNew York Organ Donor Network (NYODN)、移植移設であるVCU Medical Centerを訪問し、各々の施設の役割や移植医療に対する考え等について情報収集を行い、日本の移植医療について意見交換を行いました。

換を行いました。

2 得られた成果

UNOSは、日本の臓器移植ネットワークと同じような役割を担っており、臓器移植希望者を登録・管理し、医学的基準に基づいてレシピエント候補者を決定する米国唯一の臓器分配機関であるため、公平・公正且つ透明性を重んじ、厳重なセキュリティの中24時間体制で全米のレシピエント・ドナー情報を管理していました。また、市民や学校・関連施設への啓蒙教育といった移植普及活動の他、薬学、科学、公共政策学、医療技術等様々な分野の研究者が集い、移植医療の発展を目指した研究活動も行っています。同施設の敷地内には、National Donor Memorialというドナーとその家族への讃辞を表したオブジェ等が設置された場所があり、臓器提供の素晴らしさを唱えると同時に、ドナーファミリーの精神的ケアの場となっていました。

地域臓器幹旋機関であるOrgan Procurement Organization (OPO)は、全米に58ありますが、深刻なドナー不足解消のためにOPOが果たす役割はとて大きく、各々のOPOが独自のキャンペーンやグッズを考案し、様々な媒体を通して積極的な啓蒙活動を行っていました。また、訪問したNYODNは、OPOの中でも数少ない手術室が設置された施設であり、OPOの中でトリミングや一時的な臓器保管等が可能です。

VCU Medical Centerは、Virginia州にある移植実施病院で、心臓・肺・肝臓・腎臓・膵臓移植を行っています。特に、肝臓・腎臓に関してはドナー不足の影響もあって生体間移植も盛んに行っており、そこには日本の移植事情と共通する部分が見られました。ここでは、移植が必要な患者のみならず、診療に訪れる患者が誰でも移植医療に興味を持ってよう、院内にパンフレットを設置して普及活動を行っていました。

米国でもドナー不足は大きな問題であり、各施設が地道に啓蒙・普及活動を行うことで、移植医療に対する国民の認知は着実に高まり、ドナーの増加に繋がるといことがわかりました。また、今回の渡航では、医療職以外の活動を目にする機会が多くあり、移植医療ではレシピエントやドナー・ドナー家族の身体的・精神的ケアはもちろんのこと、情報管理や教育・政策面への取り組みもその発展に大きな役割を果たしていることがわかりました。特に、レシピエント・ドナー・ドナー家族の精神的ケアに重点を置いた意見が多く聞かれ、日本でも看護職者や移植コーディネーターが患者と関わる上で重要視すべき点であることがうかがえました。各々の施設の役割が明確化され、今後の自身の研究を進める上で非常に有意義な経験となりました。

最後に、このような貴重な経験の機会を与えてくださった本プログラムの関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。



飯塚 大輔 原爆放射線医学研究所 ゲノム障害医学研究センター 分子発がん制御研究分野 助教

コース名：若手研究者派遣コース
 研究を行った国：アメリカ合衆国
 期間：平成24年9月1日～平成25年2月4日
 研究機関名：New York University Medical Center
 受入研究者等：教授 Mary Helen Barcellos-Hoff

1 初期の目的の遂行状況

2012年9月2日より2013年2月4日までニューヨーク大学メディカルセンター・Radiation Oncology研究室 (Mary Helen Barcellos-Hoff教授) を訪問することができました。Barcellos-hoff教授らは以前からTransforming Growth Factor beta (TGF-β) に着目し、乳腺・乳がん研究を実施してきています。彼女らはこれまで乳腺上皮を除去したhostマウスに放射線を照射し、そこに放射線照射されていない乳腺を移植すると高率に乳がんが発生することを見出して、放射線照射したTGF-β heterozygote hostに乳腺を戻すと乳がん発生が遅延する (対照群レベル) ことから、その原因は間質から分泌されるTGF-βであるとしています (Nguyen et al, *Cancer Cell*, 2011)。また、培養細胞を用いた実験では不死化した乳腺上皮細胞に放射線を照射すると、TGF-βを介した上皮間葉転換 (Epithelial Mesenchymal Transition, EMT) が促進されることを見出しています (Andarawewa et al, *Int J Radiat Oncol Biol Phys*, 2011)。これらの知見は100 mGyやそれ以下の低線量放射線で誘導され、照射線量に依存しないことがわかっています。本派遣の目標は帰国後にこれらの実験系を用いて低線量放射線影響研究を行うための手技習得でした。

2 得られた成果

動物実験では3週齢の雌マウスにおいて、乳腺上皮を含む脂肪体 (fat pad) を麻酔下で除去する手技を習得しました。加えて10週齢の雌マウスの乳腺を採取し、そこから組織片を作り、前述のfat padを除去した3週齢の雌マウスに移植する手技も習得しました。また、派遣先で行われている前述の実験系を用いた発がん実験に一部従事し、全体のプロセスを把握することができました。

培養細胞を用いた検討は不死化したヒト乳腺上皮細胞 (MCF-10A) を用い、放射線 (X線) を照射し、400pg/mlのTGF-βを含む培地で培養することで、Andarawewaらが2011年に報告した実験結果 (上皮マーカーであるE-cadherinの減少) と同様の結果が得られました。

また予備的知見ではありますが、この放射線によるTGF-βを介したEMTの促進は活性酸素を生成する薬剤でも同様に観察されることから、放射線などから生じる活性酸素種がTGF-βを介したEMTの促進に重要な役割を演じていることが示唆されました。

最後に、このような機会を与えていただきました本学大学院医歯薬保健学研究院・医歯薬保健学研究科若手研究者等海外派遣プログラムの関係者の皆様に御礼申し上げます。



時林 原爆放射線医学研究所 放射線障害機構研究部門 細胞修復制御研究分野 特任助教

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース
 訪問した国：プエルトリコ
 期間：平成24年9月28日～平成24年10月6日
 学会名：The 58th Annual Meeting of the Radiation Research Society
 会場：Rio Mar Resort Hotel

1 初期の目的の遂行状況

放射線照射により誘発された染色体異常について新しい解析法を確立し、放射線被ばく線量の推定に有用であることを、Radiation Research誌本年5月号に発表しました。今回は、Radiation Research誌を発行する米国Radiation Research Society (RRS) の第58回RRS年会でポスターにて、その研究成果を報告しました。学会で、他の研究者と研究成果などの情報交換を行い、当初の目的を十分に遂行できました。

2 得られた成果

今回の米国RRSの年会で、多くのシンポジウム、ポスター発表のセッションにおいて、放射線被ばくの人体影響についての最先端の研究発表を聞き、実際に研究を行っている本人に会って議論を行い、大変勉強になりました。

また、私のポスター発表は多くの研究者の方から様々な質問やアドバイスを頂き、有意義なものとなりました。今回の学会発表に参加して、私たちが開発した新しい染色体異常解析法を紹介し、放射線関係の研究者と意見交換し、これからの研究について考える上で非常に参考となる多くの知見を得ることができました。

今回このような機会を与えてくださった諸先生方、本学医歯薬保健学研究院・医歯薬保健学研究科若手研究者等海外派遣プログラムの関係者の皆様に心より感謝申し上げます。



谷本 圭司 原爆放射線医学研究所 放射線災害医療研究センター 放射線医療開発研究分野 助教

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース
 訪問した国：シンガポール
 期間：平成24年11月26日～平成24年12月2日
 研究機関名等：Cancer Science Institute of Singapore, NUS
 受入研究者等：教授 Lorenz Poellinger

1 初期の目的の遂行状況

今回、細胞の低酸素応答機構シグナルネットワークを明らかにすることを目的とし、低酸素応答の網羅的ジェネティクスおよびエピジェネティクス解析、バイオインフォマティクス解析で先端的研究を進めている国立シンガポール大学シンガポールがん科学研究所のProf. Poellinger研究室へ2度目の訪問を果たしました。今回も短い期間で多くの議論を重ねる事ができ、研究所内外の施設の見学や説明を受け、実験材料の供与や今後の研究方針の決定など当初の計画を十分に遂行することができました。

2 得られた成果

今回、双方の研究課題についての議論を重ね、現在の研究課題についての共同研究の継続方針、新しい研究課題の方針などを決めることができました。例えば、我々は、肺がん患者の発がん感受性や予後に関する重要な遺伝子多型部位を見だし、それらの分子機構に関しての実験結果を提示しました。同機構に関してのバイオインフォマティクス解析結果から関連する多くの転写調節機構、遺伝子修飾、クロマチン修飾などの情報を得る事が出来ました。新たな機能性タンパク質同定研究プロジェクトも進めており、幾つかの実験および議論を重ね、多くの成果を上げる事ができました。



板倉 勝昌 医歯薬学総合研究科 博士課程3年 創生医科学専攻 視覚病態学研究室

コース名：海外フィールドワーク研究コース
 訪問した国：オーストラリア
 期間：平成24年12月1日～平成25年2月7日
 研究機関名等：Centre for Eye Research Australia, Royal Victorian Eye and Ear Hospital
 受入研究者等：准教授 Ecosse Lamoureux

1 初期の目的の遂行状況

本研究は放射線影響研究所(放影研)、メルボルン大学、広島大学の共同研究です。原爆被爆者における放射線と黄斑変性症との関連についての研究を引き続いて行うことが第1の目的でした。画像を解析して得られたデータと、被爆者のデータからデータセットを作成し、解析を進めました。現在最終的なまとめの段階です。

加齢黄斑変性症と関連するその他の危険因子についてさらに理解を深めるために、加齢黄斑変性症と網膜血管径、脳卒中の有病率、HDLコレステロール、血圧、禁煙などとの関連についても検討を行っているところで、そのために追加のデータセットを作成中です。

第2の目的は、糖尿病網膜症と食事、栄養についての研究です。シドニー近郊のウロゴロン大学の協力を得て、メルボルン大学所有のデータから、個人個人の栄養摂取を調べ、その栄養素と糖尿病網膜症との関連を調べています。データセット作成はほぼ完了しました。

2 得られた成果

追加の解析が必要な部分もありますが、加齢黄斑変性症に対する放射線の影響についてわかったことの概要は以下の通りです。今回研究対象となった広島長崎の原爆被爆者生存者において、過去の被爆による放射線と、現在の加齢黄斑変性症の有病率とに、有意な関連はありませんでした。被爆生存者は非常に低線量被爆であったことや、これまでの死亡者に加齢黄斑変性症が多く含まれていた可能性も考えられます。今回の研究からは、急性期の影響はわかりませんし、必ずしも放射線被曝と加齢黄斑変性症との因果関連がないと言い切れるわけではありません。

オーストラリアの文化や人々の多様性を知り、自分の視野が広がったように思います。メルボルンの恵まれた環境で生活することができたことと、他大学の優秀な研究者達と友人になれたことは、自分の人生の財産になりました。



山本 光 医歯薬学総合研究科 博士課程3年 創生医科学専攻 神経薬理学研究室 (当時)

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース
 訪問した国：アメリカ合衆国
 期間：平成24年10月12日～平成24年10月19日
 学会名：北米神経学会
 会場：New Orleans Ernest N. Morial Convention Center
 研究機関名等：ミシガン大学
 受入研究者等：教授 Henry L. Paulson, MD, PhD

1 初期の目的の遂行状況

私は、2012年10月13日から16日までアメリカ合衆国ニューオーリンズにて開催された北米神経科学学会 (Neuroscience 2012) に参加しました。今回参加した北米神経科学学会は毎年3万人以上の参加がある世界最大の神経科学の国際学会で、基礎から臨床まで、多くの演題が発表されています。今回、「Long-term exposure of cAMP analogue up-regulates the function of serotonin transporter (SERT) in RN46A cells」という題目でポスター発表を行い、海外の研究者と討論し貴重な意見を頂くことができました。

2 得られた成果

セロトニントランスポーター (SERT) は前シナプスにセロトニンを取り込むことにより、セロトニン神経伝達を終了させる膜タンパクで、抗うつ薬の作用点としてよく知られている分子です。また、自閉症の発症に、セロトニン神経系の発達異常の関与が指摘されており、SERTは胎生期、セロトニン神経発達時に発現が上昇することから、正常なセロトニン神経系の構築に寄与すると考えられていますが、多くは分かっていません。今回の学会参加で、他のSERTの研究をしている演題をみると、自閉症患者から見つかったSERTの変異を取り扱った演題が多く発表されており、また、SERT以外の研究領域でも興味深い発表や講演も多数行われており、大変勉強になりました。

学会発表後10月17日から18日にかけて、神経変性疾患の著名な研究者で、神経細胞のタンパク分解に造詣が深いミシガン大学のPaulson教授の研究室を訪問しました。ミシガン大学では、まず、研究施設の立派さと規模の大きさに驚きました。アメリカでは日本とは全く異なった環境で研究が行われていることがわかりました。また、教授をはじめ研究員の方々と貴重な意見交換ができました。

この度は、このような機会を与えて頂きました若手研究者等海外派遣プログラムに深謝いたします。



角 明美 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 展開医科学専攻 歯科矯正学研究室

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース
 訪問した国：オーストラリア
 期間：平成25年1月21日～平成25年2月26日
 研究機関名等：The University of Sydney
 受入研究者等：教授 Darendeliler MA

1 初期の目的の遂行状況

本留学における目的は、ラットを用いた実験的歯の移動において、歯髄組織の反応と歯根吸収との関連性を検討するという研究テーマについて、マイクロCTを用いた解析を行うことでした。そのため、留学前に研究テーマのサンプルを準備し、組織固定の状態ですべて郵送後、シドニー大学研究員・歯科矯正学医局員の指導の下、解析を行いました。

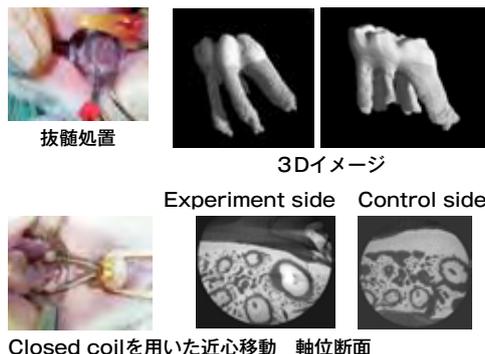
また、シドニー大学において、本研究と関連した研究の詳細を見聞するとともに、広島大学院医歯薬保健学研究科における同様の研究分野により一層の新規性や独創性を付与すること、という目標は達成できたと考えられます。

2 得られた成果

7週齢のWistar系雄性ラットを用いて実験を行いました。実験群では、上顎第一臼歯を抜髄後、根管充填を行いました。また、対照群として反対側の無処置上顎第一臼歯を使用し、両側ともに近心移動用のコイルを装着しました。牽引力は左右とも50gとし、月1回コイルのアクチベートを行いました。

両群を比較した結果、対照群において歯根吸収の量が多いことが明らかとなりました。また、牽引する期間が長いほど、歯根吸収量は増加し、1か月群と10か月群の比較では、10か月群の方が歯根吸収量は多くなる傾向がみられました。

本留学において、シドニー大学研究員・歯科矯正学講座医局員、同講座の先生方の協力により、短い留学期間にも関わらず研究成果を上げることができたことに感謝します。また、2年前に同講座の本川助教が留学されたことをきっかけに、相互の研究協力関係は継続しており、今後とも交流を深めてゆくことで、矯正歯科治療における歯根吸収の発現機序を解明し、その制御が可能となれば、世界的にも当該研究分野の大きな影響力を有する研究拠点の構築に大きく資するものと期待されます。





岩本 明子 医歯薬学総合研究科 博士課程後期3年 口腔健康科学専攻 口腔発達機能学研究室

コース名：海外フィールドワーク研究コース
 訪問した国：カンボジア
 期間：平成25年2月13日～平成25年2月25日
 研究機関名等：Wat Bo Primary School
 受入研究者等：校長 Peung Kimchhen

1 初期の目的の遂行状況

ササースダム小学校においては検診に加え、口腔衛生指導、口腔保健指導を行いました。繰り返し行ってきました指導はかなり定着しており、正しい持ち方でブラッシングを行える児童も多数見受けられました。

ワット・ボー小学校では、3度目の模擬授業としての特別講演を実施しました。現地では放置されがちな乳歯のう蝕にもアプローチする内容としました。主題は、乳歯のう蝕を放置すると永久歯に悪影響がある、萌出中の歯はう蝕になりやすいという2点とし、具体的にどのようなことに気を付ければよいのかを指導しました。教材として紙芝居を作製、使用しました。また、学部生による手製の模型は理解度の向上に大きく寄与しました。

カンボジアの歯科医師、歯学生とも活動をともし、協力体制の構築はこれまで以上に進んだといえます。

2 得られた成果

ワット・ボー小学校での模擬授業は、教員から大きな反響があり、『乳歯のむし歯についても今後は気をつけたい』といった声が聞かれました。児童に対する授業の実施についても、行えそうであるという意見が多くありました。

3年にわたって教員研修を続けていく過程で、ワット・ボー小学校をモデルケースとして、その他の学校へも活動を拡大できないかと考えてきましたが、この度の渡航ではこの点についても進展が見られました。

我々が活動を展開しているシェムリアップ州の教員養成校にて学校長と会談する機会を持つことができ、来年度以降の具体的な介入方法について協議しました。この試みが成功すれば、教員として巣立っていくときには、児童に対して口腔保健指導のできる人材が育つこととなり、これまで以上に多くの人の望ましい健康観の育成に関わることが可能となるでしょう。

また、タケオ州においても、教員養成校ならびに附属学校での口腔衛生指導の実態を視察、情報交換を行うことができました。我々がワット・ボー小学校で行ってきましたプログラムを文書にまとめることで活用してもらえる可能性が示唆されました。

保健省口腔保健局の副局長とも面会し、今年度の活動を報告し今後の展開について討議することができ、大変有意義な活動となりました。



岩本 優子 医歯薬学総合研究科 博士課程4年 展開医科学専攻 小児歯科学研究室

コース名：海外フィールドワーク研究コース
 訪問した国：カンボジア
 期間：平成25年2月13日～平成25年2月25日
 研究機関名等：University of Health Sciences
 受入研究者等：歯学部長 Im Puthavy

1 初期の目的の遂行状況

第6回目の歯科支援活動として、地元小学校を計5日間訪問し、口腔内診査や簡単な歯科治療、口腔衛生指導を実施しました。その詳細および内訳は下表の通りです。さらに新しい取り組みとして、タケオ州教員養成校およびシェムリアップ州教員養成校を視察に訪れ、特に後者では来年度以降に口腔衛生教育プログラムを展開

することを目標に協議を進めてきました。また、カンボジア国立健康科学大学からの学生や教員と共に治療や口腔衛生指導等に当たることで、より一層地域に根差した活動となりつつあることを実感しています。

2 得られた成果

小学校の訪問では回を重ねる毎に児童や教員との関係性が構築され、よりスムーズな活動が可能となってきました。第1回より繰り返し検診・治療・指導を繰り返している児童においては、その指導も少しずつ定着しつつあることを実感しています。我々の活動が継続して実施されることに対する教員からの反響は大きく、それがモチベーションにつながりうることを特に実感したと同時に、face to faceの関係を続け信頼を得ることの大切さも再認識いたしました。

我々の介入によって、ブラッシングの励行や選抜クラスにおけるフッ化物洗口がスタートした他、間食につながる売店の配置が改められたり、保健室棟が新設されるなど、ハード面の変化も現れています。

今後の展開として、現在訪問している小学校での経験を踏まえ、教員養成校でのプログラムを立案し、将来的に州全体の多くの小学校で口腔衛生指導が実施される環境づくりへと結び付けたいと考えています。

項目	ササースダム小学校					ワット・ボー小学校					合計	
	13日	14日	15日	16日	17日	13日	14日	15日	16日	17日		
口腔内診査	18	27	34	37	32	32	34	31	31	31	72	1028
フッ化物塗布	22	38	8	12	33	10	12	8	10	12	52	123
歯垢検査	13	18	8	9	28	14	7	7	7	7	35	75
歯周病検査	13	18	8	9	28	14	7	7	7	7	35	75
治療	24	23	10	8	11	3	7	7	7	7	29	79



宮良 政嗣 医歯薬保健学研究科 博士課程2年 医歯薬学専攻 生体機能分子動態学研究室

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース

訪問した国：アメリカ合衆国

期間：平成24年10月12日～平成24年10月19日

学会名：Society for Neuroscience 2012

会場：Ernest N. Morial Convention Center

1 初期の目的の遂行状況

2012年10月13日から17日にかけて、アメリカ合衆国ルイジアナ州ニューオーリンズで開催されたSociety for Neuroscience 2012に参加し、ポスター発表、情報収集を行いました。本学会は毎年約3万人の参加者が集まる世界最大規模の神経科学会であり、今年度も2万8千人を超える参加者によって最新の研究成果発表やそれに関する討論、情報交換が盛んに行われていました。特にポスター発表は約1万5千もの演題があり、巨大な会場にも関わらず、毎日、午前と午後で張り替えが行われるほどでした。初めての海外学会参加ということもあり、学会の初期は外国人研究者たちに圧倒されていましたが、幸いにも私の発表が最終日であったため、まず、情報収集や交流を通して学会の雰囲気に慣れるよう努めました。プログラムには、私の研究分野であるパーキンソン病やタンパク質分解に関するシンポジウム、ポスターが数多く含まれていたため、自分にとってより価値のある情報をできるだけ多く得られるよう、計画的に情報収集を行いました。また、このような機会を最大限に活用したいと考え、国籍、年齢を問わず様々な研究者に話しかけ、積極的に交流を行いました。会場内で研究打ち合わせを予定していたTed M. Dawson教授や研究室の学生とは今後の研究の展開について有意義な討論を行うことができました。

今回、私は「Inhibition of autophagic flux induced by low concentration of 1-methyl-4-phenylpyridinium ion」という演題でポスター発表を行いました。内容は、パーキンソン病関連神経毒MPP⁺低濃度曝露により作製した病態モデル細胞を用いて、細胞内の主要な分解系であるオートファジーの活性低下がパーキンソン病発症につながる可能性を示したものです。設けられていた発表時間（1時間）だけでなく、展示時間中（4時間）は常に自分のポスターの近くにいることで、多くの研究者からたくさん意見の頂くことができました。

2 得られた成果
今回の学会参加を通して、まず、パーキンソン病研究における本研究の位置付けをより理解することができました。パーキンソン病に関する演題の中でも、実験手法や着目している分子などから細かくテーマ分けされており、パーキンソン病研究の現状や今後発展していきそうな分野を知ることができました。これらの演題の中には著名な研究者の発表や論文になっていない最新の研究も多く含まれていました。

また、本研究と似たような切り口から研究を行っている人や、本研究にも関わる1つの因子について深く研究を行っている人たちと出会い、情報交換を行うことができたことは大きな成果だと考えています。これまでに読んだことのある論文の著者と実際に討論できたこと、珍しい手法で実験を行っている人に方法を教えてもらったこと、この分野で著名な研究者の名前を覚えてもらったことなど、今後の研究においてとても役立つ情報を得ることができました。研究打ち合わせを予定していたTed M. Dawson教授や研究室の学生からは現在の研究の方針や、今後焦点を当てたいと考えている因子について多くの情報を得ることができました。

最後に、多くの外国人研究者と交流できたこと、英語学習の必要性を強く意識させられたことも今回の成果の一つです。これまで、外国人研究者に対して身構えてしまっていたのですが、ほとんどのの方が私の拙い英語での質問を聞き取ってくれ、とても親切に解説してくれました。また、多くの方が気さくに話しかけてくれ、楽しく交流することができましたが、聞き取れない部分が多くあったり、言いたいことが言えなかったり、もどかしい経験を多くしたことで、英語能力を上達させたいという気持ちが強くなりました。

以上の事はどれも国内の学会では経験できない、この学会ならではの経験だと考えています。今回の学会参加は研究者を志望している私にとって刺激的であり、とても貴重な経験となりました。



石井 圭 医歯薬保健学研究科 博士課程後期2年 保健学専攻 生理機能情報科学研究室

コース名：海外学会発表・海外研究室訪問コース

訪問した国：アメリカ合衆国

期間：平成24年10月1日～平成24年10月16日

研究機関名等：テキサス大学、ウェストミンスターホテル（国際学会会場）

受入研究者等：准教授 Dr. Scott A. Smith

1 初期の目的の遂行状況

私は中枢神経系による運動時の循環調節機構の解明をテーマとして研究を行なっています。現在は博士課程後期に在籍しており、将来は研究者として働くことを考えています。そこで、『研究能力のステップアップ』、『自身の研究の国際的な位置づけ』および『自身の研究テーマの追求』を図ろうと考え、若手研究者等海外派遣プログラムにより、海外の研究室訪問および国際学会にて発表を行わせていただきました。

University of Texas Southwestern Medical Centerに所属しているDr. Scott A. Smithの研究室に訪問した際には、研究設備および病態動物を用いた実験の見学と、論文抄読会に参加することで、世界的なレベルの実験技術や研究設備を「見て」「感じて」、研究者としての客観的な視点でのデータの捉え方や研究についてのディスカッションを実際に「経験」することができました。また、「2012 APS Intersociety Meeting: Integrative Biology of Exercise」という国際学会に参加し、「Central command contributes to increasing blood flow to non-contracting muscle during motor imagery and voluntary one-legged exercise」という演題でポスター発表を行いました。生理学分野の第一線で活躍している研究者らの最新の知見や世界的な研究の流れを知ることができただけでなく、発表内容に関する議論を行なったことは、自身の研究テーマの発展に繋がりました。

2 得られた成果

今回の海外短期派遣を通して、実験・研究設備の見学時や研究に関するディスカッション時など多くの質問機会を頂きました。クリティカルシンキング（批判的思考法）から建設的な質問することの難しさを改めて実感しましたが、海外の研究者は建設的な質問から議論を進展させることが上手く大変勉強になりました。このような経験は必ず自身の研究能力のステップアップに繋がると感じています。国際学会では、世界的な研究の流れや最新の研究結果を得たことで、自分の研究の国際的な位置づけを客観的に認識することができ、自身の研究と他の研究を比較し考察することで自身の研究テーマについての考えを深化させることができました。また、研究に関するディスカッションだけでなく日々の生活にて実際に英語を使うという経験は、貴重な語学勉強となりました。このような自身の成長に関するだけでなく、海外渡航を通してお会いできた研究者の方々との繋がりも貴重な成果であると思います。今回の渡航を通して得られたものは、将来研究者を志す私にとって一生の財産であり、今後の成長の糧となるものと信じています。





前田 菊代 歯学部歯学科5年

コース名：学部生海外研究派遣コース
 訪問した国：カンボジア
 期間：平成25年2月14日～平成25年2月22日
 研究機関名等：ササースダム中核小学校、ワット・ボー小学校

1 初期の目的の遂行状況

初期の目的どおり、カンボジア・シェムリアップ州でのフィールドワークを実施し、大学スタッフおよび現地カンボジアスタッフとの連携業務を行いました。
滞在2日間：農村部のササースダム中核小学校での口腔内診査と治療を行いました。特にブース設置の補助、口腔内診査での記録係り・セメント充填・抜歯のアシスタント、子供たちの誘導を行い、農村部における子供たちの口腔内状況や生活環境を把握しました。
滞在中1日間：現地のマーケットやアンコールワット遺跡などの視察。カンボジアの歴史的背景・宗教観・生活を知ることで、現地の生活に密着した歯科医療を考察しました。
滞在中3日間：都市部のワット・ボー小学校での口腔内診査と教職員の口腔衛生指導を行いました。特に、口腔内診査での記録係り・子供たちの誘導・衛生指導の補助を行う。全校生徒5000人規模のため、ランダムに選ばれたおよそ500人の生徒の口腔内診査とCAT（唾液検査）、紙芝居などによる教職員の口腔衛生指導の模擬授業を重点的に行いました。
滞在中1日間：アンコール小児病院訪問・現地開業歯科医院訪問。アンコール小児病院では、カンボジアでの医療の現実・文化・慣習に関してのビデオ学習、及び現地日本人スタッフによる質疑応答を行いました。子どもたちの権利を守るため院内の視察は禁止されていました。開業歯科医院の訪問では、3カ月前に開業したばかりでユニット1台、矯正治療を主に行っている華僑系カンボジア人による医院を視察しました。

その他：口腔内検査の健診結果記入作業。

ワット・ボー小学校での健診結果を、子どもたちにわかりやすい形式に記入し直す作業を行いました。う歯は歯の絵に赤色で示し、プラークの状況、口腔状態の総合評価をスコア化して記しました。

2 得られた成果

渡航前に提出済の渡航意義に照らしあわせ、以下のとおり報告します。

① 歴史的背景によって歯科医師が減少したカンボジアでの歯科医療の現状。

1970年代、ポル・ポト政権による国民大虐殺により歯科医師の数は激減しました。現在、プノンペンやシェムリアップなどの都市部での歯科医師数は増加し一部エリアによっては歯科医院が密集しています。一方、農村部での医療従事者の数は足るにほどこない状況です。健康保険制度はありません。薬の処方では法で規制されておらず、一般の商店などで言い値で売られています。体に異変を感じてもすぐに病院に行かず、折衝師によるコイン療法などを行うことが慣習となっています。また貧困のため、病院に行く交通費すら払えない家庭や孤児が多いのが現状です。

② カンボジアの子供たちの口腔衛生状況。

全体的にう蝕罹患率が高いですが、農村部と都市部では傾向に大きな違いがみられました。農村部では乳歯のう蝕が多く、比較して永久歯のう蝕は少ない印象を受けました。一方、都市部では永久歯のう蝕罹患率も高く、小学中学年で永久歯前歯部C4の子どもや、プラークスコアの高い子どもが多く見受けられました。これは、都市部でやや上向き傾向にある食生活が大きく影響していると考えられます。しかし、歯ブラシなどの習慣はまだ浸透していません。乳歯う蝕の影響による形成不全や、栄養不足の子どもも見られました。健診結果の分析・追跡調査の必要性を感じました。

③ 日本とは異なる公衆衛生環境下での歯科医療活動。

農村部では井戸水が、都市部では水道水が生活水として使用されています。フィールドワークでの検診や治療で使用した器具は、次亜塩素酸ナトリウムと生活水による滅菌のち、最後にミネラルウォーターを利用してすすぎを行いました。術者の手指はアルコールで消毒し、マスクやグローブで感染防御を行いました。抜歯は現地カンボジア人歯科医師により行われました。注射針はディスポーザブルを使用しました。ヘーベル・カンシなどの器具はアルコール綿と次亜塩素酸ナトリウムにて消毒・滅菌しました。抜歯時、イソジンを準備していましたが、現地では患部を消毒することなく麻酔注射を行っていました。風俗産業の影響で、HIV（ヒト免疫不全ウイルス）患者が多いため、細心の注意を払って医療行為を行いました。

④ 現地に望まれる歯科医療と、個人として団体としてできる活動について。

⑤ 持続可能な活動支援、つまり現地のスタッフによる現地での医療活動への支援について。（④・⑤をまとめて記載）

【「下向きよりソフト面の支援を」これはワット・ボー小学校で長年教育に携わっている日本人スタッフの言葉です。

農業・縫製業・建築業・観光業を主要産業とするカンボジアは、近年GDP（国内総生産）が上昇し、大きな経済成長を遂げています。しかし実情は富裕層と貧困層との格差が拡大し、インフラ・教育・医療面での政府のサポートは追いついていません。例えば、国から小学校への資金援助は微々たるもので、実際の年間運営費は各学校で賄わなければなりません。給食や健康診断ではなく、当然児童の栄養管理のための教職員への指導も行われていません。シェムリアップ都市部での必要生活費は1ヶ月平均\$300であるのに対し、教職員の給与は\$50程度です。そのため教職員は副業をするのが一般的で、授業時間以外には不在で、教職員の勉強会や生徒のケアを行う時間がありません。学校内には、お菓子の売られている売店が併設されており、休み時間に好きなものを飲食する習慣があります。店員の生活があるため、簡単に売店を廃止することはできないようです。

これらの現状を踏まえ、歯科医療に関して中長期的な支援活動の必要性を強く感じました。具体的には、口腔内ヘルスケアの患者教育、患者の歯科記録の管理とフィードバック、教育従事者のデンタルIQ（歯の病気を予防に対する理解度）の底上げなどを、現地歯科医師、各種教育機関、政府との連携により継続的に行うことが求められていると考えます。



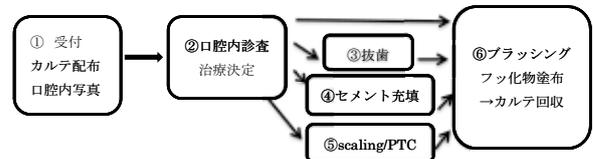
新井 朋子 歯学部歯学科5年

コース名：学部生海外研究派遣コース
 訪問した国：カンボジア
 期間：平成25年2月14日～平成25年2月22日
 研究機関名等：ササースダム小学校、ワット・ボー小学校

1. 初期の目的の遂行状況

2月16・19日 ササースダム小学校にて、口腔内診査と治療、口腔衛生指導を行いました。以下が全体の流れです。

教室の裏地に、机・椅子を持ち出して配置しました。抜歯ブースは室内に設けました。治療に時間



がかかるため、①・②の段階で時間調整を行いました。私を含む歯科学学生は、口腔内診査、抜歯、セメント充填のアシスタントを行いました。

2月19・20日 ワット・ボー小学校にて、児童の口腔内診査・口腔衛生指導を行いました。全体の流れは、ササースダム小学校の時とほぼ同じで、治療ブースがなく、口腔内診査を行う先生が多いパターンでした。私を含む歯科学学生は、口腔内診査のアシスタントを行いました。

2月21日 ワット・ボー小学校にて、教員に対する口腔衛生指導の模擬授業、児童の口腔内診査結果を返却しました。

2. 得られた結果

今回、カンボジアの歯科支援活動に参加してきて、通常の学生生活では学べないような事をいろいろ経験することができました。特に印象深かったことは、小学生の日本の食文化との違いです。日本の小学校では売店でお菓子を販売していないし、学校でお菓子やジュースなどを飲食することは禁止されています。しかし、カンボジアでは、貧しい農村の地域でも、都市部の小学校でも、学校に隣接してお菓子売り場が存在し、常に何かを食べることが出来る環境です。このような環境では、児童の口腔内に齲蝕ができやすく、日本の児童よりも齲蝕の度合いが悪いのも当然と考えられます。日本ではなかなか見られない、ランパントカリエス（汎発性う蝕）や、癒合菌などの症例を近くで見ることができました。また、シェムリアップ内にあるアンコール小児病院を訪ね、カンボジアに在住してボランティア活動を行われている日本人の方のお話を伺うことができ、貴重な体験をしました。まだカンボジアでは、病院に行く費用がなかったり、近くに病院がない人々が多く、そのために救えるはずの命も失ってしまうというお話を聞き、今自分たちに何が出来るのかを考えました。私たちは、物資の支援を行って満足するのではなく、それらが有効に活用されているのかなど、先を見据えた支援を行っていかなくてはならないと感じました。



岡田 千明 歯学部口腔健康科学科4年

コース名：学部生海外研究派遣コース

訪問した国：カンボジア

期間：平成25年2月14日～平成25年2月22日

研究機関名等：ササースダム小学校、ワット・ポー小学校

1 初期の目的の遂行状況

カンボジアでの歯科支援活動を主目的としました。ササースダム小学校（カンボジアシェムリアップ州ブク郡、活動日2/16、2/18）とワット・ポー小学校（シェムリアップ市内、活動日2/19～2/21）にて活動を行いました。ササースダム小学校では、学内の児童を対象とした口腔内診査・治療・口腔衛生指導、ワット・ポー小学校では、児童を対象とした口腔内診査・口腔衛生指導に加え、教員に対する口腔衛生指導の模擬授業を行いました。治療においては、抜歯・セメント充填・

PTC（Professional Tooth Cleaning）・スケーリング（Tooth scaling）・TBI（Teeth Blushing Instruction）・NaF塗布、口腔衛生指導においては、紙芝居による授業や歯垢染色後ブラッシング指導などを実施しました。

また、シェムリアップ市内のアンコール小児病院を訪問し、現地での医療体制・医療状況についてのビデオ鑑賞や病院スタッフの講義を聴講しました。

2 得られた成果

ササースダム小学校では主にPTC、口腔衛生指導、児童の誘導を行いました。PTCを行い口腔内の状態を観察すると、齲蝕が進行していたり、処置されていない歯が多かったりと、口腔内の状態が良好でない児童がほとんどでした。ササースダム小学校はカンボジアでは標準的なレベルの小学校なので、カンボジアの小児の多くは口腔内状態が良いとは言えない状態にあることが分かりました。また、口腔衛生指導では、紙芝居や模型によるブラッシングのデモ・指導を行いました。紙芝居は乳歯から永久歯への生え代わりをテーマにした内容で、萌出中の歯のブラッシング方法や齲蝕乳歯の代生歯に対する影響についての学習を行い、児童たちの口腔衛生に対する意識を高めるよう促し、ブラッシング指導では、ブラッシングの難しい位置や歯ブラシの持ち方を一対一で実際に教えることができました。ワット・ポー小学校では、口腔内写真のアシスタントや唾液潜血反応検査（サリバスター）、NaF塗布を行いました。ワット・ポー小学校は寄付金を募り、児童への学習道具配布や教員の指導を行いカンボジア国内では比較的発展している小学校です。しかし、唾液潜血反応検査では陰性反応を示す児童はほとんどおらず大半の児童が陽性反応を示し、半数程度が永久歯にも齲蝕レベルC2以上という診断結果で、口腔内が健康な状態の児童はほとんどいませんでした。

また、アンコール小児病院では、カンボジアの医療制度やHIVウイルス感染、具体的な症例について病院スタッフからの講義を受け、カンボジアの医療について学ぶことができました。

この活動を通して、カンボジアの小児を中心とする歯科医療の現状を知り、歯科治療・予防の必要性を感じ、貴重な経験となりました。最後に、今回カンボジア歯科支援活動においてお世話になりました先生方に深く感謝いたします。



梅本 知佳 歯学部口腔健康科学科4年

コース名：学部生海外研究派遣コース

訪問した国：カンボジア

期間：平成25年2月14日～平成25年2月22日

研究機関名等：ササースダム小学校、ワット・ポー小学校

1 初期の目的の遂行状況

カンボジアにおける歯科医療支援を目的とし、街から離れた村にある小学校と、街中にある小学校の2つの小学校で活動を行いました。

ササースダム小学校（シェムリアップ州ブク郡）では、口腔診査と治療のアシスタント、学級単位の口腔衛生指導を行いました。ワット・ポー小学校（シェムリアップ市内）では口腔衛生指導、児童の口腔内診査と教員に対する口腔衛生指導の模擬授業のアシスタント、児童の口腔内診査結果の返却を行いました。

また、シェムリアップ市内のアンコール小児病院を見学し、その病院に勤務している日本人医師の方のお話を聞かせていただきました。

さらに、活動を通して、サポートに来てくれているカンボジア国立健康保健大学の学生・歯科医師、有志カンボジアスタッフとの交流を図りました。

2 得られた成果

口腔衛生指導においては、ササースダム小学校では1年生と5年生を対象に行いました。1年生では基本的な歯の磨く順序、歯ブラシの持ち方の指導、歯を磨くことの意義などを制作した模型を使ってわかりやすく説明しました。5年生では前年行った内容の復習と、乳歯と永久歯の生え変わりについての紙芝居を行い、生え変わり時におけるブラッシングの重要性を説明しました。また、両学年で、歯垢染色をし、ブラッシング指導を行いました。1年生ではほとんどの児童で口腔内全体が染色液で染まりましたが、5年生では染色面積が少ない児童が1年生より多く見られました。ワット・ポー小学校では顎模型と歯ブラシを用いブラッシング指導を行いました。

また、アシスタントとしては、ササースダム小学校では児童の各ブースへの誘導、PTC（Professional Tooth Cleaning）、フッ素塗布、ワット・ポー小学校では児童の各ブースへの誘導、フッ素塗布、唾液検査（シーエーティー21パフ、サリバスター）を行いました。PTCでは実際に児童の口腔内をみることができました。ブラッシングがうまく行っていない児童が多く、歯垢がたくさん残っており、また、歯肉が腫れて状態が悪い児童が大半を占めていました。フッ素塗布ではフッ素を塗布し、さらに、画像を見せメール語での説明を音声で流すことによってフッ素塗布後の食事制限などの説明をわかりやすくしました。唾液検査では主にサリバスターを行いました。-の児童はほとんどおらず、+または++がほとんどでした。

活動を通してカンボジアの現在の状況を過去の背景から知ることができました。実際に目で見て実感することで、今自分ができることは何なのかなど考えさせられることが多くありました。今回の活動で見たこと・感じたことを多くの人に伝えていきたいと思っています。



細井 徹 医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 薬学分野 治療薬効学 講師

コース名：若手研究者派遣コース
 研究を行った国：英国
 期間：平成24年3月21日～平成25年2月28日
 研究機関名：ケンブリッジ大学
 受入研究者等：教授 David Ron

1 初期の目的の遂行状況

生体は、ストレスの下に置かれると適応反応を引き起こし、ストレスに応じた対抗処置機構を作動させます。小胞体ストレスとは、「小胞体内に折り畳み不完全なタンパク質が蓄積した状態」のことを言い、最終的には生体にとって不都合な状態に陥ります。一方で生体はこのような危機的状況に対抗するべく、様々な応答機構を作動させることも

わかってきています。近年、この「小胞体ストレス」が、糖尿病などの代謝性疾患の発症に関わっていることが示唆されてきており、注目されつつあります。そこで今回、小胞体ストレスと代謝性疾患発症機構を明らかにする目的で、ケンブリッジ大学Institute of Metabolic Science (IMS) のDavid Ron研究室で研究を行いました。David Ron教授は、小胞体関連遺伝子を同定、解析し、糖尿病の原因の一端として小胞体ストレスの関与を明らかにされた先生です。当研究室では主に、小胞体ストレスの分子メカニズムを解明することにより病態の原因解明を手掛けており、私も関連テーマで研究を行いました。

2 得られた成果

糖尿病の発症機構として、膵臓のβ細胞からのインスリン分泌能に問題が起こることが原因の一つと考えられております。すなわち、β細胞からの過剰なインスリン分泌が起きる結果、小胞体ストレスが惹起され、細胞死が誘発され糖尿病の発症に至るとの可能性が示唆されております。本研究では、糖尿病モデルマウスを用いてその制御機構の解明を試みました。その結果、膵臓β細胞の機能およびインスリン感受性に関する興味深い結果が得られ、さらに本研究成果を派遣期間中にまとめ、学会にて発表するに至りました。

私の所属した研究所は、実に多くの国から研究者が集まっており、国際色豊かな研究所でした。もしかしたら、このような環境が、独創的な研究やアイデアを生む所かもしれません。研究室のセミナーも充実しており、とことん議論を重ね、様々な視点からじっくり緻密に研究を展開していく姿勢が印象的でした。研究の進め方、考え方について、学ぶことが多く、視野が広がるように感じ、毎日充実した日々を過ごさせて頂きました。今回のプログラムを通して海外にて研究活動に従事できただけでなく、世界の研究者とディスカッションができ、国際的な視野を得ることができたと感じております。このような貴重な機会を与えてくださった、本プログラムの関係者の皆様ならびにサポートして頂いた方々に心より感謝致しております。



仙谷 和弘 医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 医学分野 分子病理学 助教

コース名：若手研究者派遣コース
 研究を行った国：アメリカ合衆国
 期間：平成24年3月27日～平成25年2月28日
 研究機関名：ミシガン大学
 受入研究者等：教授 Eric R Fearon

1 初期の目的の遂行状況

がん研究における最大の課題の一つは、発生・進展機構の解明とそれを標的とした治療戦略の開発にあります。私は広島大学大学院入学後より、一貫して胃癌や大腸癌など消化管癌の分子病態の解明、新規診断・治療標的分子の探索に取り組んできました。近年大腸癌の発生メカニズムは複数存在することが明らかとなっており、より詳細な発癌機構の解明には、標的遺伝子をノックアウトした際の初期変化の検討が不可欠であると考え、ノックアウトマウスを用いた大腸癌の解析を長年

行っている米国ミシガン州アナーバーのミシガン大学 (Dr. Eric R. Fearon研究室) に1年間留学させていただきました。この研究室では、これまでに腸上皮細胞に特異的に発現し、腸分化の制御に関わる分子であるCDX2のプロモーター領域の下流にエストロゲン類似体であるタモキシフェン (TAM) 存在下で発現調節可能なCre recombinase遺伝子を組み込んだCDX2 P-CreERT2コンディショナルノックアウトマウスモデルを作製し、さらに大腸癌の発生・進展における種々の大腸癌関連遺伝子の意義について明らかにするための免疫組織化学的解析や細胞生物学的機能解析など様々なノウハウも確立されていました。そのため1年間の留学中に非常に多くの知見を効率的に得ることができたと考えています。

2 得られた成果

私が与えられた課題は、マウス大腸上皮細胞で対立遺伝子の両方のApcアレルを不活性化させた際に生じる腫瘍の初期の形態学的・分子生物学的変化です。TAM投与1週間後の大腸腺管ではすでに粘膜上皮の過形成性変化や異形成、budding等が観察され、細胞増殖能の亢進やアポトーシスに陥った細胞数の増加が認められました。それらの腺管ではWnt pathwayの重要な分子であるβカテニンの核内蓄積やSox 9の発現増加も早期から見られ、大腸の幹細胞マーカーとして知られるLgr 5やMsi 1の発現誘導も見られました。またマウス正常大腸では通常パネート細胞は観察されませんが、Apcアレルを不活性化させたマウス大腸では早期からパネート細胞の異所性発現が見られるとともに杯細胞数の減少が見られることから、Apcアレルの不活化は大腸上皮細胞の分化調節に影響を及ぼすことが明らかとなりました。さらに細胞が分裂する際の分裂軸の向きは通常細胞の頂端面あるいは基底面に平行であることがほとんどですが、Apcアレルの片方あるいは両方が不活性化されたマウス大腸では軸方向の変化の割合が高い傾向にありました。以上の結果から、Apcアレルが不活性化された大腸上皮細胞では異所性にパネート細胞に類似した細胞の出現や大腸幹細胞マーカーの発現誘導が見られ、異型腺管の形成に大きく寄与することが明らかとなりました。



- 電磁石を使い軟骨再生治療
広島大大学院研究 文科相の推進事業に (医歯薬保) (中国 10 / 4)
- 病院の実力 広島編57
眼科 弱視や斜視 小児専門も
地元医師と連携を密に
広島大大学院視覚病態学教室 木内 良明教授に聞く (医歯薬保) (読売 10 / 7)
- アイバンク運動 広島で全国大会
12日講演や体験談 (病院) (中国 10 / 10)
- 後発医薬品 選択は慎重に
広島大病院が比較
緑内障用目薬1滴の量にばらつき
穴の大きさや保存剤の濃度に差
実質1割安のケースも (病院) (中国 10 / 10)
- つま先工夫「転倒予防くつ下」
東広島企業など開発 (医歯薬保) (朝日 10 / 21)
- ニュース深新^{しんしん}
「無医地区」全国2位
県が対策本腰
県北に移動診療車 導入
広大と協力 医師養成 (医学部) (読売 10 / 22)
- ひろしま平和マラソン
医療系学生 救護任せて
11ヵ所で給水・AED (自動体外式除細動器) 準備 (医学部) (中国 10 / 30)
- がんの悩み抱えず語って
「相談支援センター」全国的に認知不足
広島大病院 利用拡大へ知恵
患者交流会や勉強会を企画
予防法情報も
参加者に好評 (病院) (中国 10 / 31)
- 膝軟骨の再生医療を実用化
越智 光夫氏 (60)
患者に寄り添い独創性 (医歯薬保) (中国 11 / 3)
- 市民公開講座
知っときんちゃい！大腸がんのこと！
早期発見 まず検診を
予防・治療最前線 専門家が講演
大腸がんに対する最新外科治療－ロボット手術－ 恵木 浩之氏
切除不能・進行再発大腸がんに対するがん薬物療法 檜井 孝夫氏
第2部司会 大段 秀樹氏 (病院) (中国 11 / 3)
- 研修医確保71.0%
中国5県来春の内定3.4ポイント改善
岡山や山口増加 広島3年連続減「囲い込み」明暗 (病院) (中国 11 / 3)
- 文化や学術 多大な功績
中国文化賞7人表彰 (医歯薬保) (中国 11 / 7)
- 専門医が診る
広島大病院口腔インプラント診療科 久保隆靖 診療准教授
インプラント治療 リスク回避へCT検査を (病院) (中国 11 / 7)



- けがなく元気に農作業
世羅町・広島大大学院 18日から講座
運動や体力維持 農事組合法人を指導 (医歯薬保) (中国 11 / 7)
- ひとネット
広島 研究通じた社会貢献に手応え
広島大大学院医歯薬保健学研究科の二川 (にかわ) 浩樹教授 (医歯薬保) (中国 11 / 8)
- 軟らか～なEV発売
車体はエアバック
広島大発ベンチャー 月産100台目標 (医歯薬保) (中国 11 / 16)
- ふんわりEV 79万円
エアとスポンジ衝撃吸収 広大本ベンチャー発売 (医歯薬保) (読売 11 / 16)
- 広島大病院も実施
200例目脳死移植 (病院) (中国 11 / 16)
- 「ふるさと枠」増員へ
広島大医学科 (医学部) (中国 11 / 17)
- 車体の外装にエアバック
広島大発VBが電気自動車
高齢者向け、衝撃を吸収 (医歯薬保) (日本経済 11 / 19)
- 新型出生前診断
広島大病院が導入へ
年明けにも 倫理委承認など条件 (病院) (中国 11 / 20)
- 高齢化社会向けに
車ごとエアバッグで覆い
広島大研究者 ベンチャー企業で販売 (医歯薬保) (毎日 11 / 21)
- ダウン症99%わかる出生前診断
広大病院臨床研究へ (病院) (朝日 11 / 21)
- 脳腫瘍の兆候知って
南区で市民公開講座 (病院) (中国 11 / 26)
- 脳死肝移植 手術を開始
広島大病院 (病院) (中国 11 / 27)
- 専門医が診る 読者からの質問編
回答 広島大病院口腔インプラント診療科 久保隆靖 診療准教授
インプラント治療 糖尿病予備軍でも可能か
高リスク 主治医と相談必要
骨の移植詳細は
下顎から切り取って利用
メンテナンス 頻度と方法は
年数回 歯茎や骨点検
広告やネット 信頼性に不安
細かく説明受け理解を (病院) (中国 11 / 28)
- ここが聞きたい
磁石使い軟骨・骨を再生
メスを入れずに負担軽く 越智 光夫さん (医歯薬保) (日本経済 11 / 28)
- 広島大病院の(臓器移植)手術終了 (病院) (中国 12 / 4)



- ふろさと枠定員3人増
広島大医学部（医学部）（中国 12 / 12）
- ドクターヘリ来年7月始動**
広島県方針（病院）（中国 12 / 26）
- ドクターヘリ 運航へ
広大病院、来夏にも（病院）（朝日 12 / 27）
- ウイルス感染症猛威 予防の心得
マスク顔にフィット 表面に触れない / 1日1枚が目安
免疫力高める生活を ビタミンD摂取「大笑い」も効果
広島大大学院の坂口教授に聞く（医歯薬保）（中国 12 / 28）
- 病院の実力 広島編⑥
皮膚の病気
日々の手入れ大切
広島大病院皮膚科 秀 道広教授に聞く（病院）（読売 1 / 6）
- ものづくりの現場から②
第1部 連携
車部品メーカー 一から試行 4年がかり
発想を結集 斬新EV（医歯薬保）（中国 1 / 9）
- 専門医が診る
広島大病院腎臓内科 正木崇生 教授
慢性腎臓病 透析直前まで自覚症状なく（病院）（中国 1 / 9）
- 福島で新人医師研修へ
広島大病院 災害医療学ぶ（病院）（中国 1 / 10）
- 教えてドクター 子どもの病気とケア⑧
歯並び悪い3歳の娘 永久歯どうなる
広島大学大学院香西克之教授（小児歯科学）が答えます。
生え替わり時期に診断（医歯薬保）（中国 1 / 15）
- 広島大に肝炎予防拠点
検査普及策やがん研究（医歯薬保）（中国 1 / 22）
- 広大放医研の新所長
稲葉俊哉教授（54）（血液学・分子生物学・放射線生物学）
任期は4月1日から2年間（原医研）（読売 1 / 22）
- 爆心近くで被爆 がんリスク
残留放射線も影響 広島大（原医研）（朝日 1 / 24）
- ドクターヘリ相互運航
中国5県と4病院協定
3月にも運用（病院）（朝日 1 / 24）
- ドクターヘリ中国5県協定
相互に乗り入れ（病院）（中国 1 / 24）
- 茶山氏を再選
広島大病院長（病院）（中国 1 / 24）
- 専門医が診る **読者からの質問編**
回答 広島大病院腎臓内科 正木崇生教授
慢性腎臓病 尿潜血反応 血圧も少し高め
定期的に尿タンパク量検査



塩分控え経過観察 大丈夫？
 専門医や栄養士の指導を
 自宅で透析 全身にかゆみ
 ステロイド使用 慎重に
 冬虫夏草購入 効果は
 漢方薬併用 避けるべき (病院)

(中国 1 / 30)

外来と中央診療機能集約
 広島大病院 新診療棟の内部公開 (病院)

(毎日 1 / 31)

小児がん拠点に広島大病院など
 全国15か所選定 (病院)

(朝日 2 / 1)

小児がん拠点15病院
 厚労省検討会 治療実績など評価 (病院)

(日本経済 2 / 1)

広島大病院が小児がん拠点
 15病院選定 (病院)

(中国 2 / 1)

「小児がん中四国ネット」設立へ
 広大病院、年度内にも 「どの地域でも同じケアを」 (病院)

(毎日 2 / 6)

広大病院 小児がん拠点に
 「トータルケアへ中四国で仕組み」 (病院)

(朝日 2 / 6)

「黒い雨」改めて議論
 17日・広島 放影研見解に焦点 (原医研)

(朝日 2 / 6)

廿日市で国際シンポ
 放射線 身体への影響は (原医研)

(朝日 2 / 6)

原爆影響 ロシアと研究
 広島の実験者「原発事故解明も」 (原医研)

(毎日 2 / 6)

小児がん 広大病院 中四国拠点に
 院長会見「責任果たす」 (病院)

(読売 2 / 10)

柿洪に「万能パワー」
 手足口病など対ウイルス効果 消毒剤に応用も
 広島大大学院教授確認 (医歯薬保)

(中国 2 / 15)

乳がんの話じっくり
 広島医師ら「サロン」開設1年半 (病院)

(朝日 2 / 16)

ノロもイチコロ シブいやつ
 「柿洪」ウイルス無力化 (医歯薬保)

(朝日 2 / 16)

「黒い雨」影響 議論深める
 きょう 放影研や市民らシンポ (原医研)

(読売 2 / 17)

「黒い雨」詳細な解析を
 放影研討論で研究者要望 (原医研)

(中国 2 / 17)

広島1人感染死 対策は
 長袖着て肌の露出防ぐ
 入浴でマダニ洗い流す
 付着時は皮膚科に (病院)

(中国 2 / 20)

ドクターヘリ 受け入れ先18病院
 広島県 確保の見通し (病院)

(中国 2 / 27)

- 福島研修プログラム
災害医療「多く吸収へ」
広島大病院の2人 出発控え意欲 (病院) (中国 3/1)
- 「災害医療の糧に」
広大病院の研修医 澤田さん、豊田さん 南相馬に派遣 (病院) (毎日 3/1)
- 研修医2人 福島・南相馬へ
広島大病院 内部被曝検査や健康相談担当へ (病院) (朝日 3/2)
- がん検診の大切さ訴え
中区でフォーラム (病院) (朝日 3/2)
- 2研修医 福島に学ぶ
広島大病院派遣 災害医療を実習 (病院) (中国 3/5)
- 福島大に環境放射能研
13年度 広島大など共同運営 (原医研) (中国 3/7)
- フクシマとヒロシマ 2年<5>
知の貢献 被爆地の蓄積で人材育成 (病院) (中国 3/8)
- 防ごう心筋梗塞・脳卒中
西区でフォーラム (医歯薬保) (中国 3/10)
- 福島被曝医療55人の手記集
広島大2500部配布へ (病院・原医研) (読売 3/12)
- ドクターヘリ5月から
広島県 運用2ヵ月前倒し (病院) (中国 3/14)
- 「培養軟骨」に保険適用
広島大大学院教授が考案 来月から (医歯薬保) (中国 3/15)
- いきいき中国
週間 お年寄り 医療・介護編
骨折 転ばぬ先の杖
骨密度低く 寝たきり原因に
関節柔らかく 筋力つけて (医歯薬保) (朝日 3/16)
- 東日本大震災 2年
支える・つながる④
広大病院助教貞森拓磨さん (41) 新トリアージタグ
医療情報を即時共有 (病院) (毎日 3/17)
- 個人情報入りUSBを紛失
広島大病院 (病院) (中国 3/23)
- 広大病院の男性医患者265人情報紛失 (病院) (毎日 3/23)
- 「原発事故 長引く影響」
広島大病院 福島派遣の2人報告 (病院) (中国 3/26)
- カンボジアでの歯科検診活動報告
広島歯学部 (歯学部) (毎日 3/27)
- 脳死肝移植手術始まる
広島大病院 (病院) (中国 3/30)

開催日	件名	開催場所	内容	事務局
平成24年 10月6日(土)	広島麻酔エキスパートセミナー	広島大学病院	「抄録の書き方」 講師：河本 昌志 先生 (広島大学大学院 教授) 「麻酔薬シミュレーターは敵か味方か？」 講師：讃岐 美智義 先生 (広島大学病院 講師) ハンズオンセミナー 胃エコー、超音波ガイド末梢神経ブロック	医歯薬保健学研究院 麻酔蘇生学
平成24年 10月18日(木)	第10回広島リハビリテーション研究会	広仁会館	第10回広島リハビリテーション研究会 講演1 「脳卒中二次予防の考え方」 難波 孝礼 先生 (広島市総合リハビリテーションセンターリハ科 部長) 講演2 「脳卒中片麻痺患者の歩行を戦略的に考える」 近藤 国嗣 先生 (東京湾岸リハビリテーション病院 院長)	広島大学病院 リハビリテーション科 木村 浩彰
平成24年 10月18日(木)	第121回原医研セミナー	総合研究棟7階 701セミナー室	「Perrault症候群の新規原因遺伝子」 講師：森野 豊之 先生 (広島大学原爆放射線医学研究所) 「HER2 標的療法の現状と効果予測法の開発」 講師：重松 英朗 先生 (広島大学病院)	原爆放射線医学研究所 事務室
平成24年 10月20日(土)	第15回「中皮腫パネル」	病院 大会議室	中皮腫関連疾患9例の臨床病理学的検討と症例解説	医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 病理学 教授 武島 幸男
平成24年 10月26日(金) ～27日(土)	第41回断層映像研究会	広仁会館	第41回断層映像研究会 教育講演14題 イブニングセミナー 「腫瘍PET/CTの将来展望」 座長：金澤 右 先生 (岡山大学放射線診断学) 演者：中本 裕士 先生 (京都大学放射線医学講座) ランチョンセミナー 「造影剤腎症－画像診断医に必要なminimal essential」 座長：粟井 和夫 先生 (広島大学放射線診断学) 演者：柔鶴 良平 先生 (順天堂大学放射線医学講座)	医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 放射線診断学 教授 粟井 和夫
平成24年 10月27日(土) ～28日(日)	第64回日本皮膚科学会西部支部学術大会	広島国際会議場	第64回日本皮膚科学会西部支部学術大会 テーマ「医学における皮膚科学の役割」 一般演題150題 招請講演：2題 1. 「Understanding skin disease through the perspective of innate immunity」 Richard L. Gallo 先生 (University of California, San Diego, USA) 2. 「Recent advances in the understanding and treatment of psoriasis」 Christopher E. M. Griffiths 先生 (University of Manchester, Manchester, UK) 特別講演 「生命の境界で何が起きているか？皮膚科学からの挑戦」 天谷 雅行 先生 (慶應義塾大学) 学術文化講演 「生命を捉えなおす－動的平衡の視点から」 福岡 伸一 先生 (株式会社トド・プレス、青山学院大学総合文化政策学部) 教育講演：5題 1. 熱傷の全身管理と局所管理 1-1. 重症熱傷における全身管理 岩崎 泰昌 先生 (広島大学) 1-2. 熱傷の局所管理について 野田 英貴 先生 (広島市立安佐市民病院) 河合 幹雄 先生 (広島大学)	医歯薬保健学研究院 皮膚科学

			<p>2. 皮膚科医が診る血管炎の見方 川上 民裕 先生 (聖マリアンナ医大)</p> <p>3. 臨床疫学研究のための基礎知識 田中 純子 先生 (広島大学疫学・疾病制御学)</p> <p>4. 皮膚科医による学校保健活動の重要性ー今、皮膚科医が取り組むべき課題ー 大川 司 先生 (前橋市、日本臨床皮膚科医会学校保健委員会)</p> <p>5. アレルギー性蕁麻疹の最新の話 森田 栄伸 先生 (鳥根大学)</p> <p>市民公開講座 「よくある皮膚病とその対処法：虫さされとかぶれ、アレルギー」</p> <p>1. 「身近な虫による皮膚病」 夏秋 優 先生 (兵庫医科大学)</p> <p>2. 「意外と多いかぶれとアレルギー」 矢上 晶子 先生 (藤田保健衛生大学)</p> <p>松永 佳世子 先生 (藤田保健衛生大学)</p>	
平成24年 10月30日(火)	第21回広島循環器フォーラム21	ホテルグランヴィア広島	<p>特別講演1 「診療指標としての血管機能検査の有用性と限界」 講師：富山 博史 先生 (東京医科大学 内科学第二講座 教授)</p> <p>特別講演2 「動脈硬化診療に血管エコーを活かす」 講師：松尾 汎 先生 (医療法人松尾クリニック 理事長 藤田保健衛生大学 客員教授)</p>	<p>主催：広島循環器フォーラム21 バイエル薬品株式会社</p> <p>医歯薬保健学研究院 循環器内科学 教授 木原 康樹</p>
平成24年 11月8日(木) ～9日(金)	第24回日本脳循環代謝学会総会	リーガロイヤルホテル広島	<p>第24回日本脳循環代謝学会総会 テーマ「feel the innovation～広島からのメッセージ～」 会長講演 「脳循環代謝研究の醍醐味：夢、現実、そして未来へ！」 松本 昌泰 先生 (広島大学大学院脳神経内科学)</p> <p>招請講演 I 「Translational Stroke Research-Personal Perspective and Experience」 Marc Fisher 先生 (University of Massachusetts Medical School)</p> <p>招請講演 II 「Neuromechanical coupling: A New mechanism for brain activation?」 Denis Le Bihan 先生 (Neurospin, CEA Saclay Center, France)</p> <p>教育講演 「概日リズムと医学研究」 内匠 透 先生 (広島大学大学院医歯薬保健学研究院)</p> <p>シンポジウム 1 「内在性神経細胞保護機構を活用した虚血脳保護戦略」</p> <p>シンポジウム 2 「脳梗塞後の修復メカニズムと細胞治療 (Post-Stroke Repairing Mechanism and Cell Therapy)」</p> <p>シンポジウム 3 「血液脳関門」</p> <p>ランチョンセミナー 1 「The Crystal Brain: Pushing the limits of MRI」 Denis Le Bihan 先生 (Neurospin, CEA Saclay Center, France)</p> <p>ランチョンセミナー 2 「脳虚血に対する外科治療ー現状と展望ー」 寶金 清博 先生 (北海道大学大学院医学系研究科神経病態学講座脳神経外科学)</p> <p>ランチョンセミナー 3 「頸動脈閉塞性疾患における脳血流SPECTーDual Table ARG法と解析ソフト応用の実際ー」 秋山 恭彦 先生 (鳥根大学医学部脳神経外科学講座)</p>	<p>医歯薬保健学研究院脳神経内科学 教授 松本 昌泰</p>



			<p>ランチョンセミナー4 「Penumbral Imaging Selection of Acute Stroke Patients for Therapy」 Marc Fisher 先生 (University of Massachusetts Medical School)</p> <p>ランチョンセミナー5 「患者さんにも説明できる血栓形成機序と抗凝固療法」 家子 正裕 先生 (北海道医療大学歯学部内科学講座)</p> <p>プレイングセミナー 「iPS細胞技術と直接誘導法を用いた神経系の再生・疾患研究」 岡野 栄之 先生 (慶應義塾大学医学部生理学教室)</p> <p>イブニングセミナー 「膜貫通タンパク質Linxによる神経回路形成の分子機構」 萬代 研二 先生 (神戸大学大学院医学研究科生化学・分子生物学講座分子細胞生物学分野)</p> <p>「中枢神経系における小胞体ストレス応答の重要性」 堀 修 先生 (金沢大学医薬保健研究域医学系神経分子標的学)</p> <p>スポンサーダイニングセミナー 「日本人にとって最も有用な抗血小板療法を考える」 田中 耕太郎 先生 (富山大学附属病院神経内科)</p> <p>一般演題117</p>	
平成24年 11月9日(金)	第7回 「小胞体ストレス研究会」	医学部 第4講義室	<p>セッションⅠ 「神経系と小胞体ストレス (5演題)」</p> <p>セッションⅡ 「小胞体ストレス応答のシグナル経路 (5演題)」</p> <p>セッションⅢ 「小胞体ストレスと疾患/生体制御 (3演題)」</p> <p>特別公演 「小胞体の機能と制御のダイナミクス」 森 和俊 先生 (京都大学大学院理学研究科)</p> <p>セッションⅣ 学生セッション</p>	医歯薬保健学研究院 分子細胞情報学 教授 今泉 和則
平成24年 11月14日(木)	第11回広島リハビリテーション研究会	広仁会館	<p>第11回広島リハビリテーション研究会 講演1 「誤嚥をしよう」 益田 慎 先生 (県立広島病院小児感覚器科 主任部長)</p> <p>講演2 「咀嚼をみよう」 吉田 光由 先生 (広島市総合リハビリテーションセンター医療科 部長 (歯科))</p>	広島大学病院 リハビリテーション科 木村 浩彰
平成24年 11月15日(木)	第122回原医研セミナー	総合研究棟7階 701セミナー室	「消化器外科における進行食道癌に対する術前化学放射線療法」 講師：浜井 洋一 先生 (広島大学病院)	原爆放射線医学研究所事務室
平成24年 11月16日(金)	第7回新広島循環器治療研究会	ホテルグランヴィア広島	<p>特別講演1 「(プロ) レニン受容体の最新の知見」 講師：千本松 孝明 先生 (埼玉医科大学国際医療センター心臓内科薬理学 准教授)</p> <p>特別講演2 「RASと酸素代謝異常」 講師：南学 正臣 先生 (東京大学医学部附属病院腎臓・内分泌内科学 教授)</p>	主催：新広島循環器治療研究会 協和発酵キリン株式会社 医歯薬保健学研究院 循環器内科学 教授 木原 康樹
平成24年 11月17日(土)	第1回広島循環器ケア・リハビリテーション研究会	広島国際会議場	<p>教育講演 1. 「楽しい心不全チーム医療のすすめ方」 講師：土手 慶五 先生 (広島市立安佐市民病院循環器内科 主任部長)</p> <p>2. 「心臓リハビリテーションの新展開～“だけじゃない”心リハ～」 講師：木阪 智彦 先生 (広島大学大学院循環器内科学)</p> <p>一般演題 テーマ「チーム医療の実際」 4題</p> <p>特別講演 「心不全治療における心臓リハビリテーションの役割」 講師：百村 伸一 先生 (自治医科大学さいたま医療センター 教授)</p>	共催：広島循環器ケア・リハビリテーション研究会、帝人在宅医療株式会社、帝人ファーマ株式会社 後援：広島県医師会、広島県看護協会、広島県理学療法士会

<p>平成24年 11月22日(木) ～23日(金)</p>	<p>第137回日本歯科保存学会2012年度秋季学術大会</p>	<p>広島国際会議場</p>	<p>第137回日本歯科保存学会2012年度秋季学術大会 学会テーマ「健康長寿社会の成立に果たす歯の保存治療の意義！」 特別講演 「The Art and Science of Bone Augmentation」 座長：申 基喆 先生 (明海大学歯学部口腔生物再生医工学講座 座歯周病学分野 教授) 演者：Hom-Lay Wang 先生 (The University of Michigan, School of Dentistry Professor and Director of Graduate Periodontics) 韓国招待講演 「Transient Receptor Potential Ion Channels in Dental Pulp」 座長：松尾 敬志 先生 (徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス 研究部歯科保存学分野 教授) 演者：Sung Kyo Kim 先生 (President (大韓歯科保存学会 (KACD)) Professor (Kyungpook National University))</p>	<p>学術大会事務局 医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門 歯周病態学研究室</p>
<p>平成24年 11月24日(土)</p>	<p>日本内科学会中国支部主催第107回中国地方会</p>	<p>広島国際会議場</p>	<p>日本内科学会中国支部主催 第107回 中国地方会 一般演題212題 専門医部会教育セミナー スキルアップセミナー</p>	<p>医歯薬保健学研究院脳神経 内科学 教授 松本 昌泰</p>
<p>平成24年 11月24日(土) ～25日(日)</p>	<p>第10回「日本予防医学会学術総会」(第10回記念大会)</p>	<p>広仁会館大会議室、中会議室</p>	<p>第10回「日本予防医学会学術総会」(第10回記念大会) メインテーマ「エビデンスに基づいた疾病対策 －健康増進、予防対策、治療戦略－」 大会長 田中 純子 (広島大学大学院医歯薬保健学研究院 疫学・疾病制御学 教授) ・10周年記念講話 「日本予防医学会学術総会開催10回目を迎えて」 原田 康夫 先生 (一般社団法人日本予防医学会 名誉理事長) ・シンポジウム：4題 1)「根拠に基づいたがん対策の進め方」 祖父江 友孝 先生 (大阪大学大学院医学系研究科環境医学 教授) 2)「エビデンスに基づいた行政施策」 佐々木 昌弘 先生 (広島県健康福祉局 局長) 3)「質の高い科学的根拠を目指すために必要な統計学のセンス」 丹後 俊郎 先生 (医学統計学研究センター センター長) 4)「エビデンスに基づいた治療」 大段 秀樹 先生 (広島大学大学院医歯薬保健学研究院消化器・移植外科 教授) ・教育セミナー 「企業における健康管理の実際～特定健診・保健指導を踏まえて」 山根 公則 先生 (NTT西日本中国健康管理センター 所長) ・一般演題：47題 (ポスターセッション) ・ランチョンセミナー 「慢性腎臓病の進行とその予防」 正木 崇生 先生 (広島大学病院腎臓内科 教授) ・市民公開講座 「健康対談：疾病予防と健康維持の秘訣」 衣笠 祥雄 氏 (野球解説、スポーツコンサルタント) 田島 和雄 先生 (愛知県がんセンター研究所 所長)</p>	<p>医歯薬保健学研究院 疫学・疾病制御学</p>

平成24年 11月25日(日)	日本内科学会中国支部主催第47回生涯教育講演会	広島国際会議場	日本内科学会中国支部主催 第47回生涯教育講演会 1. 大腸内視鏡診療の最前線～現状と将来展望～ 田中 信治 先生 (広島大学病院内視鏡診療科) 2. 左室駆出率が保持された心不全(拡張不全) 山本 一博 先生 (鳥取大学病態情報内科) 3. 膠原病・リウマチ性疾患における自己抗体の検査法と意義 三森 経世 先生 (京都大学大学院医学研究科内科学講座臨床免疫学) 4. CKD診療ガイド2012:新しく変わるCKD診療ポイント 今井 圓裕 先生 (中山寺いまいクリニック/日本腎臓学会 CKD診療ガイド2012改訂委員長) 5. 悪性リンパ腫一診断と治療 谷本 光音 先生 (岡山大学大学院血液・腫瘍・呼吸器内科学)	医歯薬保健学研究院脳神経内科学 教授 松本 昌泰
平成24年 12月2日(日)	第35回中国四国リハビリテーション医学研究会 第3回日本リハビリテーション医学会中国・四国地方会	広島大学病院 臨床講義棟、 基礎講義棟	特別講演1 「がん患者に対するリハビリテーション」 岡村 仁 先生 (広島大学大学院医歯薬保健学研究院 教授) 特別講演2 「在宅医療とリハビリテーション～たとえ死に至る病であっても、最期まで人生を肯定する医療～」 岡林 清司 先生 (コールメディカルクリニック広島 院長) ランチョンセミナー 「四肢痙縮のボツリヌス治療の実際」 栢森 良二 先生 (帝京大学医学部リハビリテーション科 教授)	広島大学病院リハビリテーション科 木村 浩彰
平成24年 12月4日(火)	産学官連携を推進するための第5回 日韓中国国際シンポジウム	韓国ソウル市 カトリック医科学 研究院	「乳酸菌による予防医学・未病医学への貢献」	代表世話人: 医歯薬保健学研究院 遺伝子制御科学研究室 教授 杉山 政則
平成24年 12月10日(月)	第123回原医研セミナー	総合研究棟7階 701セミナー室	「Studies of nuclear architecture in space and time: an overview from its beginnings to the current state」 講師: Thomas Cremer 先生 (Biocenter, Ludwig Maximilians University (LMU))	原爆放射線医学研究所事務室
平成24年 12月14日(金)	第124回原医研セミナー	医学部基礎・ 社会医学棟2階 セミナー室2	「メカノセンシング機構の解明と、これを利用した抗老化・抗炎症治療への展開」 講師: 澤田 泰宏 先生 (シンガポール国立大学メカノバイオロジー研究所)	原爆放射線医学研究所事務室
平成24年 12月16日(日)	第9回広島脳卒中市民シンポジウム	広島国際会議場	第9回広島脳卒中市民シンポジウム 第一部講演 特別講演1 「リジリエンスー脳卒中からの再起力」 大槻 俊輔 先生 (近畿大学医学部附属病院脳卒中センター 教授) 特別講演2 「笑ってストレス解消! 脳卒中予防!」 大平 哲也 先生 (大阪大学大学院医学系研究科社会環境医学講座 准教授) 第二部パネルディスカッション 「笑いとリハビリテーション」 豊田 章宏 先生 (中国労災病院リハビリテーション科 部長) 「脳卒中と音楽療法ー神経学的音楽療法を中心にー」 頼島 敬 先生 (よりしま内科外科病院 院長)	医歯薬保健学研究院脳神経内科学 教授 松本 昌泰
平成24年 12月20日(木)	第125回原医研セミナー	総合研究棟7階 701セミナー室	「環境有害物質・薬毒物の感受性に関与する遺伝子群の探索」 講師: 信國 好俊 先生 (広島大学原爆放射線医学研究所) 「骨髄異形成症候群の分子病態と治療」 講師: 原田 浩徳 先生 (広島大学原爆放射線医学研究所)	原爆放射線医学研究所事務室

平成24年 12月21日(金)	第10回広島感染症教育セミナー	広島大学病院 外来棟3階 大会議室	症例検討2例 「感染症診療の基本と注意点」 相野田 祐介 先生 (東京女子医大病院感染症科)	感染症セミナー広島
平成25年 1月5日(土)	PIPCプレセミナー	広仁会館 大会議室	「医者がむかついてはいませんか？」 宮崎 仁 先生 (宮崎医院 院長)	感染症セミナー広島
平成25年 1月6日(日)	PIPCセミナー・ベーシックコース	広仁会館 大会議室	Psychiatry in Primary Care (PIPC) ベーシックコース ファシリテーター 井出 広幸 先生 (信愛クリニック 院長) 宮崎 仁 先生 (宮崎医院 院長) スーパーバイザー 馬場 麻好 先生 (馬場病院心療内科)	感染症セミナー広島
平成25年 1月12日(土)	広島バイタルサインセミナー	広島国際会議場	対象者：コメディカル（看護師、臨床工学技士）、臨床医 プランナー／座長：河本 昌志 先生 (広島大学大学院麻酔蘇生学講座 教授) プログラム 講演 「周術期の輸血を巡る問題点」 稲田 英一 先生(順天堂大学 教授) 「周術期集中治療の看護：最近の問題点」 小松 徹 先生(愛知医科大学 名誉教授) 「周術期モニターの読み方」 佐藤 重仁 先生(浜松医科大学 教授) 「周術期の呼吸と人工呼吸管理」 多田 恵一 先生(広島市民病院救命救急センター)	医歯薬保健学研究院 麻酔蘇生学
平成25年 1月13日(日)	第49回広島義肢装具研究会	広仁会館	第49回広島義肢装具研究会 講演1 「スポーツパフォーマンス向上を目的としたリアライン・インソール」 蒲田 和芳 先生 (広島国際大学 准教授) 講演2 「変形性膝関節症に対する装具療法の有効性について」 出家 正隆先生 (広島大学大学院医歯薬保健学研究院 教授)	広島大学病院リハビリテーション科 木村 浩彰
平成25年 1月17日(木)	第126回原医研セミナー	総合研究棟7階 701セミナー室	「RUNX1変異とBMI1の協調作用による骨髄異形成症候群の発症機序」 講師：原田 結花 先生 (広島大学原爆放射線医科学研究所) 「進行食道癌に対する治療戦略～外科治療・化学療法・放射線治療～」 講師：檜原 淳 先生 (広島大学原爆放射線医科学研究所)	原爆放射線医科学研究所事務室
平成25年 1月20日(日)	第2回広島大学病院感染症セミナー	広仁会館 大会議室	第2回「広島大学病院 感染症セミナー」 テーマ「市中肺炎の診断と治療」	広島大学病院感染症科
平成25年 1月20日(日)	運動器フォーラムin Hiroshima	ホテルグランヴィア広島	「日本脊椎脊髄病学会主導研究DISTO-Project結果報告」 講師：紺野 慎一 先生 (福島県立医科大学医学部整形外科学講座 教授) 「腰部脊柱管狭窄症診療ガイドライン2011のポイント」 講師：佐藤 栄修 先生 (我汝会 えにわ病院整形外科 副院長) 「骨粗鬆症新薬ラッシュの中での治療戦略」 講師：川口 浩 先生 (東京大学整形外科 准教授)	医歯薬保健学研究院 整形外科学
平成25年 1月26日(土)	第23回広島膝関節セミナー	リーガロイヤルホテル広島	「膝蓋骨脱臼の病態と治療」 講師：黒田 良祐 先生 (神戸大学大学院整形外科 准教授) 「膝十字靭帯再建術－手技上の問題点と展望－」 講師：高橋 成夫 先生 (三菱名古屋病院 院長)	医歯薬保健学研究院 整形外科学

平成25年 1月29日(火)	第2回心臓いきいきキャラバン研修会	三次ロイヤルホテル	<p>テーマ「心不全患者のサポートに向けて」 講演</p> <ol style="list-style-type: none"> 「心臓弁膜症について」 講師：木原 康樹 先生 (広島大学病院循環器内科学 教授) 「事例から学ぶ心疾患患者教育の実際」 講師：森山 美知子 先生 (広島大学医歯薬保健学研究院 教授) 事例発表 講師：田鍋 民江 先生 (三次地区医療センター 保健師) 	広島大学病院心不全センター 三次地区医療センター
平成25年 1月31日(木)	広島市医師会臨床検査センター学術講演会	広島医師会館 2階講堂	<p>テーマ「心不全マーカーの最近の話題」 講演</p> <ol style="list-style-type: none"> 「心不全のチーム医療と地域連携」 -地域連携バス 心筋梗塞・心不全手帳の活用について- 講師：水川 真理子 先生 (広島大学病院心不全センター 看護師) 「心不全バイオマーカーの紹介」 講師：津川 和子 先生 (広島大学病院検査部 検体検査部門長) <p>特別講演 「NT-proBNPガイド下の心不全診断と無症候性患者への早期介入」 講師：木阪 智彦 先生 (広島大学病院心不全センター)</p>	主催：広島市医師会臨床検査センター 共催：ロシュ・ダイアグノスティック株式会社 後援：広島市内科医会
平成25年 2月2日(土)	第11回広島Bone&Jointセミナー	リーガロイヤルホテル広島	<p>「人工股関節の成績と機種選択」 講師：尾崎 誠 先生 (長崎大学大学院医歯薬学総合研究科整形外科学 教授)</p> <p>「脊柱変形の診断と治療-さまざまな疾患による変形-」 講師：高相 晶士 先生 (北里大学医学部整形外科学 主任教授)</p> <p>「人工膝関節の現状と展望」 講師：高井 信朗 先生 (日本医科大学整形外科学 主任教授)</p>	医歯薬保健学研究院 整形外科学
平成25年 2月6日(木)	第2回心臓いきいきキャラバン研修会	安佐市民病院 WAPセンター	<p>テーマ「患者、家族が安心できる心不全への療養支援」 -地域とのネットワークを目指して-</p> <p>講演</p> <p>座長：中野 良規 先生 (広島市立安佐市民病院循環器内科)</p> <p>講師：二宮 正則 先生 (医療法人社団恵正会 二宮内科)</p> <p>新宮 正誠 先生 (有限会社ケイムズ・メディカ 副社長 アイビー薬局可部)</p> <p>三原 千春 先生 (医療法人社団あすか あすか居宅介護支援事業所)</p> <p>事例検討 グループワーク</p>	広島大学病院心不全センター 安佐市民病院
平成25年 2月9日(土)	第11回広島感染症教育セミナー & 第8回Hiroshima Green Summit合同研修会	広仁会館 中会議室	<p>症例検討2例 「血液ガスのみかた」 上田 剛士 先生 (洛和会丸太病院)</p>	感染症セミナー広島
平成25年 2月13日(木)	第16回「分子細胞情報学セミナー」	医学部 基礎・社会医学棟 2階セミナー室2	<p>「Wntシグナルネットワークによる細胞機能制御とその異常による病態」 講師：菊池 章 先生 (大阪大学大学院医学系研究科分子病態生化学)</p>	医歯薬保健学研究院 分子細胞情報学 教授 今泉 和則
平成25年 2月16日(土)	厚生労働省チーム医療普及推進事業 ワークショップ「薬剤師専従による周術期管理チーム」	広島市文化交流会館	<p>座長：河本 昌志 先生 (広島大学大学院麻酔蘇生学 教授)</p> <p>木平 健治 先生 (広島大学病院薬剤部 教授)</p> <p>講演</p> <p>鈴木 利保 先生 (東海大学医学部外科学系診療部麻酔科 教授)</p> <p>坂本 篤裕 先生 (日本医科大学麻酔科学 教授)</p> <p>中川 五男 先生 (中国労災病院麻酔科 部長)</p> <p>吉田 実知 先生 (東邦大学医療センター大森病院手術部 看護師長)</p> <p>堀内 賢一 先生 (長野県厚生農業協同組合連合会佐久総合病院薬剤部)</p> <p>総合討論 演者および座長による講演の総括</p>	広島大学病院薬剤部

平成25年 2月16日(土)	第110回 「日本病理学会中国四国 支部学術集会」	医学部 臨床講義棟 第5講義室	手術・生検材料19例、剖検例1例の病理医による 症例検討	医菌薬保健学研究院 基礎生命科学部門 病理学研究室
平成25年 2月21日(木)	第127回原医研セミナー	総合研究棟7階 701セミナー室	「造血幹細胞移植の潮流（血液内科の取り組み）」 講師：兵頭 英出夫 先生 （広島大学原爆放射線医学研究所）	原爆放射線医学研究所事 務室
平成25年 2月23日(土)	第2回心臓いきいきキャ ラバン研修会	JA尾道総合病院 5階大会議室	テーマ「地域でみる心不全」 －心不全連携サポート体制構築に向けて－ 基調講演 「心不全のチーム医療」 佐藤 幸人 先生 （県立尼崎病院循環器科 医師） パネルディスカッション パネラー：本多 元陽 先生 （在宅医・本多医院） 三藤 浩子 先生 （尾道医師会訪問ステーション 看護師） 川村 美香 先生 （尾道市民病院血管センター 看護師） 串田 慎也 先生 （尾道薬剤師会 薬剤師） 本東 久典 先生 （木曾病院 理学療法士） アドバイザー：佐藤 幸人 先生 当院の活動報告 「JA尾道総合病院での心不全への取り組み」 富山 美由紀 先生 （JA尾道総合病院 慢性心不全看護認定看護師）	広島大学病院心不全セン ター JA尾道総合病院
平成25年 2月23日(土)	心房細動治療ガイドライ ン公開セミナー	広島県医師会館	講演1 「ガイドランスに基づいた心房細動の薬物治 療：リズムコントロール、レートコントロール」 講師：松本 万夫 先生 （埼玉医科大学国際医療センター心臓内科 教授） 講演2 「心原性脳梗塞症のリスク評価と薬物療法の実際」 講師：新 博次 先生 （日本医科大学多摩永山病院内科学 教授） 講演3 「心房細動におけるカテーテルアブレーション の位置付けと役割」 講師：中野 由紀子 先生 （広島大学病院循環器内科 助教）	共済：日本心電学会 広島医師会 第一三共株式会社 医菌薬保健学研究院 循環器内科学 教授 木原 康樹
平成25年 2月23日(土)	第16回「中皮腫パネル」	順天堂大学 医学部10号館1階 カンファレンス ルーム	中皮腫関連疾患8例の臨床病理学的検討と症例解 説	医菌薬保健学研究院 基礎生命科学部門 病理学 教授 武島 幸男
平成25年 2月27日(木)	第12回広島リハビリテー ション研究会	広仁会館	第12回広島リハビリテーション研究会 講演1 「脳卒中治療の最前線と嚥下リハビリテー ションの取組」 細見 直永 先生 （広島大学大学院脳神経内科学 講師） 講演2 「耳鼻咽喉科医中心の嚥下チーム医療」 津田 豪太 先生 （福井県済生会病院耳鼻咽喉科頭部外科 主任部長）	広島大学病院リハビリテー ション科 木村 浩彰
平成25年 3月1日(金)	第128回原医研セミナー	霞総合研究棟6階 604セミナー室	「エビゲノム制御における地産地消機構」 講師：五十嵐 和彦 先生 （東北大学大学院医学系研究科）	原爆放射線医学研究所事 務室
平成25年 3月7日(木)	第2回心臓いきいきキャ ラバン研修会	中国労災病院 8階多目的ホール	テーマ「多職種による包括的心不全ケア」 講演 1. 「当院における「心臓いきいき」の取り組み」 松田 圭司 先生 （中国労災病院 循環器内科） 2. 「呉でのヘルシーグルメリランチを利用した 減塩の取り組み」 藤井 秀昭 先生 （ふじい内科循環器科 院長） 3. 「心不全外来での取り組み」 富山 美由紀 先生 （JA尾道総合病院 慢性心不全看護認定看護師） 4. 「患者と共に創める心臓リハビリテーション」 木阪 智彦 先生 （広島大学病院 循環器内科）	広島大学病院心不全セン ター 中国労災病院

平成25年 3月8日(金)	第18回難病医療従事者研修会	広仁会館	第18回難病医療従事者研修会 講演 「排痰困難患者への呼吸リハビリテーションアプローチ」 皿田 和宏 先生 (広島大学病院 主任理学療法士) 特別講演 「低定量持続喀痰吸引装置の開発と普及」 法化 陽一 先生 (大分県立病院 神経内科部長)	CIDC難病対策センター センター長 教授 松本 昌泰
平成25年 3月16日(土)	第59回「広島病理集談会」	医学部 基礎講義棟 第1講義室	手術・生検材料7例の病理医による症例検討 特別講演 「大腸疾患病理診断の実際」 講師：味岡 洋一 先生 (新潟大学大学院医歯学総合研究科 教授)	広島病理集談会事務局 (医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 病理学研究室)
平成25年 3月16日(土)	日本医学シミュレーション学会 第27回セッショントレーニングコース	広島大学病院	対象 処置・検査で鎮静にかかわる医師・歯科医師・ 看護師 定員 12名 形式 講義及びハンズオンセミナー	医歯薬保健学研究院 麻酔蘇生学
平成25年 3月19日(火)	第129回原医研セミナー	総合研究棟7階 701セミナー室	「Bcl11bがん抑制遺伝子の生理的機能およびスト レス下での働き」 講師：木南 凌 先生 (新潟大学大学院医歯学総合研究科)	原爆放射線医学研究所事 務室
平成25年 3月21日(木)	第130回原医研セミナー	総合研究棟7階 701セミナー室	「乳癌に対する超音波造影検査における輝度解析 の検討」 講師：舛本 法生 先生 (広島大学病院) 「放射線晩発障害である骨髄異形成症候群 (MDS) のエピゲノム解析」 講師：松井 啓隆 先生 (広島大学原爆放射線医学研究所)	原爆放射線医学研究所事 務室
平成25年 3月21日(木)	第1回日本バイオマテリアル学会 中国・四国ブロック研究会	広仁会館 小会議室	主催 日本バイオマテリアル学会中国・四国ブロック 共催 日本歯科理工学会近畿・中四国支部 テーマ 「中国・四国地区におけるバイオマテリアル研究」 講師 田中 康弘 先生 (香川大学大学院工学研究科) 櫻井 敏彦 先生 (鳥取大学大学院工学研究科) 安澤 幹人 先生 (徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部) 松本 卓也 先生 (岡山大学大学院医歯薬学総合研究科) 加藤 功一 先生 (広島大学大学院医歯薬保健学研究院)	医歯薬保健学研究院 生体材料学 教授 加藤 功一
平成25年 3月28日(木)	第13回広島リハビリテーション研究会	広仁会館	第13回広島リハビリテーション研究会 講演 「低周波治療と理学療法」 河江 敏広 先生 (広島大学病院診療支援部) 特別講演 「骨格筋電気刺激の臨床応用」 森谷 敏夫 先生 (京都大学大学院人間環境学研究所 教授)	広島大学病院リハビリテー ション科 木村 浩彰
平成25年 3月29日(金)	第131回原医研セミナー	総合研究棟7階 701セミナー室	「抗体医薬品を用いた新たな造血幹細胞移植法の開発」 講師：大島 久美 先生 (聖路加国際病院血液腫瘍科)	原爆放射線医学研究所事 務室

人事異動 平成24年10月2日～平成25年4月1日

発令 月日	異動 内容	氏名	異動前 所属	異動前 職名	異動後所属・部門等	異動後 職名
12.1	昇任	柿沢 秀明	大学院医歯薬保健学研究院	講師	大学院医歯薬保健学研究院 応用生命科学部門(放射線診断学)	准教授
12.1	採用	山野 喜			大学院医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門(生薬学)	助手
12.31	退職	川崎 範隆	大学院医歯薬保健学研究院	特任助教		
12.31	退職	細井 義夫	原爆放射線医科学研究所	教授		
12.31	退職	恵美 学	原爆放射線医科学研究所	助教		
12.31	退職	竹原 和宏	病院	准教授		
12.31	退職	浜井 洋一	病院	助教		
1.1	採用	一戸 辰夫			原爆放射線医科学研究所 放射線災害医療研究センター	教授
1.1	採用	浜井 洋一			原爆放射線医科学研究所 放射線災害医療研究センター	助教
1.1	配置換	中島 拓	病院 集中治療部	助教	病院 呼吸器診療科	助教
1.1	採用	埜本 純哉			病院 消化器診療科	助教
1.1	配置換	大下 慎一郎	病院	助教	病院 集中治療部	助教
1.31	退職	津山 尚宏	大学院医歯薬保健学研究院	講師		
1.31	退職	金本 尚志	病院	講師		
1.31	退職	大原 直樹	病院	助教		
1.31	退職	佐々木 崇暁	病院	助教		
2.1	配置換	川和田 晶子	図書館	助教	大学院医歯薬保健学研究院 医学部附属医学教育センター	助教
2.1	採用	加門 正義			大学院医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門(分子細胞情報学)	特任助教
2.1	配置換	横山 知子	大学院医歯薬保健学研究院	特任助教	病院 感覚器・頭頸部診療科	助教
2.1	昇任	望月 英毅	病院	助教	病院 感覚器・頭頸部診療科	講師
2.1	採用	森桶 聡			病院 皮膚・運動器診療科	助教
3.1	採用	恒松 美輪子			大学院医歯薬保健学研究院 (臨床情報医工学プログラム)	特任助教
3.31	定年退職	赤川 安正	大学院医歯薬保健学研究院	教授		
3.31	定年退職	加藤 幸夫	大学院医歯薬保健学研究院	教授		
3.31	定年退職	丹根 一夫	大学院医歯薬保健学研究院	教授		
3.31	定年退職	升島 努	大学院医歯薬保健学研究院	教授		
3.31	定年退職	横尾 京子	大学院医歯薬保健学研究院	教授		
3.31	退職	内匠 透	大学院医歯薬保健学研究院	教授		
3.31	退職	西村 英紀	大学院医歯薬保健学研究院	教授		
3.31	退職	柿沢 秀明	大学院医歯薬保健学研究院	准教授		
3.31	退職	河田 俊嗣	大学院医歯薬保健学研究院	准教授		
3.31	退職	貞森 紳丞	大学院医歯薬保健学研究院	准教授		
3.31	退職	三原 祥嗣	大学院医歯薬保健学研究院	准教授		
3.31	退職	森田 克也	大学院医歯薬保健学研究院	准教授		
3.31	退職	山脇 健盛	大学院医歯薬保健学研究院	准教授		
3.31	退職	高 知愛	大学院医歯薬保健学研究院	特任講師		
3.31	退職	藤村 昌彦	大学院医歯薬保健学研究院	講師		
3.31	退職	上野 和美	大学院医歯薬保健学研究院	助教		
3.31	退職	大谷 淳二	大学院医歯薬保健学研究院	助教		
3.31	退職	土谷 佳弘	大学院医歯薬保健学研究院	特任助教		
3.31	退職	戸田 良太郎	大学院医歯薬保健学研究院	助教		
3.31	退職	平田 涼子	大学院医歯薬保健学研究院	助教		
3.31	退職	松尾 順子	大学院医歯薬保健学研究院	助教		
3.31	退職	村上 玄樹	大学院医歯薬保健学研究院	助教		
3.31	退職	水野 初	大学院医歯薬保健学研究院	助手		
3.31	退職	小田 啓祐	大学院医歯薬保健学研究院	特任助教		
3.31	退職	坂本 直也	大学院医歯薬保健学研究院	特任助教		
3.31	退職	佐々木 由紀	大学院医歯薬保健学研究院	特任助教		
3.31	退職	田口 香織	大学院医歯薬保健学研究院	特任助教		
3.31	退職	田原 宏美	大学院医歯薬保健学研究院	特任助教		
3.31	退職	田村 朋子	大学院医歯薬保健学研究院	特任助教		
3.31	退職	中尾 敬	大学院医歯薬保健学研究院	特任助教		
3.31	退職	明 智煥	大学院医歯薬保健学研究院	特任助教		
3.31	退職	山下 ユキコ	大学院医歯薬保健学研究院	特任助教		
3.31	退職	吉村 晋平	大学院医歯薬保健学研究院	特任助教		
3.31	退職	原田 浩徳	原爆放射線医科学研究所	講師		
3.31	退職	河野 一輝	原爆放射線医科学研究所	助教		
3.31	退職	落合 博	原爆放射線医科学研究所	助教		
3.31	退職	原田 結花	原爆放射線医科学研究所	助教		
3.31	定年退職	河村 誠	病院	講師		
3.31	退職	佐伯 俊成	病院	准教授		
3.31	退職	江口 国輝	病院	講師		
3.31	退職	岐浦 禎展	病院	助教		

3.31	退職	高橋 祥一	病院	講師			
3.31	退職	卜部 祐司	病院	特任助教			
3.31	退職	小林 賢惣	病院	特任助教			
3.31	退職	天野 尋暢	病院	助教			
3.31	退職	小田 登	病院	助教			
3.31	退職	上松瀬 新	病院	助教			
3.31	退職	鈴木 崇久	病院	助教			
3.31	退職	高木 慎太郎	病院	助教			
3.31	退職	中布 龍一	病院	助教			
3.31	退職	鈴木 修身	病院リハビリテーション科	助教			
4.1	配置換	丸山 博文	原爆放射線医科学研究所	准教授	大学院医歯薬保健学研究院	応用生命科学部門(脳神経内科学)	准教授
4.1	配置換	渡邊 多恵	病院 看護部 高度救命救急センター	副看護部長	大学院医歯薬保健学研究院	統合健康科学部門(成人健康学)	助教
4.1	配置換	矢野 佳子	緊急被ばく医療推進センター	特任助教	大学院医歯薬保健学研究院	応用生命科学部門(救急医学)	特任助教
4.1	配置換	山野 喜	大学院医歯薬保健学研究院	助手	大学院医歯薬保健学研究院	基礎生命科学部門(生薬学)	助教
4.1	配置換	Hayes Clair Nelson	大学院医歯薬保健学研究院	特任助教	大学院医歯薬保健学研究院	応用生命科学部門(消化器・代謝内科学)	特任講師
4.1	昇任	阿部 弘美	大学院医歯薬保健学研究院	助教	大学院医歯薬保健学研究院	附属医療人大学院教育・研究センター	准教授
4.1	昇任	信藤 肇	病院	講師	大学院医歯薬保健学研究院	統合健康科学部門(皮膚科学)	准教授
4.1	昇任	森岡 徳光	大学院医歯薬保健学研究院	講師	大学院医歯薬保健学研究院	応用生命科学部門(薬物解析科学)	准教授
4.1	昇任	越智 秀典	大学院医歯薬保健学研究院	助教	大学院医歯薬保健学研究院	応用生命科学部門(消化器・代謝内科学)	講師
4.1	昇任	杉本 幸子	大学院医歯薬保健学研究院	助教	大学院医歯薬保健学研究院	統合健康科学部門(薬学部附属薬用植物園)	講師
4.1	採用	大平 光子			大学院医歯薬保健学研究院	統合健康科学部門(助産・母性看護開発学)	教授
4.1	採用	山上 卓士			大学院医歯薬保健学研究院	応用生命科学部門(放射線診断学)	准教授
4.1	採用	高 知愛			大学院医歯薬保健学研究院	統合健康科学部門(視覚病態学)	講師
4.1	採用	藤田 直人			大学院医歯薬保健学研究院	統合健康科学部門(運動器機能医科学)	講師
4.1	採用	木村 友希			大学院医歯薬保健学研究院	統合健康科学部門(疫学・疾病制御学)	助教
4.1	採用	國松 亮			大学院医歯薬保健学研究院	応用生命科学部門(歯科矯正学)	助教
4.1	採用	竹井 悠一郎			大学院医歯薬保健学研究院	基礎生命科学部門(硬組織代謝生物学)	助教
4.1	採用	土谷 佳弘			大学院医歯薬保健学研究院	医学部附属医学教育センター	助教
4.1	採用	水町 亘			大学院医歯薬保健学研究院	応用生命科学部門(先端歯科補綴学)	助教
4.1	採用	井上 由子			大学院医歯薬保健学研究院	統合健康科学部門(地域・学校看護開発学)	特任助教
4.1	採用	大平 真裕			大学院医歯薬保健学研究院	応用生命科学部門(消化器・移植外科学)	特任助教
4.1	採用	加藤 承彦			大学院医歯薬保健学研究院	統合健康科学部門(公衆衛生学)	特任助教
4.1	採用	木原 琢也			大学院医歯薬保健学研究院	統合健康科学部門(口腔生物工学)	特任助教
4.1	採用	Kong Weng Sheng			大学院医歯薬保健学研究院	基礎生命科学部門(免疫学)	特任助教
4.1	採用	武田 正明			大学院医歯薬保健学研究院	応用生命科学部門(脳神経外科学)	特任助教
4.1	採用	竹中 文二			大学院医歯薬保健学研究院	統合健康科学部門(視覚病態学)	特任助教
4.1	採用	田中 暁生			大学院医歯薬保健学研究院	統合健康科学部門(皮膚科学)	特任助教
4.1	採用	福島 紗世			大学院医歯薬保健学研究院	統合健康科学部門(助産・母性看護開発学)	特任助教
4.1	併任終了	松浪 勝義	薬学部附属薬用植物園	園長			
4.1	併任開始	越智 光夫			病院 皮膚・運動器診療科		主任診療科長
4.1	併任開始	加藤 功一			大学院医歯薬保健学研究院		副研究科長
4.1	併任開始	加藤 功一			大学院医歯薬保健学研究院		副研究科長
4.1	併任開始	木内 良明			病院		副病院長
4.1	併任開始	工藤 美樹			病院 泌尿・生殖器診療科		主任診療科長
4.1	併任開始	工藤 美樹			病院		副病院長
4.1	併任開始	栗原 英見			教育研究評議会		評議員
4.1	併任開始	栗原 英見			病院 口腔維持修復歯科		主任診療科長
4.1	併任開始	栗原 英見			病院		主席副病院長
4.1	併任開始	栗原 英見			病院 地域連携歯科医療部		部長
4.1	併任開始	香西 克之			病院 口腔健康発育歯科		主任診療科長
4.1	併任開始	河野 修興			病院 呼吸器診療科		主任診療科長
4.1	併任開始	河野 修興			病院 内分泌代謝診療科		主任診療科長
4.1	併任開始	小林 正夫			病院 周産母子センター		センター長
4.1	併任開始	小林 正夫			病院 成育診療科		主任診療科長
4.1	併任開始	小林 正夫			病院 造血管診療科		主任診療科長
4.1	併任開始	小林 正夫			大学院医歯薬学総合研究科		研究科長
4.1	併任開始	末田 泰二郎			病院 循環器診療科		主任診療科長
4.1	併任開始	杉山 政則			薬学部附属薬用植物園		園長
4.1	併任開始	谷川 攻一			病院 高度救命救急センター		センター長
4.1	併任開始	谷川 攻一			病院 集中治療部		部長
4.1	併任開始	谷川 攻一			病院 救急診療科		主任診療科長
4.1	併任開始	谷川 攻一			病院		副病院長
4.1	併任開始	谷本 啓二			病院		副病院長
4.1	併任開始	谷本 啓二			病院 特殊歯科総合治療部		部長
4.1	併任開始	谷本 啓二			病院 口腔再建外科		主任診療科長
4.1	併任開始	永田 靖			病院 放射線部		部長

4.1	併任開始	永田 靖			病院 放射線診療科	主任診療科長
4.1	併任開始	秀 道広			ナノデバイス・バイオ融合科学研究所	副研究所長
4.1	併任開始	平川 勝洋			副学長	副学長
4.1	併任開始	平川 勝洋			病院 感覚器・頭頸部診療科	主任診療科長
4.1	併任開始	平川 勝洋			病院	副病院長
4.1	併任開始	平川 勝洋			病院 臨床研究部	部長
4.1	併任開始	山脇 成人			病院 脳・神経・精神診療科	主任診療科長
4.1	併任終了	稲葉 俊哉	原爆放射線医科学研究所	副研究所長		
4.1	併任終了	神谷 研二	原爆放射線医科学研究所	所長		
4.1	併任開始	稲葉 俊哉			原爆放射線医科学研究所	所長
4.1	併任開始	神谷 研二			緊急被ばく医療推進センター	センター長
4.1	併任開始	神谷 研二			副学長	副学長
4.1	併任開始	松浦 伸也			原爆放射線医科学研究所副研究所長	
4.1	配置換	伊藤 公訓	大学院医歯薬保健学研究院	講師	病院 消化器診療科	講師
4.1	配置換	石山 宏平	大学院医歯薬保健学研究院	特任助教	病院 消化器診療科	助教
4.1	配置換	岡崎 貴仁	大学院医歯薬保健学研究院	特任助教	病院 脳・神経・精神診療科	助教
4.1	配置換	岸川 暢介	病院	特任助教	病院 医系総合診療科	助教
4.1	配置換	北川 知郎	大学院医歯薬保健学研究院	特任助教	病院 循環器診療科	助教
4.1	昇任	菅野 啓司	病院	助教	病院 医系総合診療科	講師
4.1	昇任	平郡 隆明	自然科学研究支援開発センター	助教	病院 皮膚・運動器診療科	講師
4.1	採用	岐浦 禎展			病院 脳・神経・精神診療科	講師
4.1	採用	河岡 友和			病院 消化器診療科	助教
4.1	採用	近藤 隆志			病院 皮膚・運動器診療科	助教
4.1	採用	近藤 成			病院 消化器診療科	助教
4.1	採用	戸田 良太郎			病院 感覚器・頭頸部診療科	助教
4.1	採用	中村 優子			病院 放射線診断科	助教
4.1	採用	山賀 聡之			病院 高度救命救急センター	助教
4.1	採用	沖 健司			病院 医療安全管理部	助教
4.1	併任開始	小川 哲次			病院 菌系総合診療科	主任診療科長
4.1	併任開始	杉山 一彦			病院 化学療法診療科	主任診療科長
4.1	併任開始	田妻 進			病院 臨床実習教育研修センター	センター長
4.1	併任開始	田妻 進			病院 医系総合診療科	主任診療科長
4.1	併任開始	正木 崇生			病院 透析内科	科長
4.1	併任開始	日野 孝宗			歯科診療所	所長
4.1	併任開始	横崎 典哉			病院 検査部	部長
4.1	併任開始	仁井内 浩			病院 手術部	部長
4.1	併任開始	藤井 輝久			病院 輸血部	部長
4.1	併任開始	木平 健治			病院 薬剤部	部長
4.1	併任開始	有廣 光司			病院 病理診断科	科長
4.1	併任開始	木村 浩彰			病院 リハビリテーション科	科長
4.1	併任開始	田中 信治			病院 内視鏡診療科	科長
4.1	併任開始	外丸 祐介			自然科学研究支援開発センター	副センター長

修士課程

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
25.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	まつたに かおる	松谷 薫	部域特異的中軸骨格の形成における体節細胞と側板中胚葉の相互作用－腰部側板中胚葉の肋骨原基体節細胞の移動能に与える影響－
25.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	にしべ りお	西部 莉央	ノックアウトマウスを用いた白血病発症における核内因子CIZ1の機能解析
25.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	ほそば こうすけ	細羽 康介	微小管脱重合活性をもつキネシン分子KIF2Aの繊毛形成における機能解析
25.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	かじたに かよ	梶谷 佳世	歯科衛生士のケアリング面接のためのコミュニケーションに関する研究
25.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	やまもと くによ	山本 州代	味覚受容機能と味覚嗜好性に対する亜鉛欠乏の影響
25.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	さえき けいた	佐伯 慧太	E2Fを介した転写制御に対するGemininの役割
25.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	まつなが やすか	松永 泰花	非アルコール性脂肪肝炎発症におけるLUBAC形成障害の解析
25.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	ながたに ゆきこ	長谷 由紀子	歯科衛生士のプロフェッショナルリズムに関する研究
25.3.23	医歯薬学総合研究科	医歯科学専攻	ちょうこうじれ	朝克吉楽	側板中胚葉の発生運命

修士課程

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
25.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	やうち けいた	矢内 啓太	Ethylene Vinyl Acetate (EVA) 系マウスガードシート材の研磨方法の検討

博士課程前期

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
25.3.23	医歯薬学総合研究科	薬学専攻	おみ れいな	尾美 玲奈	ビオチン化フォスタグを用いたリン酸化タンパク質の化学発光検出

博士課程前期

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
25.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	あおた たつあき	青田 達明	大腸菌における抗結核薬D-cycloserine生産システムの確立
25.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	まつだ しゅういち	松田 修一	1細胞質量分析法を用いた植物内組織特異的分子分布探索
25.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	たけがわ とも	竹川 友	カルバモイル基のキレーション能を利用するキラル α -ニトリルカルバニオンの発生とその求電子置換反応
25.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	かわばた こうへい	川畑 公平	医薬品の環境動態と生態毒性
25.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	ほりうち たいし	堀内 大士	肺胞上皮細胞における物質輸送と喫煙関連物質の影響
25.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	てらざわ さおり	寺澤 沙織	沖縄産植物モクレイシ (<i>Microtropis japonica</i> Hallier f.) の成分研究、及び新規有用成分の探索
25.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	あさうみ しんたろう	浅海 慎太郎	沖縄産植物シシアクチ (<i>Ardisia quinquegona</i>)・インドネシア産海綿動物 (<i>Phyllospongia</i> sp.) からの新規有用成分の探索
25.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	かねこ まさひろ	金子 将大	ラット初代培養アストロサイトにおける抗うつ薬による脳由来神経栄養因子 (BDNF) 発現機構の解明
25.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	ふじわら みさと	藤原 美智	α -ヒドロキシアルシルシランのプロトン化反応における不斉転写機構の解明及びそれを利用する電子求引基の α -カルバニオンのラセミ化傾向の比較
25.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	くほの ゆうすけ	窪野 佑輔	カロテノイド産生乳酸菌における過酸化水素及び γ 線耐性に関する研究
25.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	しまばら るみこ	島原 留美子	アミノ酸を不斉源とする不斉反応の開発
25.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	やまもと ゆうき	山本 祐樹	1細胞質量分析法を用いた肥満細胞モデル分泌顆粒内分子の探索
25.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	かねひら ゆうか	金平 有華	トリテルペン配糖体を中心としたナツツバキ葉部及びハマナデシコ全草の成分研究
25.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	ふじい たかし	藤井 崇司	1細胞質量分析法を用いた光屈性における植物内時空間分子変動解析
25.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	たかぎ きしろう	高木 紀抄	遺伝子破壊実験によるD-cycloserine生合成遺伝子の機能解析
25.3.23	医歯薬学総合研究科	薬科学専攻	ふくなが さおり	福永 早央里	新規老化関連microRNAの同定・機能解析と新規がん治療薬への可能性

博士課程前期

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
25.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	まつした しょうじ	松下 翔士	義歯床用レジンとジルコニアの接着における表面処理の効果について
25.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	ちば ゆうじ	千葉 祐嗣	ジルコニアと機能性モノマーの化学的相互作用の解析
25.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	おかむら みなこ	岡村 美菜子	ヒト多能性幹細胞から肝細胞分化誘導効率に優れた細胞株を予測するための評価方法の開発
25.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	つづき ひなこ	都築 日向子	歯科衛生士の職務継続意志とワークライフバランス・コミットメント・職務選択動機の関係
25.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	しんかわ みなこ	新川 美那子	二次元NMRによる乳酸菌由来バクテリオシンKogIの立体構造解析
25.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	いしづ こうき	石津 航希	シリコン材料のマウスガード材料への応用の検討
25.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	てつもり ことみ	鉄森 琴美	世代間における生活習慣の変化と伝達について
25.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	ひらまつ みなこ	平松 美菜子	高齢者用食品の物性と口腔機能の関連性の解析
25.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	かたぶち ゆうこ	片渕 由扶子	未分化間葉系幹細胞を用いた再生骨に対する実験的歯の移動時の三次元有限要素解析
25.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	たむら ともや	田村 智哉	VPI職業興味調査アンケートから考える口腔健康科学科口腔工学専攻におけるキャリア教育
25.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	ちば しんや	千葉 真也	歯科技工作業へのディスプレイパッチングルールの適用と離散事象型シミュレーションによる評価
25.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	ゆした かおり	柚下 香織	固定化抗菌剤Etakの皮膚への応用に関する研究
25.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	やまぐち ゆう	山口 裕	IL-33はERKとp38 MAPKを介して骨芽細胞におけるRANKLの発現を促進する
25.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	にしだ ひろき	西田 博樹	ジルコニアの研磨における表面粗さと光沢度の関係について
25.3.23	医歯薬学総合研究科	口腔健康科学専攻	ひだか つよし	日高 強	モーションキャプチャーを用いた歯科技工作業の動作分析

博士課程前期

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	むらき しろう	村木 士郎	ギャンブラーズ・アノニマス参加者の再ギャンブルに関連する要因の検討
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	まえだ ゆかり	前田 ゆかり	死産した女性をケアする助産師が必要とする支援
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	むかいはた つよし	向畑 毅	看護学生の職業意識は入学以前の景気・安定志向と関連しているか
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	すが のりこ	須賀 法子	特別支援学校教員とのコミュニケーション手段としての作業療法記録の試作と活用に関する探索的研究
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	おおくぼ ももこ	大久保 桃子	意思表出が重度に困難な人にとっての“作業”とは何か
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	とくだ かずき	徳田 一貫	変形性膝関節症患者の歩行の運動学的解析と臨床症状に関連する身体機能の要因分析
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	ふなば ゆうき	船場 友木	わが子がNICUに入院した母親の次子妊娠・出産を決意するまでの体験
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	おかもと あやこ	岡本 亜耶子	乳がん患者のリンパ浮腫予防指導に関わる看護師への教育的介入の効果
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	せお りょうこ	瀬尾 良子	放射線治療における看護師の知識習得と役割に関する認識
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	とくもと まさこ	徳本 雅子	新規就労を目指す脳卒中患者の就労支援における医療機関の役割に関する探索的研究 - 職業リハ機関との連携を通じて -
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	たにもと けんじ	谷本 研二	変形性膝関節症患者の階段降動作時における外部膝関節内反モーメントの特徴
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	おかざき ともゆき	岡崎 智行	統合失調症患者の社会認知機能と対人スキルとの関連について
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	またよし こうじ	又吉 孝次	外反母趾患者における前足部荷重運動が母趾外反角と足幅へ及ぼす影響
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	しまざき ひろこ	嶋崎 寛子	南相馬市における仮設住宅住民の震災後の作業バランスの特徴
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	いとう あゆみ	伊藤 歩	人口統計学的要因と食品摂取がBMIに及ぼす影響の定量的評価 - 食品の直接作用と間接作用 -
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	わたなべ ゆき	渡辺 友規	訪問看護師が認識するがん疼痛マネジメントの障壁とがん看護領域の専門看護師・認定看護師へ希望する相談内容
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	はっとり ひろか	服部 宏香	高齢者の着座動作の分析 - 筋力発揮形態に着目して -
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	うえおか ゆき	上岡 由季	乳がんサバイバーにおける認知機能障害の経験 - 認知機能の変化を自覚する乳がんサバイバーへの面接調査 -
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	あおやま なお	青山 菜緒	化学療法中のがん患者の食欲・栄養状態の変化と酸化ストレス反応
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	くおん ちゅん	権 珠榮	少子高齢化に対応できる医療保険制度のあり方 - 日本と韓国の医療費の比較をもとに -
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	かみかわ のりみち	上川 紀道	エアマットレスの硬さが咳嗽力に与える影響
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	おおにし くみこ	大西 久美子	デイケア・デイナイトケア利用中の統合失調症患者への回想法の有用性の検討
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	そん あなん	孫 亜楠	模擬微小重力環境を利用した細胞塊形成と神経分化への影響

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	きたさか あきひこ	北坂 彰彦	シーズンの進行がプロ野球投手の関節可動域および筋力に与える影響
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	おくの りさ	奥野 梨沙	術後肺がん患者の情報ニーズとQOLとの関連
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	とみやま しんじ	富山 信次	股関節角度に着目した腸脛靭帯が大腿骨外側上顆を乗り越える際の膝関節角度の違い
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	ふくしま としゆき	福島 敏之	把持動作における母指と手のアーチの関連性の検討 -三次元動作解析による定量的評価-
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	いしはら みさこ	石原 美紗子	外来通院中の消化器がん患者の自己効力感とサポートとの関連
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	きど ゆうこ	木戸 優子	切迫早産で妻が入院中の夫が必要とする支援
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	まつき りょうすけ	松木 良介	Characteristics of patients with severe heart failure exhibiting exercise oscillatory ventilation (運動時周期性呼吸変動をみとめる重症心不全患者の特徴)
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	わきもと よしお	脇本 祥夫	変形性膝関節症患者における筋力強化のあり方 -歩行時および筋力トレーニング中の筋収縮様式からの検討-
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	ほそ たかゆき	細 貴幸	高位脛骨骨切り術後の歩行解析 ~手術方法の違いが膝関節に与える影響~
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	わたなべ てつや	渡辺 哲也	対人距離のとり方が難しい統合失調症者の視覚認知・機能について
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	いわき だいすけ	岩城 大介	ハイヒール歩行が膝前十字靭帯損傷・再建膝に及ぼす影響
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	ふくり たかし	福利 崇	自己中心視点と他者中心視点からみた全身像の左右弁別における脳活動の比較 -MEGを用いた検討-
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	しもむら まきこ	下村 麻規子	心不全医療に携わる医療者の心不全患者の緩和ケアに対する認識とケア提供における障壁

博士課程

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
24.11.29	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	すみにに だいすけ	住谷 大輔	Virtual reality training followed by box training improves the laparoscopic skills of novice surgeons (外科初心者の腹腔鏡下手術技術はバーチャルリアリティトレーニング後にボックストレーニングを行うことにより改善する)
24.11.29	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	すずき みき	鈴木 美紀	<i>En bloc</i> transfer of polyubiquitin chains to PCNA <i>in vitro</i> is mediated by two different human E2-E3 pairs (2種類のE2-E3複合体による、ヒトPCNAへのポリユビキチン鎖転移反応の <i>in vitro</i> における解析)
24.11.29	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	なかの りきた	中野 力太	Single nucleotide polymorphisms in GALNT8 are associated with response to interferon therapy for chronic hepatitis C (GALNT8の一塩基多型はC型慢性肝炎のインターフェロン療法の治療効果と関連する)
24.11.29	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	はらだ ひろあき	原田 洋明	Methylation of breast cancer susceptibility gene 1 (<i>BRCA1</i>) predicts recurrence in patients with curatively resected stage I non-small cell lung cancer (<i>BRCA1</i> メチル化異常は完全切除されたI期非小細胞肺癌における再発リスク因子である)
25.1.24	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	やまき みのる	山木 実	The potential of recombinant vesicular stomatitis virus-mediated virotherapy against metastatic colon cancer (転移性大腸癌に対する組換え水疱性口内炎ウイルスを用いたウイルス療法の可能性)
25.1.24	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	ほんしょうだに まさたか	番匠谷 将孝	Adoptive transfer of allogeneic liver sinusoidal endothelial cells specifically inhibits T cell responses to cognate stimuli (移入アロ肝類洞内皮細胞は宿主T細胞をアロ抗原特異的に免疫寛容誘導する)
25.1.24	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	たかむら あけみ	高村 明美	High expression of gastrin receptor protein in injured mucosa of <i>Helicobacter pylori</i> -positive gastritis (ヘリコバクターピロリ菌陽性胃炎において粘膜障害の認められる領域にガストリン受容体蛋白の発現が高度に認められる)
25.1.24	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	しもむら まなぶ	下村 学	Preservation of peritoneal fibrinolysis owing to decreased transcription of plasminogen activator inhibitor-1 in peritoneal mesothelial cells suppresses postoperative adhesion formation in laparoscopic surgery (腹腔鏡手術では腹膜中皮細胞におけるPlasminogen activator inhibitor-1の転写抑制によって腹腔内でのフィブリン溶解反応が温存され、術後癒着形成が減少する)
25.1.24	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	おおたに ゆういちろう	大谷 裕一郎	Role of Pin1 in the pathogenesis of non-alcoholic steatohepatitis in a rodent model (げっ歯類モデルでの非アルコール性脂肪性肝炎 (NASH) 発症におけるPin1の役割)
25.2.28	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	いいはし ともひろ	飯星 知博	Value of cytodagnosis using endoscopic nasopancreatic drainage for early diagnosis of pancreatic cancer : establishing a new method for the early detection of pancreatic carcinoma in situ (膵癌の早期診断における内視鏡的経鼻膵管ドレナージを用いた膵液細胞診の有用性 : 膵上皮内癌の早期診断における新技法の確立)
25.2.28	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	むらかみ たろう	村上 太郎	Neuroanatomic pathways associated with poststroke affective and apathetic depression (脳卒中後うつ・意欲低下に関する神経解剖学的経路)

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
25.2.28	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	はしもと なおみ	橋本 尚美	Carotid arterial intraplaque hemorrhage and calcification influences cerebral hemodynamics (頸動脈プラーク内の出血・石灰化は脳血行動態に影響する)
25.2.28	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	すぎもと ようすけ	杉本 洋輔	Histological findings of uveal capillaries in rabbit eyes after multiple intravitreal injections of bevacizumab (複数回のベバシズマブ硝子体注射によるウサギ眼ブドウ膜組織への組織学的検討)
25.2.28	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	くわばら たかやす	栗原 隆泰	Genetic pathways of multiple esophageal squamous cell carcinomas and clinical features of pharyngeal intraepithelial neoplasias (多発食道扁平上皮癌の遺伝子経路と咽頭上皮内腫瘍の臨床的特徴) 1. Genetic pathways of multiple esophageal squamous cell carcinomas (多発食道扁平上皮癌の遺伝子経路) 2. Clinical features of pharyngeal intraepithelial neoplasias and outcomes of treatment by endoscopic submucosal dissection (ESDを施行した咽頭上皮内腫瘍の臨床的特徴と治療成績)
25.2.28	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	うえだ たけし	上田 武	MSC供給源としての顎骨の可能性
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	いわさき よりこ	岩崎 代利子	<i>Porphyromonas gingivalis</i> が産生する口臭関連ガスメチルメルカプタンの産生メカニズムの解析
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	まつしげ としのり	松重 俊憲	Multiple antiplatelet therapy contributes to the reversible high signal spots on diffusion-weighted imaging in elective coiling of unruptured cerebral aneurysm (多剤抗血小板療法は未破裂脳動脈瘤コイル塞栓術における拡散強調画像高信号域の可逆性に寄与する)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	きむら ゆき	木村 友希	Impaired glucose metabolism in non-alcoholic steatohepatitis (NASHにおける糖代謝異常について) 1. Postprandial insulin secretion pattern is associated with histological severity in non-alcoholic fatty liver disease patients without prior known diabetes mellitus (食後インスリン過分泌はNASHにおける組織学的重症度に関連する) 2. Atorvastatin decreases serum levels of advanced glycation endproducts (AGEs) in nonalcoholic steatohepatitis (NASH) patients with dyslipidemia: clinical usefulness of AGEs as a biomarker for the attenuation of NASH (NASHにおける酸化ストレスの指標として血清AGEsは有用である)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	しもむら たかこ	下村 貴子	Clinicopathological characteristics and mitochondrial DNA mutations in serrated adenomas (大腸鋸歯状腺腫における臨床病理学的特徴とミトコンドリアDNA変異の検討) 1. Synchronous and subsequent lesions of serrated adenomas and tubular adenomas of the colorectum (大腸における鋸歯状腺腫と管状腺腫に関する同時性・異時性病変の検討) 2. Frequent somatic mutations of mitochondrial DNA in traditional serrated adenomas but not in sessile serrated adenomas of the colorectum (大腸における古典的鋸歯状腺腫と広基性鋸歯状腺腫におけるミトコンドリアDNA変異の検討)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	ささだ しんすけ	笹田 伸介	Metabolomic analysis of dynamic response and drug resistance of gastric cancer cells to 5-fluorouracil (メタボロミクスによる胃癌細胞の5-フルオロウラシルに対する細胞応答および薬剤耐性機序解析)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	よしだ あすか	吉田 明日香	Passage of a Sendai virus recombinant in embryonated chicken eggs leads to markedly rapid accumulation of U-to-C transitions in a limited region of the viral genome (組換えセンダイウイルスの鶏卵継代による、急速で限局的な U-to-C トランジション変異の蓄積)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	はなき ひであき	花木 英明	An anti-Wnt5a antibody suppresses metastasis of gastric cancer cells <i>in vivo</i> by inhibiting receptor-mediated endocytosis (抗Wnt5a抗体は受容体のエンドサイトーシスを介して <i>in vivo</i> での胃癌細胞の転移を抑制する)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	こうの ともしこ	河野 友彦	Identification of novel HCV deletion mutants in chronic hepatitis C patients (C型慢性肝炎患者における欠損型C型肝炎ウイルスゲノムの同定)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	はしもと よしまさ	橋本 義政	Prediction of response to peginterferon-alfa-2b plus ribavirin therapy in Japanese patients infected with hepatitis C virus genotype 1b (日本人のゲノタイプ1bC型肝炎患者に対するペグインターフェロン、リバビリン併用療法の治療効果予測)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	おおにし まゆ	大西 真由	IL28B polymorphism is associated with fatty change in the liver of chronic hepatitis C patients (IL28B遺伝子多型は、C型慢性肝炎患者における肝組織の脂肪化と関連する)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	あんでいか ちゃんどら おとら	Andika Chandra Putra	Hypoxia-inducible factor-1 α polymorphisms are associated with genetic aberrations in lung cancer (肺癌においてHIF-1 α 多型は遺伝子異常と関連する)

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	こん うえん しえん	Kong Weng Sheng	Inhibition of virus-like particle release of Sendai virus and Nipah virus, but not that of mumps virus, by tetherin/CD317/BST-2 (センダイウイルス、ニパウイルスのウイルス様粒子のテザリン (CD317/BST-2) による放出阻害: ムンプスウイルスのウイルス様粒子放出は阻害されない)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	かたざり なほこ	片桐 菜穂子	脳由来神経栄養因子のヒアルロン酸合成促進作用とtrkB遺伝子の一塩基多型の関与
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	おおくほ ひろふみ	大久保 博史	Xanthine oxidoreductase is involved in macrophage foam cell formation and atherosclerosis development (キサンチン酸化還元酵素は、マクロファージの泡沫細胞形成や動脈硬化進展に関与している)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	みやがわ つよし	宮川 剛史	ヒト歯肉上皮細胞の制御による新しい歯周病予防法の開発
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	やました ひでゆき	山下 秀行	<i>Porphyromonas gingivalis</i> の病原因子を不活化する麴由来物質に関する研究
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	ながおき ゆうこ	長沖 祐子	Clinical features, prognosis and risk factors for the exacerbation of esophageal varices or portosystemic encephalopathy after hepatitis C virus eradication with interferon therapy (C型肝炎IFN治療SVR後の臨床的特徴や予後、食道静脈瘤やシャント脳症増悪の危険因子について) 1. Clinical features and prognosis in patients with hepatocellular carcinoma that developed after hepatitis C virus eradication with interferon therapy (C型肝炎に対するIFN治療SVR後の肝癌の臨床的特徴と予後について) 2. Risk factors for the exacerbation of esophageal varices or portosystemic encephalopathy after sustained virological response with IFN therapy for HCV-related compensated cirrhosis (C型肝炎に対するIFN治療SVR後の食道静脈瘤やシャント脳症増悪の危険因子について)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	ひがしやま まこと	東山 真	Outcome of endoscopic submucosal dissection for gastric neoplasm in relationship to endoscopic classification of submucosal fibrosis (内視鏡的粘膜下層線維化分類に基づく胃上皮性腫瘍に対するESDの治療成績)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	きったか みずほ	橘高 瑞穂	骨髄間葉系幹細胞と細胞外基質から構成される球状複合体のラット頭蓋骨欠損の再生における有用性
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	おかざき あきひと	岡崎 彰仁	Severe necroinflammatory reaction caused by natural killer cell-mediated Fas/Fas ligand interaction and dendritic cells in human hepatocyte chimeric mouse (ヒト肝細胞キメラマウスにおけるナチュラルキラー細胞により調節されたFas/Fasリガンドとの相互作用及び樹状細胞により引き起こされる重篤な壊死性炎症性反応について)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	もはまど あはめどる かびる	Md. Ahamedul Kabir	The effect of Dokudami (<i>Houttuynia cordata</i>) on inflammatory related genes in human gingival epithelial cells stimulated by <i>Aggregatibacter actinomycetemcomitans</i> (<i>Aggregatibacter actinomycetemcomitans</i> 刺激下のヒト歯肉上皮細胞における炎症関連遺伝子発現に対するドクダミの影響について)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	さわ まさよ	澤 雅世	Depressive symptoms and apathy are associated with psychomotor slowness and frontal activation (抑うつとアパシーは精神運動速度低下及び前頭葉賦活と関連している)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	ちょう えきちゅう	張 奕宙	Involvement of microRNA-224 in cell proliferation, migration, invasion and anti-apoptosis in hepatocellular carcinoma (microRNA-224が肝細胞癌の増殖、転移、侵襲と抗アポトーシスに関連する)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	くらしげ たかし	倉重 毅志	Localization of CHMP2B-immunoreactivity in the brainstem of Lewy body disease (レビー小体病の脳幹におけるCHMP2B免疫染色性の局在)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	こにし あきひろ	小西 昭弘	脳由来神経栄養因子 (BDNF) による歯周組織再生カスケードの解明
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	わだ けんじ	和田 健志	骨髄間葉系幹細胞の象牙質表面への接着
25.3.23	医歯薬学総合研究科	創生医科学専攻	やまもと ひかる	山本 光	Long-term exposure of RN46A cells expressing serotonin transporter (SERT) to a cAMP analog up-regulates SERT activity and is accompanied by neural differentiation of the cells (RN46A細胞においてcAMPアナログの長期暴露は、神経分化をともなってセロトニントランスポーターの取り込み活性を上昇させる)

博士課程

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
24.11.29	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	みやはら のぶゆき	宮原 伸之	Expression of Trefoil factor family peptides in the nasal allergic mucosa (アレルギー性鼻炎粘膜におけるTrefoil factor family peptidesの発現について)
25.1.24	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	ひらい ゆうこう	平位 有恒	Pulmonary artery mapping for differential diagnosis of left-sided atrial tachycardia (左房起源心房頻拍を診断する為の肺動脈マッピング)

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
25.2.28	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	みやさと まりん	宮里 麻鈴	Expression of RANKL and proliferation abilities of cultured human middle ear cholesteatoma epithelial cells (培養ヒト中耳真珠腫上皮細胞におけるRANKL発現と増殖能についての検討)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	むらさき きょうこ	村崎 恭子	顎顔面領域の異所性疼痛発現における小膠細胞の役割
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	よしみ ゆき	吉見 友希	エナメル蛋白アメロゲニンの活性部位の探索とセメント質再生への応用
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	まるはし たつや	丸橋 達也	Hyperbilirubinemia, augmentation of endothelial function, and decrease in oxidative stress in Gilbert syndrome (ジルベール症候群における高ビリルビン血症が酸化ストレスと血管内皮機能に及ぼす影響について)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	おかざき ようへい	岡崎 洋平	ハイドロキシアパタイトのリン酸溶液による生体活性化表面改質に関する実験的研究
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	おおかわ しんご	大川 新吾	Magnetic targeting of human peripheral blood CD133 ⁺ cells for skeletal muscle regeneration (ヒト末梢血由来CD133陽性細胞の磁気ターゲティングによる骨格筋再生)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	おおうえ ひろし	大上 博史	白菌の喪失がアルツハイマー病の分子病態に及ぼす影響に関する実験的研究
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	ほります やすし	堀益 靖	Different <i>MUC1</i> gene polymorphisms in German and Japanese ethnicities affect serum KL-6 levels (ドイツ人と日本人における <i>MUC1</i> 遺伝子多型が血清KL-6値に与える影響について)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	とかじ めぐみ	戸梶 めぐみ	An educational training simulator for advanced perfusion techniques using a high-fidelity virtual patient model (高再現性仮想患者モデルを用いた高度な体外循環技術のための教育用トレーニングシミュレータ)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	こじま しゅんいち	小島 俊逸	ラット骨髄由来間葉系幹細胞に対する磁場を利用した長期凍結保存の影響
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	つばもと のりこ	椿本 昇子	口呼吸が成長期ラットの記憶・学習能力に及ぼす影響
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	なかばやし あきひろ	中林 昭裕	In vivo bioluminescence imaging of magnetically targeted bone marrow-derived mesenchymal stem cells in skeletal muscle injury model (骨格筋損傷における磁気ターゲティングされた骨髄間葉系幹細胞のIn vivo イメージング)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	とりこし あいこ	鳥越 愛子	Gender differences in D-aspartic acid content in skull bone (頭蓋骨内D-アスパラギン酸量の性差について)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	つちおか ひろかず	土岡 寛和	認知症高齢者のための砥損機能検査法の開発
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	しんじょう たかのり	新城 尊徳	Par14はIRS-1と結合することによりインスリン誘発性のIRS-1リン酸化を増強し、糖・脂肪代謝を向上させる
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	ふくいり たかし	福入 隆史	Expression of prostanoid receptors (EP1, 2, 3, and 4) in normal and methimazole-treated mouse olfactory epithelium (正常マウス並びにメチマゾール投与マウスの嗅上皮におけるプロスタノイド受容体 (EP1, 2, 3, 4) の発現)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	おた りょう	大田 亮	Heme oxygenase-1 modulates degeneration of the intervertebral disc after puncture in Bach 1 deficient mice (Bach 1ノックアウトマウスにおいてヘムオキシゲナーゼ1は穿刺後の椎間板変性を調節する)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	こにし ゆきこ	小西 有希子	Studies on the roles of soluble Klotho and FGF23 in bone mineralization (可溶性型Klothoおよび線維芽細胞増殖因子23の硬組織石灰化における役割の解明)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	きさか ともひこ	木阪 智彦	Association of elevated plasma aldosterone-to-renin ratio with future cardiovascular events in patients with essential hypertension (本態性高血圧患者における血漿アルドステロン/レニン比の上昇と将来の心血管事故との相関)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	すぎはら かつのぶ	杉原 勝宣	The clinical characteristics of spinocerebellar ataxia 36: A study of 2121 Japanese ataxia patients (脊髄小脳変性症36型の臨床的特徴: 2121名の日本人失調患者に関する研究)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	おおくら ともひさ	大倉 知久	夜間睡眠時の顎筋活動と情動ストレスおよびTMD自覚症状の因果関係の解析
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	しまだ あゆみ	島田 歩	乳幼児口腔内における乳酸菌の分布と齲蝕関連因子の探索
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	こだま あきら	兒玉 祥	In vivo bioluminescence imaging of transplanted bone marrow mesenchymal stromal cells using a magnetic delivery system in a rat fracture model (磁気ターゲティング法を用いた骨髄間葉系幹細胞移植による骨癒合促進: 生体発光イメージングを用いた移植細胞の動態解析)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	おた あきら	太田 彰	炭酸アパタイト/poly (D,L lactide-co-glycolic acid) 複合体に関する基礎的研究

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	こばやし よしゆき	小林 良行	Identification of the integrin $\beta 3$ L718P mutation in a pedigree with autosomal dominant thrombocytopenia with anisocytosis (常染色体優性遺伝形式を示す血小板減少症家系におけるインテグリン $\beta 3$ L718P変異の同定とその機能解析)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	すみ けいすけ	鷺見 圭輔	口蓋裂患者における顎裂部骨再生治療法の確立 - 骨髄由来未分化間葉系幹細胞と炭酸アパタイト担体表面の相互作用と細胞代謝の検討 -
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	てらお あきこ	寺尾 明子	歯周組織の血管新生および歯根吸収の発現に対する咬合刺激の影響
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	うえだ ゆか	上田 祐華	Wnt signaling and telomerase activation of hepatoblastoma: correlation with chemosensitivity and surgical resectability (肝芽腫におけるWntシグナル伝達とテロメラーゼの活性: 化学療法感受性と外科切除率の関連から)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	ふじおか ゆうき	藤岡 悠樹	Magnetic field-based delivery of human CD133 ⁺ cells promotes functional recovery after rat spinal cord injury (磁場によるデリバリーシステムを用いたヒト末梢血由来CD133陽性細胞移植はラット脊髄損傷の回復を促進する)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	よこばやし けんいち	横林 賢一	Retrospective cohort study of the incidence and risk of fever in elderly people living at home: A pragmatic aspect of home medical management in Japan (在宅高齢者の発熱発生・リスクに関する後向きコホート研究: 日本の在宅医療の実態)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	なかむら ゆうこ	中村 優子	Detectability of hepatocellular carcinoma by gadoxetate disodium-enhanced hepatic MRI: tumor-by-tumor analysis in explant livers (ガドキシト酸ナトリウム造影MRIによる原発性肝細胞癌の診断能: 移植患者の摘出肝における検討)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	こばやし ひろのり	小林 弘典	Human equilibrative nucleoside transporter 1 expression predicts survival of advanced cholangiocarcinoma patients treated with gemcitabine-based adjuvant chemotherapy after surgical resection (進行胆管癌のhENT1発現とgemcitabineを用いた術後補助化学療法による治療効果の相関についての検討)
25.3.23	医歯薬学総合研究科	展開医科学専攻	たにため けいぞう	谷為 恵三	Ocular volumetry using fast high-resolution MRI during visual fixation (固視点を用いた高速高分解能MRIによる眼内容積測定法)

博士課程後期

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
24.11.29	保健学研究科	保健学専攻	しゃ ち	謝 地	Sidestep cutting maneuvers in female basketball players : Stop phase poses greater risk for anterior cruciate ligament injury (女子バスケットボール選手のサイドステップカッティング動作: ストップ期に膝前十字靭帯損傷のリスクが高くなることについて)
25.2.28	保健学研究科	保健学専攻	きりあけ あゆみ	桐明 あゆみ	認知症ケアにおける家族介護者のパートナーシップ向上を目指した心理教育プログラムの有効性に関する研究
25.2.28	保健学研究科	保健学専攻	むらかみ まり	村上 真理	新生児終末期ケア教育プログラムの開発
25.2.28	保健学研究科	保健学専攻	みやはら ともこ	宮原 智子	高次脳機能障害者の障害に対するself-awareness (自己の気づき) 及びその介入方法に関する検討
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	てらおか さわ	寺岡 佐和	認知症高齢者のQOL向上を目指したDiversional Therapyとしての園芸活動の活用に関する研究
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	まつもと まさや	松本 昌也	Electrical stimulation enhances neurogenin2 expression through β -catenin signaling pathway of mouse bone marrow stromal cells and intensifies the effect of cell transplantation on brain injury (電気刺激は β -カテニンを介してマウス骨髄間質細胞のニューロジェニン2の発現を促進し脳損傷後の細胞移植効果を高める)
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	hadoush hikmat moh'd hasan	Hadoush, Hikmat Moh'd Hasan	Functional interaction between hand and brain Magnetoencephalographic study for neuro-rehabilitation (手と脳の機能的相互作用 - 神経リハビリテーションのための脳磁図による解析)
25.3.23	保健学研究科	保健学専攻	かじわら こうへい	梶原 弘平	認知症高齢者の家族介護者における肯定的認識に着目した介護支援に関する研究

博士課程後期

修了年月日	研究科名	専攻名	かな氏名	氏名	論文題目名
25.3.23	医歯薬学総合研究科	薬学専攻	いまい けいすけ	今井 圭介	発熱および年齢がテオフィリンクリアランスに及ぼす影響 ~乳幼児の喘息発作時の検討~
25.3.23	医歯薬学総合研究科	薬学専攻	とみた たかし	富田 隆志	フルオロキノロンによる血糖異常の発現機構
25.3.23	医歯薬学総合研究科	薬学専攻	すぎもと たつひこ	杉本 達彦	脊髄の概日リズム形成に対するアストロサイトの役割に関する研究
25.3.23	医歯薬学総合研究科	薬学専攻	なかむら ようき	中村 庸輝	疼痛反応時における線条体サブスタンスP神経系に関する薬理学的研究
25.3.23	医歯薬学総合研究科	薬学専攻	おだ けいすけ	小田 啓祐	肺上皮細胞におけるインスリン輸送の機構解析と制御

○平成24年度受託研究受入・民間等との共同研究実績状況

外部資金の名称	受入状況	
	件数	受入金額（千円）
受託研究	20件	124,774
共同研究	36件	193,293
計	56件	318,067

医歯薬保健学研究院、原爆放射線医科学研究所、病院の平成24年10月1日から平成25年3月31日までの受入状況を示す。
（千円未満四捨五入）

○平成24年度奨学寄附金受入状況

受入状況	
件数	受入金額（千円）
704件	559,512

医歯薬保健学研究院、原爆放射線医科学研究所、病院の平成24年10月1日から平成25年3月31日までの受入状況を示す。
（千円未満四捨五入）



○寄贈図書一覧

寄贈者		書名	著者	出版社・発行年月
所属	氏名			
医歯薬保健学研究院 地域医療システム学講座	竹内 啓祐	地域医療セミナー 2012報告書	広島大学医学部地域医療システム学講座	広島大学医学部地域医療システム学講座 2012.10
原爆放射線医科学研究所 ゲノム障害医学研究センター 分子発がん制御研究分野	神谷 研二	Da faculdade de medicina e cirurgia de São Paulo à faculdade de medicina da Universidade de São Paulo.	Maria Gabriela S. M. C. Marinho, André Mota	CD.G Casa de Soluções e Editora 2012
原爆放射線医科学研究所 ゲノム障害医学研究センター 分子発がん制御研究分野	神谷 研二	Departamentos da faculdade de medicina da universidade de São Paulo.	André Mota, Maria Gabriela S. M. C. Marinho	CD.G Casa de Soluções e Editora 2012
広島大学名誉教授 (原爆放射線医科学研究所)	渡邊 敦光	Bacteriophages : biology and applications	Elizabeth Kutter, Alexander Sulakvelidze	CRC Press 2005

編集後記

今年もマツダスタジアムで「ピンクリボンdeカープ」が開催されました。乳がんの啓発活動として2004年に始まり、今年が7回目になります。患者支援のNPOが中心となり、複数の企業・団体の協賛を得て、医療専門職者、患者会、県内女性団体、県や市といった行政、そして学生や教員も参加し、検診の大切さと前向きなメッセージを伝えるべくイベントを盛り上げます。そのチームワークたるや見事で、感動すら覚えます。もちろん最初から今のような形が作られたのではなく、継続して行う中で参画する団体・メンバーも増え、組織として成熟する過程を経て実現したものです。

医療の現場でも「チーム」が重要視され、患者・家族を中心として医療に携わるあらゆる職種がメンバーとなり、それぞれが専門性を発揮しながら互いを尊重し、相互に作用、協働することを通じて患者・家族の最良のQOL実現を目指します。

当大学院では、改組から1年余りが経過しました。最初は違和感を持たれた方もおられるかも知れませんが、少しずつ新組織に馴染みこの体制がしっくりくるようになったのではないのでしょうか。難しい課題を持ちつつも、各構成員が目標を共有し有機的に働くことで、今まで成し得なかったことも達成可能になると思います。本誌が「霞チーム」の成果発信と一層の発展に寄与することができれば幸いです。

2013年5月 編集委員 宮下 美香

表紙写真説明

建設の進む新診療棟です。現在別棟にある医科及び歯科の外来などが入り、9月20日（金）に開院予定です。先進的医療の中核基地となります。玄関（写真右）前には大学病院前バス停があり、利便性が高いです。左奥の建物は入院棟です。

（5月4日 基礎社会医学研究棟より撮影）

（撮影・文 武島 幸男 医歯薬保健学研究院 基礎生命科学部門 医学分野 病理学 教授）



2013年(平成25年)6月発行

編集発行 広島大学大学院医歯薬保健学研究院・医歯薬保健学研究科広報委員会

住所 〒734-8553 広島市南区霞一丁目2番3号

電話 (082)257-1598(総務支援グループ)

FAX (082)257-5615

E-mail bimes-bucho-sien@office.hiroshima-u.ac.jp

URL <http://www.hiroshima-u.ac.jp/bimes>

印刷 株式会社ニシキプリント

研究院長・研究科長 小林 正夫

□広報委員会委員(○委員長)

- 坂口 剛正(基礎生命科学部門教授(医学分野))
- 酒井 規雄(基礎生命科学部門教授(医学分野))
- 杉田 誠(基礎生命科学部門教授(歯学分野))
- 松浪 勝義(基礎生命科学部門教授(薬学分野))
- 岡本 泰昌(応用生命科学部門准教授(医学分野))
- 武知 正晃(応用生命科学部門准教授(歯学分野))
- 猪川 和朗(応用生命科学部門准教授(薬学分野))
- 宮下 美香(応用生命科学部門教授(保健学分野))
- 松原 昭郎(統合健康科学部門教授(医学分野))
- 片山 恵子(統合健康科学部門講師(医学分野))
- 竹本 俊伸(統合健康科学部門教授(歯学分野))
- 高橋 真(統合健康科学部門講師(保健学分野))
- 竹中 和子(統合健康科学部門講師(保健学分野))
- 大瀧 慈(原爆放射線医科学研究所教授)